

岩手県埋文センター文化財調査報告書第9集

岩手県埋蔵文化財発掘調査略報

(昭和54年度分)

昭和55年3月

(財) 岩手県埋蔵文化財センター

岩手県埋蔵文化財発掘
調査略報

昭和 54 年 度

序

本年度は、建設省関係、日本道路公団を中心に委託を受け、総調査面積 155,052㎡の調査をいたしました。調査期間終了間際に悪天候に見舞われ、期間の延長の止得なきとなった遺跡もありましたが、委託を受けた建設省関係14遺跡・日本道路公団11遺跡・農政局1遺跡の調査が完了いたしました。

これらの調査のうち来年度への継続調査が6遺跡ございますが、それらを含めて今年度調査に於て多くの成果を挙げ得たものと考えております。縄文時代の遺跡としては、松尾村長者屋敷遺跡の大住居7棟を含む住居址183棟の集落址・岩偶・青竜刀型石器の発見、二戸市上里遺跡における前期人骨7体の検出、盛岡市萩内遺跡の木器、土製鼻等の副葬品の発見、弥生時代遺跡として、二戸市大淵遺跡における住居址の完掘・火行塚遺跡の包含層の検出等、県北地方における弥生時代資料を得ることができました。奈良・平安時代としては、センターとして初の古墳調査を行った金ヶ崎町西根遺跡、木製の櫛の発見や、屋根材に笹竹状のものを用いた安代町扇畑Ⅰ遺跡、平泉期と考えられる遺構が検出された水沢市玉貫遺跡があります。又奈良国立文化財研究所の全面のご指導により萩内遺跡の縄文人足跡33ヶの切り取り保存、上里遺跡縄文人骨の切り取りも行いうことが出来ました。

本報告書は昭和54年度調査の26遺跡に関する概略を収録いたしましたものであります。又調査報告書については、来年度逐次刊行するよう鋭意整理をすすめている所であります。

本書を刊行するに当り、ご指導、ご協力いただきました関係各位に対し、厚く感謝いたしますと共に、今後のご指導を切に願うものであります。

昭和 55 年 3 月

(財) 岩手県埋蔵文化財センター

理事長 新 里 盈

財団法人 岩手県埋蔵文化財センター組織

役員

理事長	新里 盈	(県 教 育 長)
副理事長	古館 尚一郎	(県 教 育 次 長)
常務理事	菅原 一郎	(県埋文センター所長)
理事	土門 隆三	(県 農 政 部 次 長)
〃	佐々木 益人	(県 林 業 水 産 部 次 長)
〃	菊池 岩人	(県 土 木 部 次 長)
〃	森 嘉兵衛	(岩手大学名誉教授)
〃	板橋 源	(岩手大学名誉教授)
〃	草間 俊一	(岩手大学人文社会学部長)
〃	小形 信夫	(学 識 経 験 者)
監 事	熊谷 正男	(県 文 化 課 長)
〃	及川 久男	(県 財 務 課 長)

職員

所 長	菅原 一郎				
総務課長	村木 宏彰	調査課長	瀬川 司男	専門員	光井 文行
庶務係長	岡沢 成治	主任専門員	近藤 宗光	〃	佐藤 勝
主 事	立花 多加志	〃	遠藤 勝博	〃	高橋 文夫
〃	及川 賀子	〃	山口 了紀	〃	松野 恒夫
技能員	佐藤 春男	〃	上野 猛	〃	三浦 謙一
補助員	広瀬 陽子	〃	高橋 信雄	技 師	工藤 利幸
〃	中野 千代子	専門員	鈴木 恵治	〃	中川 重紀
〃	白沢 ケイ子	〃	小平 忠孝	〃	高橋 与右衛門
〃	岩館 富士子	〃	四井 謙吉	〃	本沢 慎輔
		〃	吉田 洋	〃	佐々木 清文
		〃	種市 進	〃	高橋 義介
		〃	高橋 正之		

目 次

I 建設省関係

(1) 大 湊 遺 跡 (二 戸 市)	3
(2) 上 里 遺 跡 (ﾞ)	9
(3) 火 行 塚 遺 跡 (ﾞ)	17
(4) 中 田 遺 跡 (紫 波 町)	25
(5) 古 屋 敷 遺 跡 (ﾞ)	31
(6) 膳 性 遺 跡 (水 沢 市)	37
(7) 玉 貫 遺 跡 (ﾞ)	45
(8) 西 根 遺 跡 (金ヶ崎町)	51

II 御所ダム関係

(1) 萩 内 遺 跡 (盛 岡 市)	61
(2) 下 猿 田 II 遺 跡 (ﾞ)	67
(3) 下 猿 田 III 遺 跡 (ﾞ)	71
(4) 塩ヶ森 I 遺 跡 (ﾞ)	75
(5) 町 場 II 遺 跡 (雫 石 町)	81
(6) 町 場 III 遺 跡 (ﾞ)	87

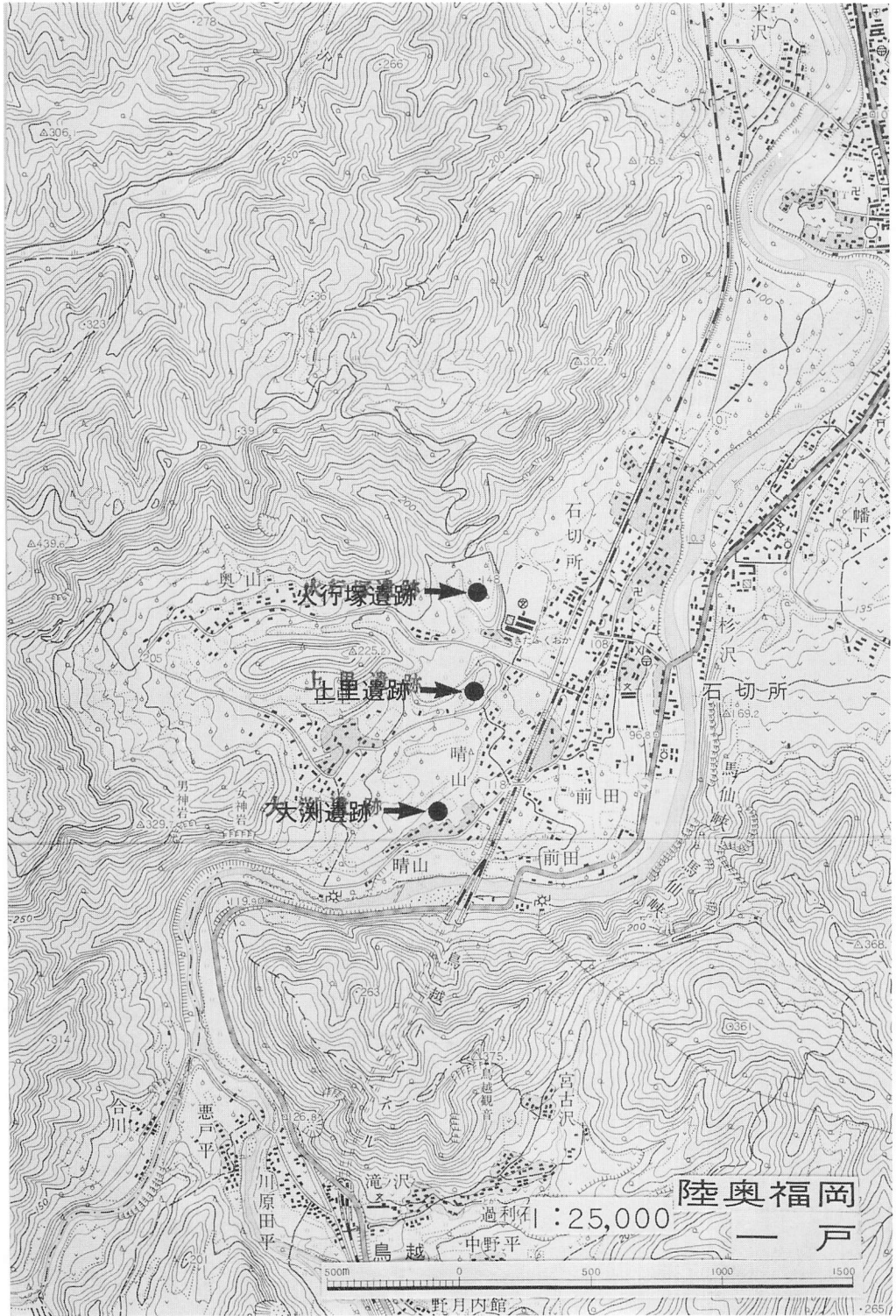
III 道路公団関係

(1) 長 者 屋 敷 遺 跡 (松 尾 村)	94
(2) 赤 坂 田 I 遺 跡 (安 代 町)	102
(3) 赤 坂 田 II 遺 跡 (ﾞ)	108
(4) 安 代 寄 木 遺 跡 (ﾞ)	112
(5) 扇 畑 I 遺 跡 (ﾞ)	114
(6) 扇 畑 II 遺 跡 (ﾞ)	122
(7) 荒 屋 I 遺 跡 (ﾞ)	127
(8) 荒 屋 II 遺 跡 (ﾞ)	132
(9) 有 矢 野 遺 跡 (ﾞ)	140
(10) 上 の 山 X 遺 跡 (ﾞ)	148
(11) 越 戸 II 遺 跡 (ﾞ)	154

IV 東北農政局八戸平原開拓事業関係

(1) 長 倉 No.14 遺 跡 (軽 米 町)	162
---------------------------------	-----

I 建設省關係



二戸バイパス関連遺跡位置図

(1) 大 湊 遺 跡

遺跡所在地	二戸市石切所字晴山
事業主体	建設省岩手工事事務所
調査期間	昭和54年4月9日～6月20日
調査対象面積	4,000㎡
発掘面積	4,000㎡
遺跡記号	O B 79
協力機関	二戸市教育委員会

1. 遺跡の立地

本遺跡は二戸市街地南西約3km、東北本線北福岡駅南西約1kmの所に位置する。東に北上山地、西に奥羽山脈が迫り、その間を馬淵川が流れており、この馬淵川によって開析された米沢段丘上に存在する。標高122mで馬淵川との比高は約28mである。周辺の遺跡としては、西直上にある福岡段丘に大淵遺跡（縄文）が存在し、南西150mに館址、北に上里遺跡・火行塚遺跡がある。

2. 調査の概要

大淵遺跡調査は昭和49年度より開始された二戸バイパス建設予定地内緊急調査の一環として行われた。二戸バイパス建設に伴う遺跡調査は、長瀬C遺跡の一部500㎡を残して、ほぼ54年度で完了した。調査は路線巾内を全域に涉って行った。その結果弥生時代竪穴住居址1棟、方形周溝1、石囲炉1、掘立柱建物跡3棟、溝跡1条、土壇8基を検出精査した。以下調査の概要である。

〈竪穴住居址〉

弥生時代竪穴住居址は、遺跡の南側において検出され、路線内では1棟だけである。プランは胴張りのほぼ方形で、6.9m×6.1mの規模である。壁はしっかりしたものではなく、炭化物の含有と床面の状況によって確認された。炉はほぼ中央部に構築され、90cm×70cmのハート形焼土が存在し、周囲を8ヶの川原石で囲っている。又、一部において石の抜き取り痕が認められた。遺物は床面直上から小型の甕・壺等が出土している。柱穴は確認されなかった。住居址周辺から埋甕が2ヶ所から出土した。この埋甕はいずれも深鉢型で正立しており、1ヶの中には完形の蓋が横位で入っていた。

〈掘立柱建物跡〉

掘立柱建物跡は3棟検出されたが、3間×3間が1棟（南北棟）、3間×2間が1棟（東西棟）、11間×2間で、南に庇をもつ不整いのもの1棟で、時期としては近世のものと思われる。

〈方形周溝〉

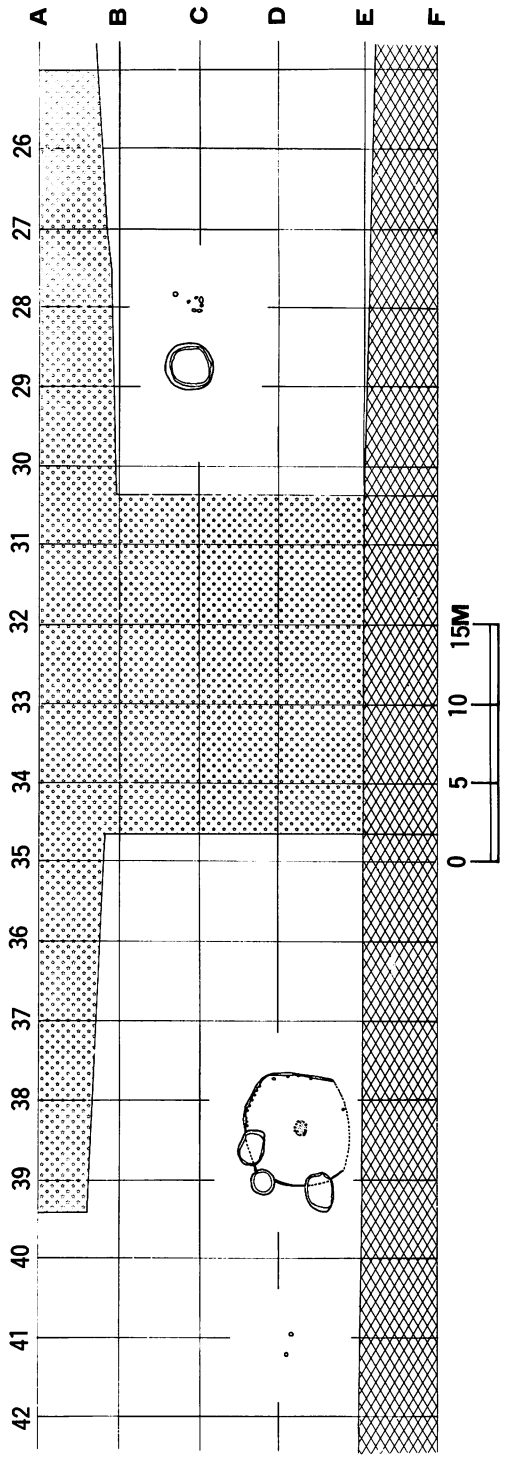
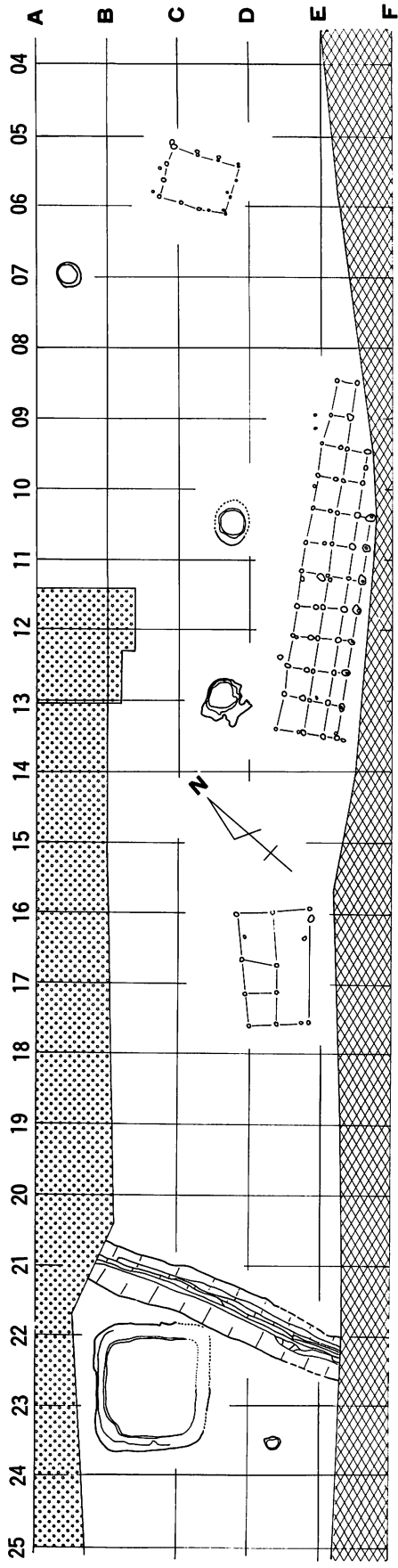
8m×7mの方形周溝で調査区域ほぼ中央で検出された。遺物及び主体部は検出されなかった。県内において、この形状の遺構がしばしば検出されているが、時期・性格共に不明である。

〈その他遺構〉

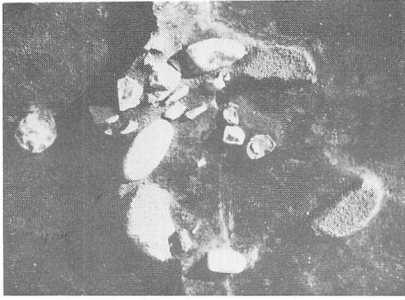
その他の遺構として、縄文時代晩期の石囲炉・中世溝・土壇が検出された。

3. ま と め

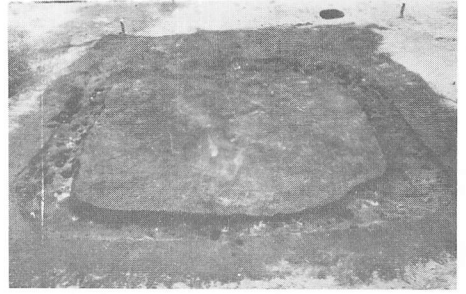
県内における弥生時代竪穴住居址としては、形状、炉、まとまりのある遺物の出土等をはじめの例であり、県内弥生時代研究の貴重な遺跡である。遺跡は住居址東側にのびるものと思われる。



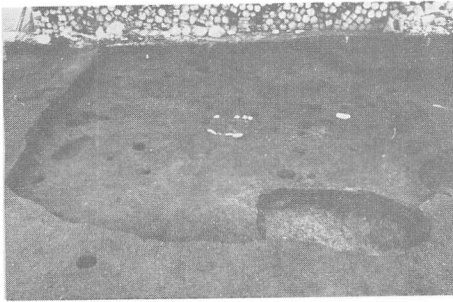
大洲遺跡遺構配置図



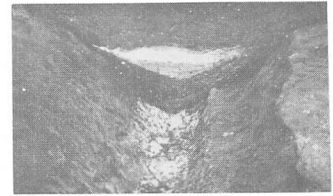
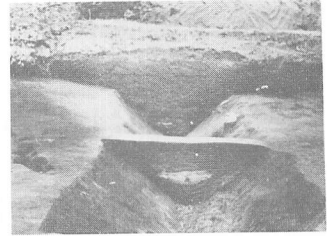
B27 石囲炉址 (縄文晩期)



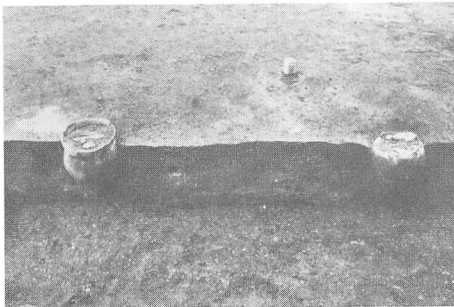
A21 方形周溝 (古代)



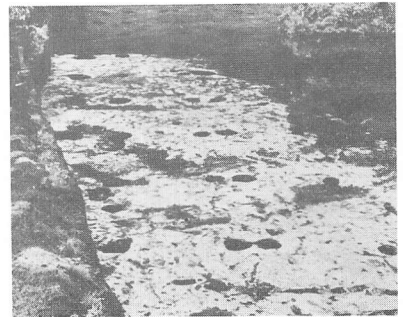
C37 住居址 (弥生)



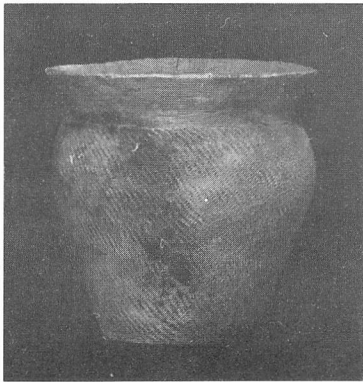
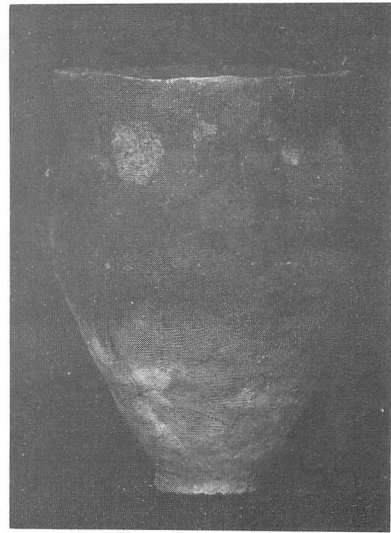
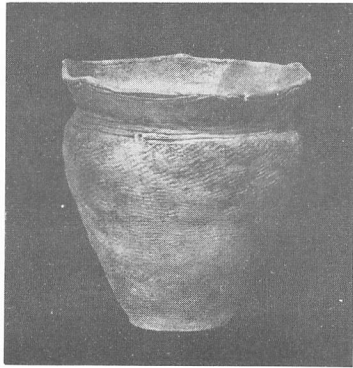
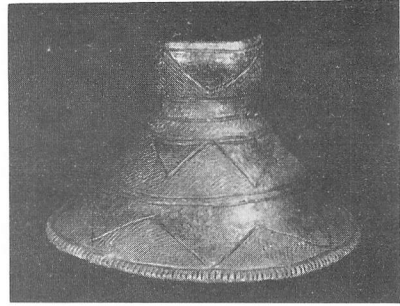
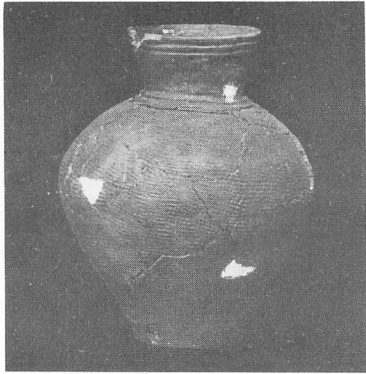
B20 溝址 (中世)



D 40 埋設土器(弥生)



E 08 堀立柱建物跡(近世)



(右・上) D 41埋設土器内出土

(右・下) D 40埋設土器

(左・上~下) C 37住居址出土

(2) 上 里 遺 跡

遺 跡 所 在 地	二戸市石切所字上里地内
事 業 主 体	建設省岩手工事事務所
調 査 期 間	昭和54年4月8日～10月8日
調 査 対 象 面 積	10,000m ²
発 掘 面 積	10,000m ²
遺 跡 記 号	UZ79
協 力 機 関	二戸市教育委員会

1. 遺跡の立地

本遺跡は二戸市街地南西約2.5 km、東北本線北福岡駅南西約0.5 kmの所に位置する。遺跡は小沢によって開析されたシラス台地にのり、福岡段丘面に存在する。本台地の北側は、急峻な崖を呈し、南側は浅い谷となっている。東側は下位段丘との段丘崖となり、西側は堀をはさんで、同位段丘が連続している。馬淵川は東方1 kmの所を北流している。標高140 mで、馬淵川との比高は約50 mである。周辺の遺跡としては、南に大淵遺跡、北に火行塚遺跡がある。

2. 調査の概要

上里遺跡調査は昭和49年度より開始された二戸バイパス建設予定地内緊急調査の一環として行われたものである。調査は当初、粗掘を全面にかけ、遺構検出を行い、大淵遺跡終了後に精査を行う予定であったが、大淵遺跡の遺構数が予想を下廻った事から、引続き精査を行った。その結果、縄文時代前～中期竪穴住居址10棟、平安時代竪穴住居址1棟、中世住居址1棟、フラスコピット類78基、方形又は円形周溝10基、集石遺構1、溝1条、堀1条を検出精査した。以下調査の概要である。

〈竪穴住居址〉

縄文時代住居址10棟が検出されたが、時期的には縄文前期末から中期初頭である。プランは円形・楕円形・長楕円形・長方形と多岐に涉っている。規模は長径が10 mを超えられるもの4棟、5 m前後のもの2棟で他は、雨裂溝によって破壊されたり、路線外に延びており不明である。これら住居址のうち2棟は、5回以上にわたる建換えが行われている。住居址床面は火山灰流堆積層につくられ比較的固くしまっており、前期末から中期初頭にかけての住居址には、周溝が認められ、柱穴は4～6ヶ確認されている。炉は全て地床炉である。

遺物は、床面直上には僅かで、住居廃絶後の堆積土中から大量に出土する。特に1棟の住居址から700個体以上の土器が堆積途中に投棄された状態で出土した。

平安時代住居址の1棟は、隅丸方形プランを呈し、3 m × 4 mの規模で壁高は30 cmである。柱穴は、東西両辺中央壁際に各1本検出された。カマドや炉址は検出されない。遺物は須恵器、壺片や土師質土器片が出土している。中世住居址は、検出面が貼床面であり、竪穴式か掘立柱建物となるか不明である。建物範囲は、固くしまったシルトを貼床としており、それによって判明した。プランは長方形で南辺の東側に1間の張り出し部を持っている。規模は4.5 m × 5.4 mで1 mの張り出し部である。柱穴は壁際に存在し、東西壁が6間で南壁3間、北壁5間である。建物中央部に2ヶの柱穴が南北に並ぶ。壁際の柱は対をなすものが少なく、柱間の間尺も現在までの調査例に比して狭く、形状においては、中世住居址であるが、柱間、貼床について

は今後の検討課題であろう。

〈フラスコピット類〉

フラスコピット類は78基が検出されたが、時期的には縄文時代前期から中期のものであろう。これらのピットは、地域的には4ヶ所に集中分布している。遺跡南側1ヶ所、中央部2ヶ所、北側1ヶ所で、南側と北側は、規模・形状に共通性をもっている。中央部は住居址との切り合いをもつものが多く、他のブロックに比して規模が大きく、深いものが多い。形状は、フラスコ形と、ピーカー形がある。これらのピットからの出土遺物は殆どない。しかし、遺跡中央部西側の縄文時代前期末の住居址廃絶後につくられたフラスコ形ピットから人骨が出土した。このピットは開口部径1.5m、底部径1.7m、住居床面よりの深さ2.5mの規模のもので、住居床面より約2mの深さにおいて人骨が検出された。人骨は頭骨を壁際に置き、胴体部が中央において折り重なるように置かれており、伸展位、屈曲位のものもみられるようであるが、現場における骨の取上げをせずに底部全体を切り離しを行った為、詳細については不明である。個体数は第一面における頭骨数は7ヶであることから7体以上葬られたと考えられる。性別・年齢・死因については現在鑑定依頼中である。

〈周溝遺構〉

周溝遺構は10基検出されているが、方形プランのもの4基、円形プランのもの6基である。円形プランのうち全周するものは2基である。規模では長径5m前後のもの2基、8～10mのもの8基である。時期は周溝埋土中よりロクロ使用土師器坏（内面黒色処理）・須恵器大甕破片等の出土から、ほぼ平安時代中期（9C～10C）と思われる。性格は、墳墓的なものであろうと思われるが主体部が不明である。

〈溝〉

溝は、遺跡中央部を東西に走っているが、原形を保っているのは15m程で、西側は雨裂崩壊を起こしている。この雨裂崩壊によって、縄文時代竪穴住居址1棟、土壇5基が、削られている。

〈堀〉

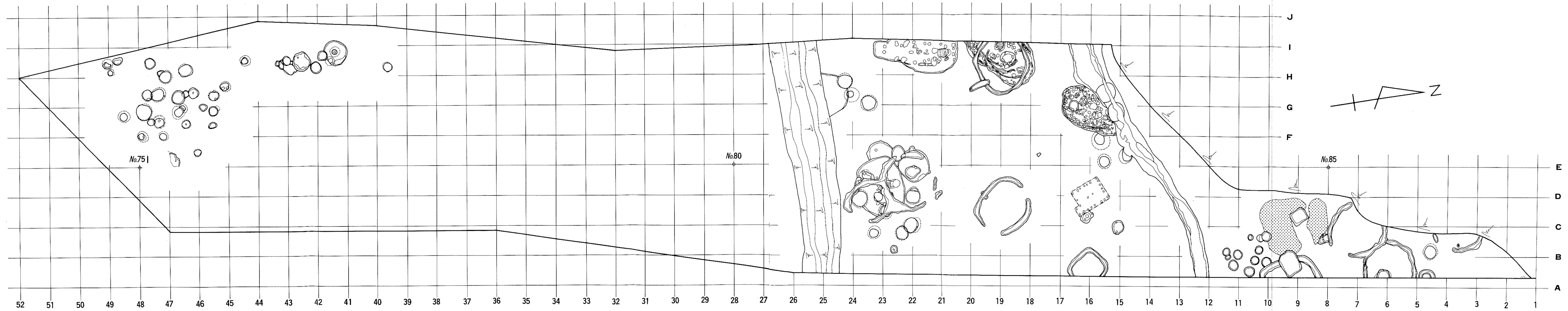
遺跡中央部の段丘崖直下に上巾2.5m、深さ2.0mの堀が調査区域内で検出された。この堀は区域外において、舌端部を巻いて、段丘を南北に切っている。明らかに中世館址に伴う堀であろう。区域内の段丘上、即ち館の平場においては、遺構は検出されなかった。館は単郭で、堀は箱薬研堀である。

〈出土遺物〉

縄文時代早期（ムシリI式併行）、前期（円筒下層c～d式併行）、中期（円筒上層a～c式併行）が多数出土し、晩期（大洞BC式）も完形2個体が出土した。

3. ま と め

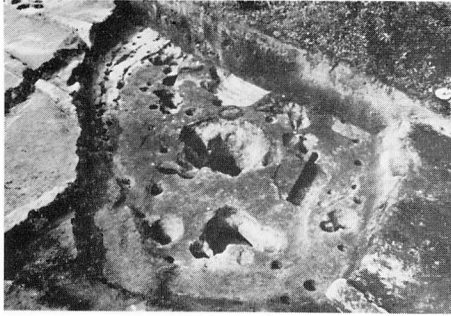
内陸部の人骨の残存や、多数の土器の出土など多くの問題を与えられた遺跡である。



上里遺跡遺構配置図

集石範囲





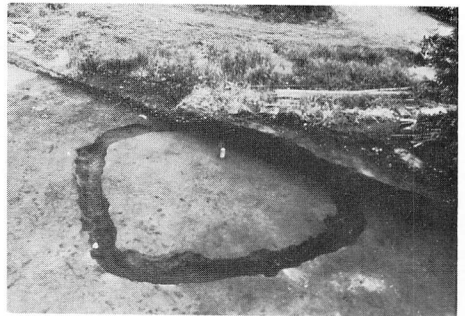
I-19 住居址 (縄文時代)
東より



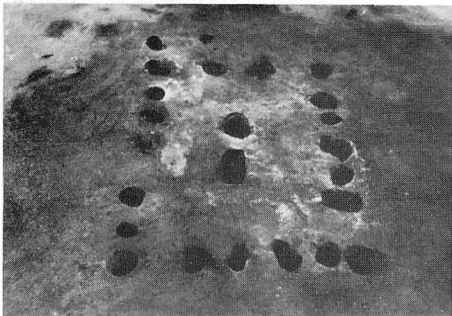
I-19 住居址ピット-1 (縄文墓塚)



B-09 住居址 (平安時代)
西より



A-16 方形周溝遺溝 (平安時代)
南より



D-16 住居址 (中世)
北より



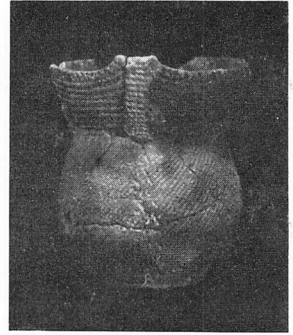
A-12 溝 址 (平安時代)
東より



I-19住居址



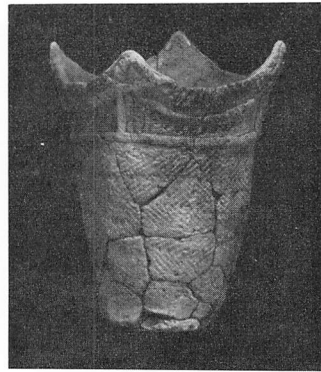
I-19住居址



G-23ピット



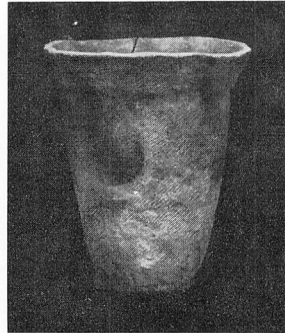
I-22住



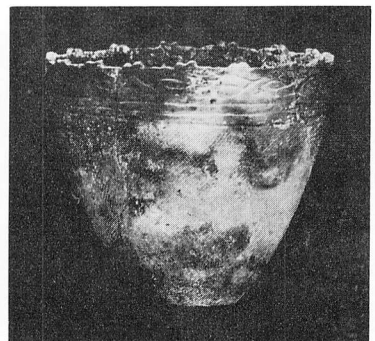
I-19住居址



I-19住居址



I-19住居址



G-44ピット

(3) 火 行 塚 遺 跡

遺 跡 所 在 地	二戸市石切所字火行塚
事 業 主 体	建設省岩手工事事務所
調 査 期 間	昭和54年4月9日～10月15日
調 査 対 象 面 積	5,000㎡
発 掘 面 積	5,000㎡
遺 跡 記 号	H Z 79
協 力 機 関	二戸市教育委員会

1. 遺跡の立地

本遺跡は二戸市街地南西約2.1 km、東北本線北福岡駅西約0.4 kmの所に位置する。遺跡は小沢によって開析されたシラス台地のにり、福岡段丘面に存在する。この台地の東・西・南は急勾配な崖状を呈しており、北は山地に連続する。標高は147 m前後で、馬淵川との比高は約60 mである。

周辺の遺跡としては、南側に大淵遺跡・上里遺跡があり、北東に中曽根遺跡がある。

2. 調査の概要

本遺跡の調査は、昭和49年度より開始された二戸バイパス建設予定地内緊急調査の一環として行われたものである。本年度の調査予定としては、4月より路線内遺跡全域に粗掘をかけて遺構を検出して終了する予定であったが、大淵遺跡の調査が予想以上に進展し、火行塚遺跡の精査見通しがたち、7月より精査を開始した。本遺跡の遺構検出面は、南部浮石層をはさんで二面に分かれ、第一面からは平安時代竪穴住居址9棟と弥生式土器包含層、周溝遺構6基、土塚3基が検出された。第二面からは縄文時代前期竪穴住居址2棟が検出された。

以下調査の概略である。

〈竪穴住居址〉

竪穴住居址は11棟精査した。このうち縄文時代竪穴住居址2棟、平安時代9棟である。

縄文時代住居址は、南部浮石を切り込んでつくられており、規模は2.5 m × 2.2 m、壁高30 cmの隅丸長方形のプランを呈し、中央部に柱穴が存在する。床面より縄文時代前期の土器片が数点出土した。時期は縄文時代前期と思われる。

平安時代竪穴住居址9棟で、調査範囲南側に3棟、中央部やや北側に6棟検出され、中央部付近が空間となっている。プランは、隅丸方形又は方形であり、規模は最大で6.8 m × 6.5 m、最小3.2 m × 2.8 mで、一辺4 m前後のものが多い。壁高は15 cmのものが1棟で他は60 cm前後と平安期のものとしては比較的深い。柱穴は最大の住居址から4本検出された以外は、検出されていない。床は八戸火山灰まで掘り込まれ比較的固い。周溝は一部にあるもの2棟のみで、他は検出されていない。カマドは、袖部に石（凝灰岩）を用い、シルトを張りつけており、煙道部はくりぬきのトンネル式で、煙出部へ下り勾配となる。カマドの位置は、いずれも西壁中央部である。又、つくりかえなどは見られない。埋土に十和田a降下火山灰の堆積が認められるものが6棟確認され、堆積状況は、いずれも床面近くに厚くレンズ状となっている。出土遺物は土師器・須恵器・土製品・鉄器である。これらの出土遺物から見て、時期差は住居址間では考えられず、ほぼ同時期の集落と考えられる。

〈周溝遺構〉

周溝遺構は6基検出され、プランは方形1基、円形5基である。規模は方形周溝が一辺10mで深さ60cm前後である。円形周溝は5m前後で深さ約30cmである。方形周溝は調査区域北側西端で検出され、東辺と南辺のみ区域内であり、東辺の北端部で切れている。埋土には十和田a降下火山灰がブロック状に入り、平安期の住居址を切っている。円形周溝の多くは、調査区域北側東端で検出された。周溝は全周するが、内部には何らの施設を持たない。溝埋土から土師器片が出土する。時期は平安時代と思われる。

〈土 壇〉

調査区域南側より2基、北側より1基、計3基検出された。南側土壇プランは楕円形で、規模は2.2m×2.4m、深さ1mである。底面はフラットで、柱穴等はない。埋土に十和田a降下火山灰を含んでいる。底面の壁沿いからカヤと思われる炭化物・焼土・炭化材が出土し、埋土から少量のロクロ未使用土師器片が出土した。性格不明。

〈弥生式土器包含層〉

調査区域北側の中軸西に広がりをもって検出された。この区域は、沢状となっており、黒ボクの堆積が深い地区である。遺物の出土面は十和田a降下火山灰の自然堆積面の直下である。第二層の黒ボク層約30cmである。出土の土器片はいずれも細片で、固まったの出土はなく、全体的に細片が散布している状態である。これらの細片の中には、一部接合できるものもある。又、僅かではあるが、包含層下部から縄文時代晩期大洞A・A'式の細片が出土した。時期としては弥生時代中期のものが多い。尚、弥生式土器に伴う遺構は検出されなかった。

〈出土遺物〉

出土遺物は縄文土器・弥生式土器・土師器・須恵器・石器・鉄器・土製品である。

縄文土器は、住居址から前期の破片が出土し、他に中期、晩期があるが遺構とのかかわりがなく、いずれも細片である。石器は石鏃・石槍・石錐が出土した。

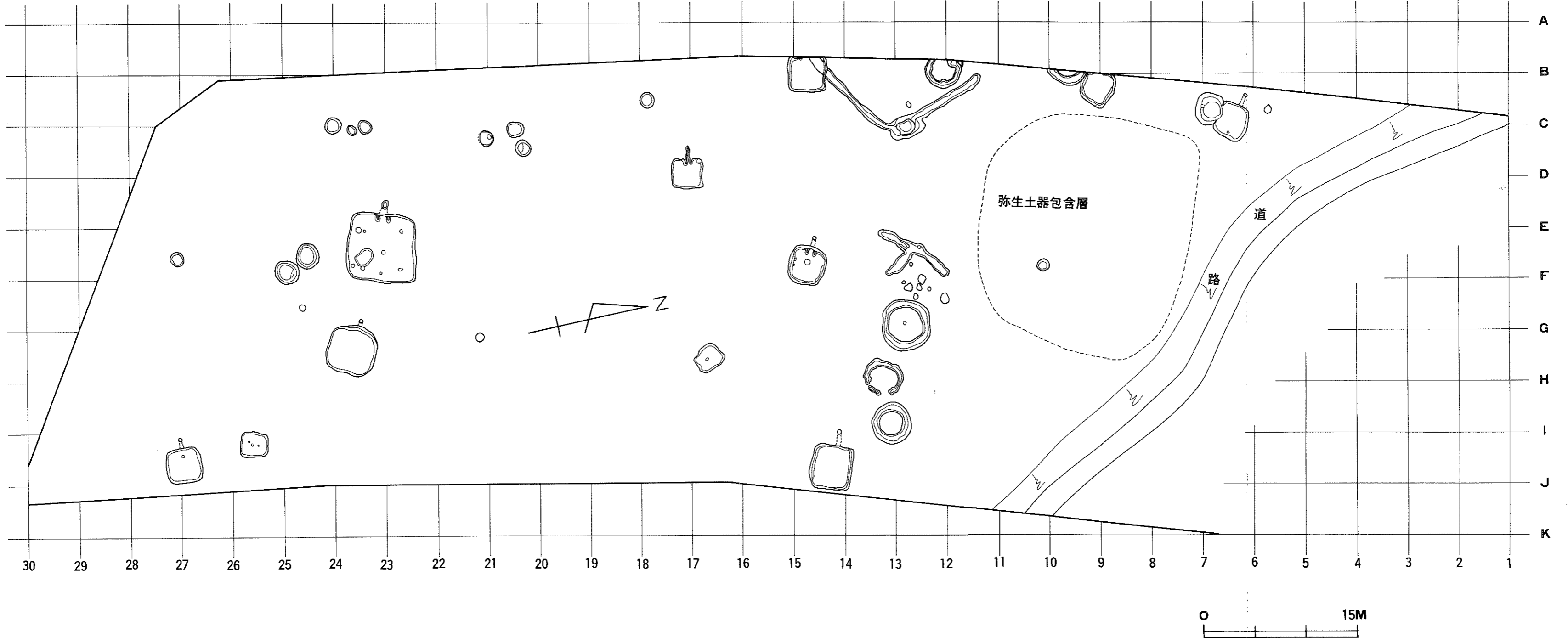
弥生式土器は前述した。

土師器はロクロ未使用の坏・甕、ロクロ使用の坏・甕である。坏のうち1点は墨書土器である。須恵器は坏と甕である。

鉄器は住居址から釘・鎌が出土した。土製品としては、平安期の住居址から紡錘車・土玉が出土し、弥生式土器包含層から、スプーン状土製品・ミニチュア土器が出土した。

3. ま と め

大淵遺跡と共に弥生式土器片が出土し、二戸地方における弥生時代の解明に大きな役割を果たすものと思う。又、青森県とのつながりもつかめるかも知れない。平安時代の一時期の集落として、住居配列について非常に興味ある資料を得る事ができ、二戸地方の古代史解明の一助になりたい。



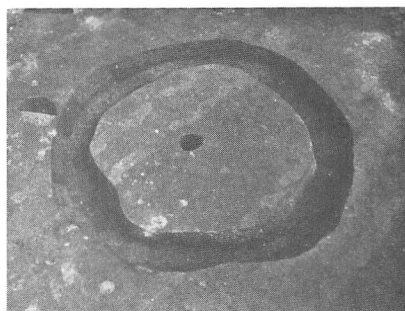
火行塚遺跡遺構配置図



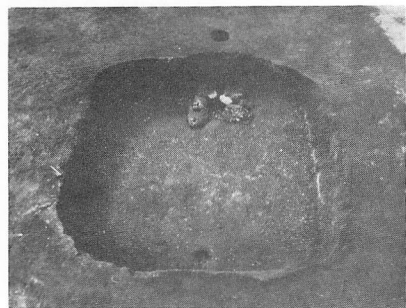
遺跡航空写真（北側より）



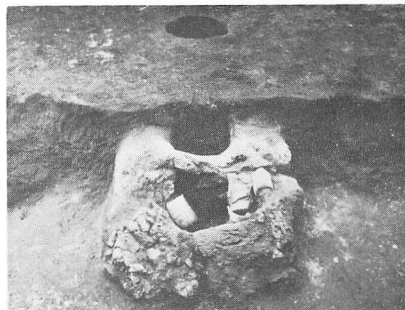
I-25 住居址（縄文）



F-12 円形周溝



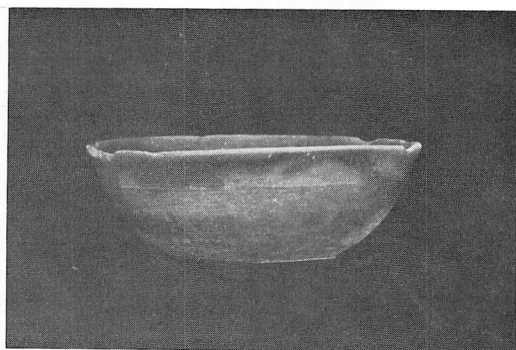
F-23 住居址



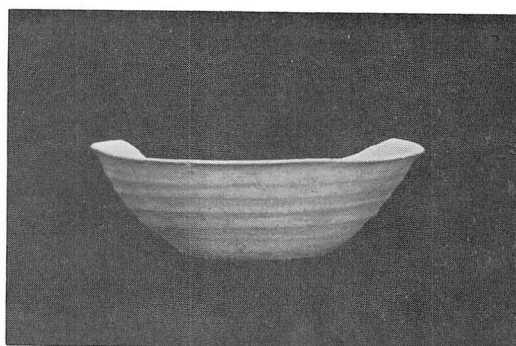
I-26 住居址 カマド



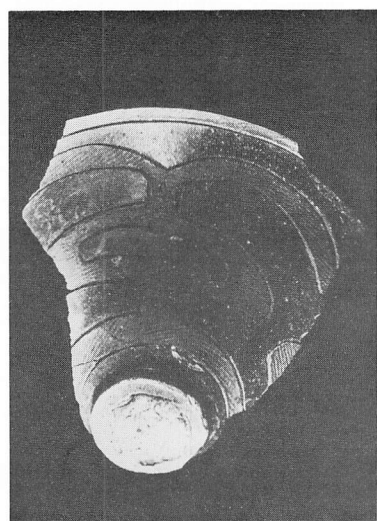
I-13住出土甕



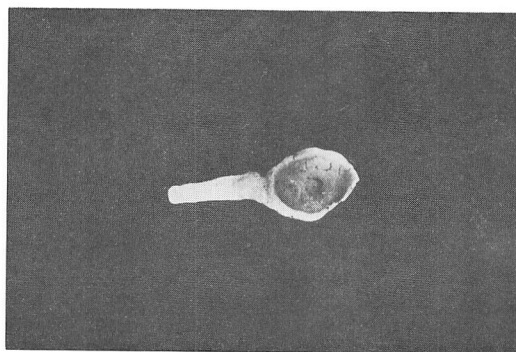
I-13住出土 墨書坏



C-16住出土 坏



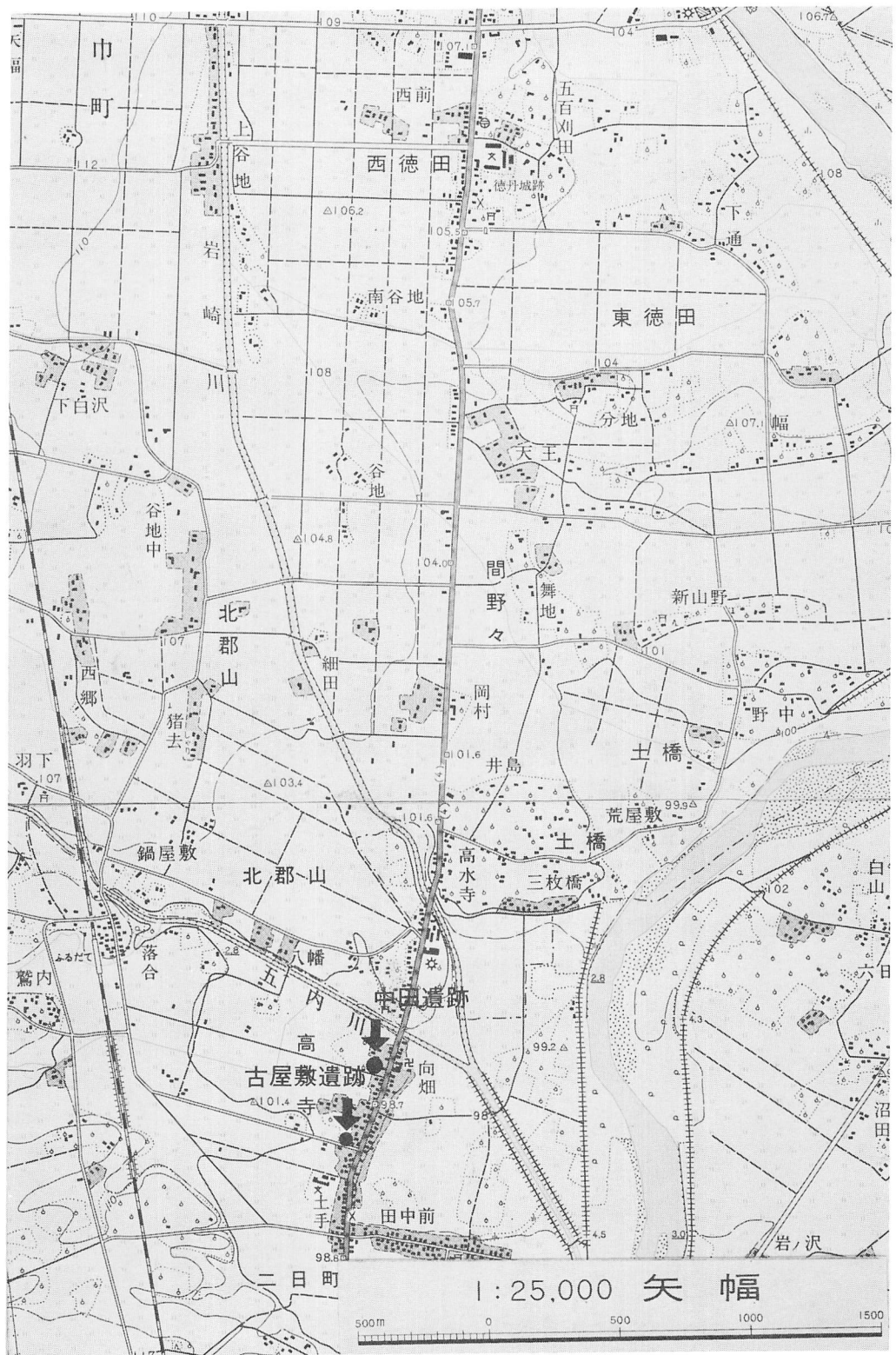
弥生式土器



スプーン状土製品

(4) 中 田 遺 跡

遺跡所在地	紫波郡紫波町高水寺字中田
事業主体	建設省岩手工事事務所
調査期間	昭和54年4月9日～6月30日
調査対象面積	2,700㎡
発掘面積	2,700㎡
遺跡記号	NKD79
協力機関	紫波町教育委員会



矢巾拈幅関連遺跡位置図

1. 遺跡の立地

本遺跡は、東北本線日詰駅北4.0km、紫波町の市街地より北2.0kmに位置する。北上川の支流五内川によって開析された都南段丘の崖縁沿いに立地している。標高100mで五内川との比高は2.8mである。周辺の遺跡としては、北側に稲村遺跡、南側に古屋敷遺跡があり、東側には、日詰館（城山）が存在する。

2. 調査の概要

本遺跡は、国道四号線の矢巾拡幅工事に伴う緊急事前調査である。昨年度は、遺構検出のみを行い、精査は今年度行うことにしたものである。昨年度検出された遺構を精査した結果、平安時代竪穴住居址7棟、溝跡5条、竪穴状遺構1基、陥し穴状遺構1基、ピット等4基となった。以下調査の概要である。

〈竪穴住居址〉

精査した7棟の竪穴住居址はロクロ使用の土師器を伴出する。7棟のうち、路線外にまたがるもの2棟で他の5棟は完掘できた。しかしこれらの住居址の大半は、溝や後世の攪乱によって一部を破壊されている。プランは方形で、規模は、一辺5m前後4棟、3.5m前後3棟である。床面は比較的しまりをもっている。貼床をしているものが4棟ある。柱穴は1棟の住居址で確認されている。カマドは、東壁につくられ、中央部ではなく、どちらかに片寄っている。袖部は川原石を芯にするものと、甕形土器を芯にするものが認められた。煙道はほぼ平坦で煙出部でやや落込みがある。煙道部は、くり抜きと掘り込みとがある。出土遺物はロクロ使用土師器である。住居址間の重複はみられなかった。

〈溝跡〉

溝跡はいずれも住居址より新しく、出土遺物も少ない。幅は1.6m～0.9m、深さ42cm～21cmで、東西方向のものと北東～南西方向に走るものがある。時期は住居址廃絶後であるがどこまで下るか不明。東西方向に走る溝に柱穴状のものが配列されていた。

〈陥し穴状遺構〉

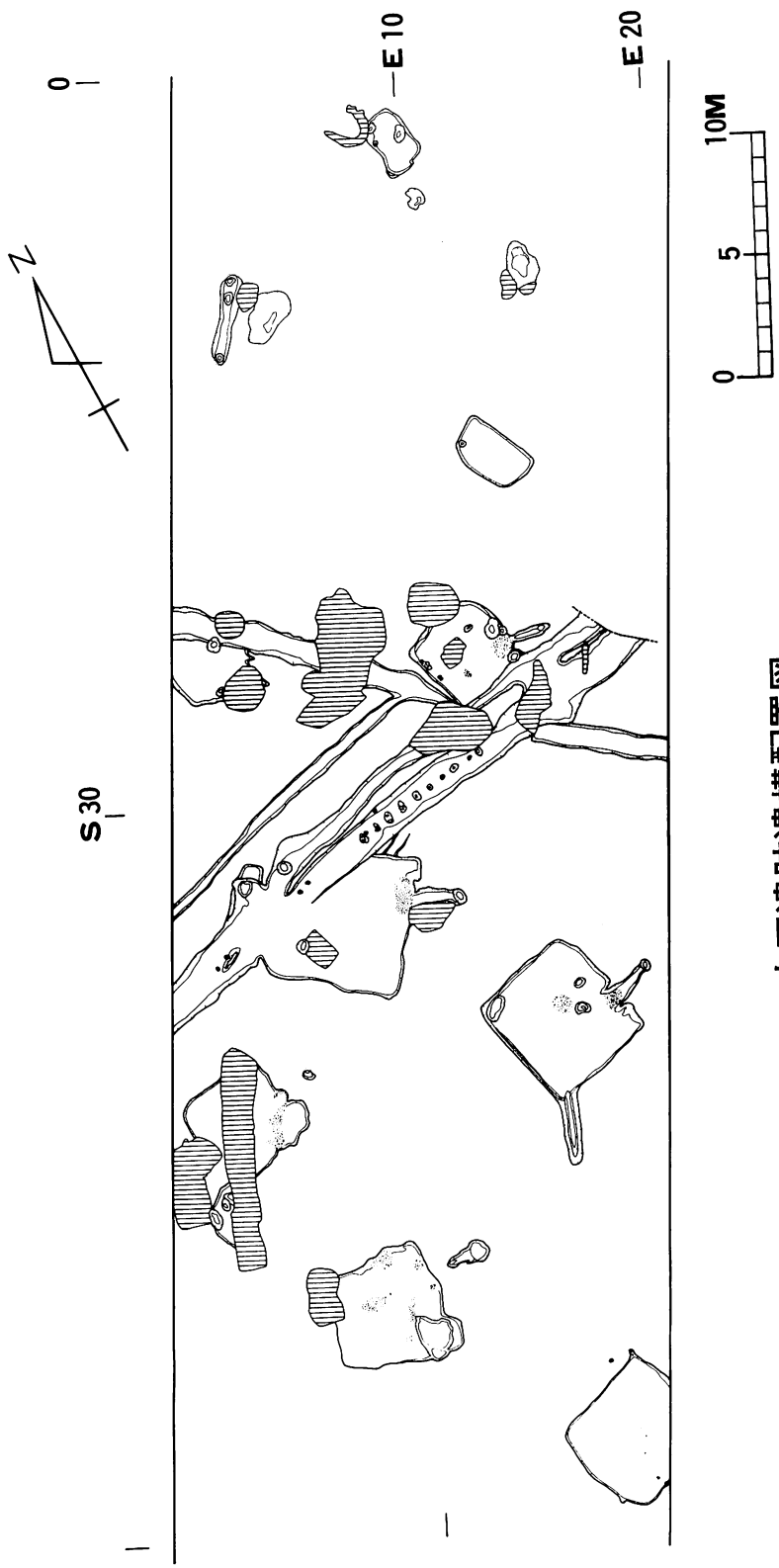
路線内東側に住居址によって切られた形で1基検出されている。長軸3.7m、短軸0.5m、深さ0.6mで底部両端が奥にえぐり込まれている。

〈竪穴状遺構〉

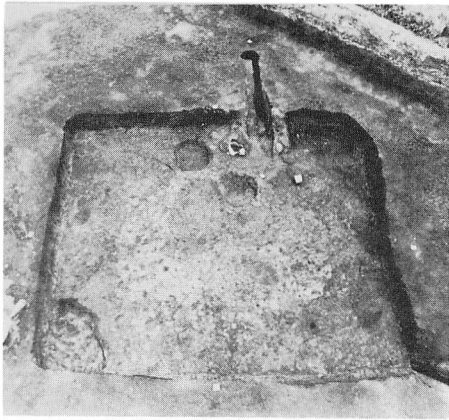
プランは長方形で規模は3.2m×2.0m、壁高11cmである。住居址に比べて浅く、カマド・炉跡・柱穴も検出されない。

3. まとめ

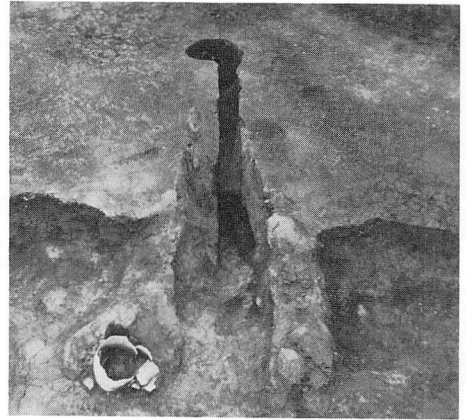
前年度調査の稲村遺跡がロクロ未使用期であり、五内川をはさんでロクロ使用期のものが検出された事は、時期による占地の違いなのか今後の課題である。



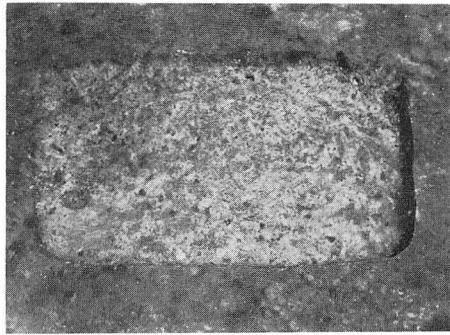
中田遺跡遺構配置図



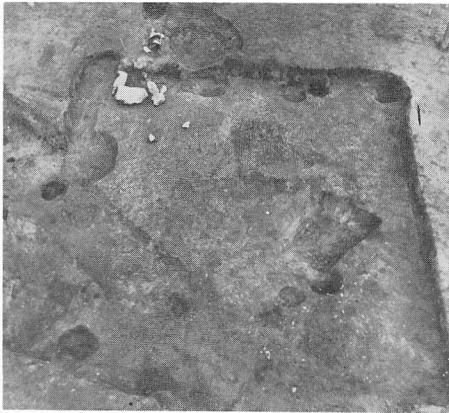
B-4住居址



B-4住居址 カマド



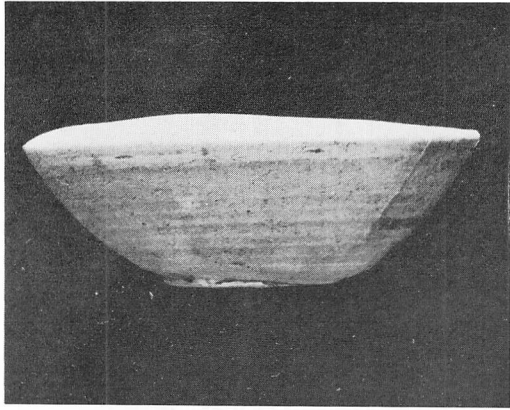
A-51住居址状遺溝



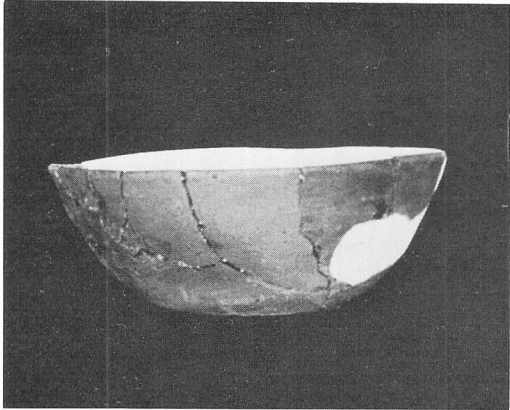
B-2住居址



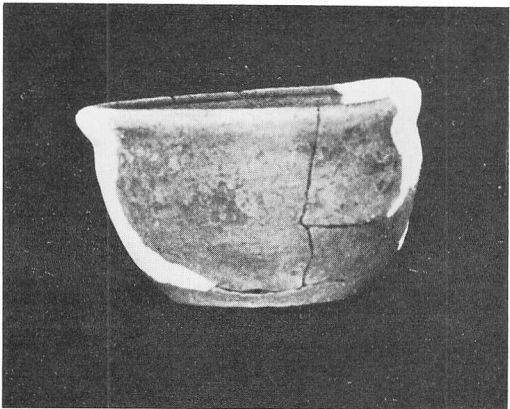
B-2住居址 カマド



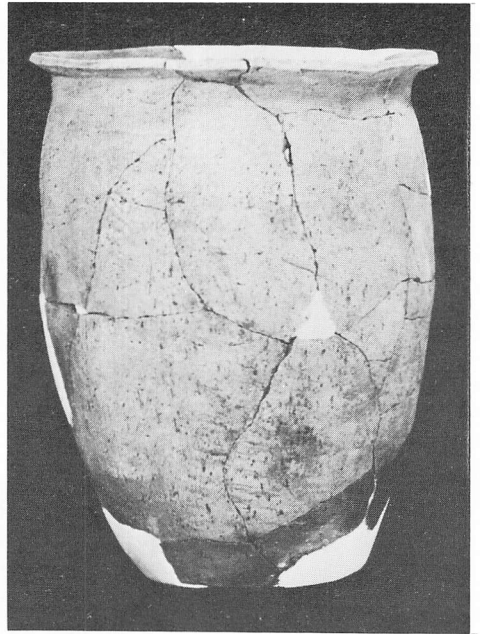
B - 1 住居址



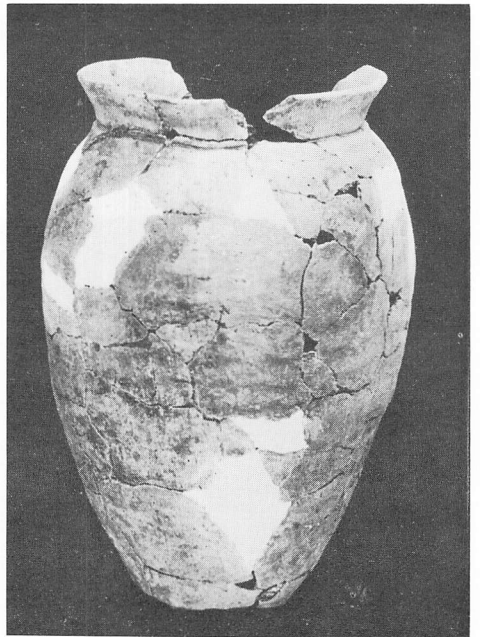
B - 2 住居址



B - 2 住居址



B - 1 住居址



B - 4 住居址

(5) 古 屋 敷 遺 跡

遺 跡 所 在 地	紫波郡紫波町高水寺字古屋敷
事 業 主 体	建設省岩手工事事務所
調 査 期 間	昭和54年4月9日～6月30日
調 査 対 象 面 積	1,700㎡
発 掘 面 積	1,700㎡
遺 跡 記 号	F Y 79
協 力 機 関	紫波町教育委員会

1. 遺跡の立地

本遺跡は東北本線日詰駅北3.5 km、紫波町の市街地から1.5 kmの所に位置する。北上川の支流五内川によって開析された都南段丘上に立地する。中田遺跡と同位段丘であるが、小支谷が中間に形成されている。標高100 mである。

2. 調査の概要

本遺跡の調査は、国道四号線の矢巾拡幅工事に伴う緊急事前調査である。昨年度に粗掘、遺構検出を行っており、本年度は精査を行った。昨年度検出された遺構を中心に精査を行った結果竪穴住居址8棟、掘立柱建物跡1棟、竪穴状遺構2基、方形周溝1基、ピット4基等であった。

以下調査の概略である。

〈竪穴住居址〉

精査した8棟の住居址はロクロ使用の土師器を伴出する。8棟のうち路線外にまたがるもの3棟、完掘できたもの5棟である。1棟をのぞいていずれもカマド位置は伴明している。プランはいずれも方形で、最大規模7.3 m × 6.1 m、最小規模3.4 m × 3.3 mである。床面は平坦で固いが、部分的に貼床しているのも含めると全住居址に貼床が認められる。柱穴は最大規模の住居址（拡張以前）に4本認められる。カマドは東壁につくられているもの4棟、北壁1棟、南壁2棟、不明1棟である。いずれも中央部にはなくどちらかに片寄った位置につくられている。袖部はシルトで構築されている。煙道部はほとんどが掘り込みと思われる。

〈竪穴状遺構〉

プランはほぼ方形で、規模は一辺2 m以下である。カマド・炉・柱穴が検出されず、遺物も破片のみである。

〈方形周溝〉

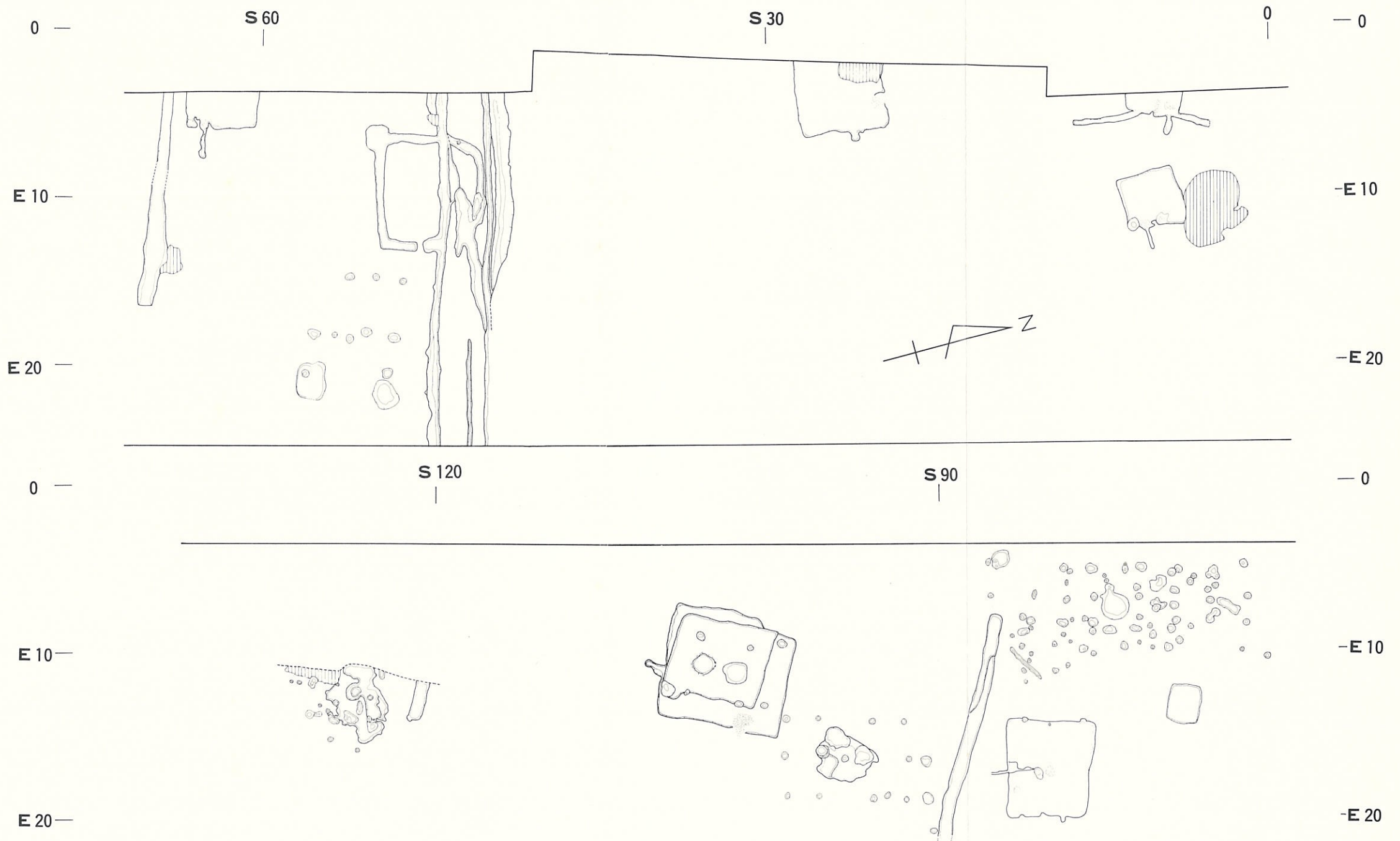
遺跡のほぼ中央において検出された。プランはやや長方形で、規模は外周6.9 m × 4.3 m、東西方向に長軸がある。溝巾は50 cmで深さ13 cmである。溝は東側において途切れている。溝埋土から土師器・須恵器片が出土し、内部施設はない。時期・性格は不明。

〈出土遺物〉

出土遺物は、土師器・須恵器・鉄器である。土師器はすべてロクロ使用で坏・甕が出土している。坏は内面黒色処理が多く、甕は体部破片のみである。須恵器は坏・甕で、坏は底部回転糸切り無調整が主である。甕は体部破片のみで内外面にタタキ目をもっている。鉄器は鎌と刀子が出土している。

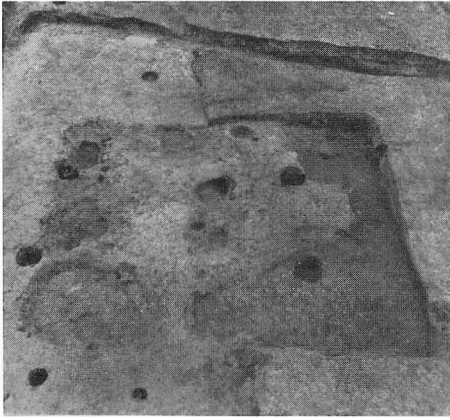
3. ま と め

中田遺跡と同時期の集落と考えられる。紫波地方の平安期の良好な資料である。

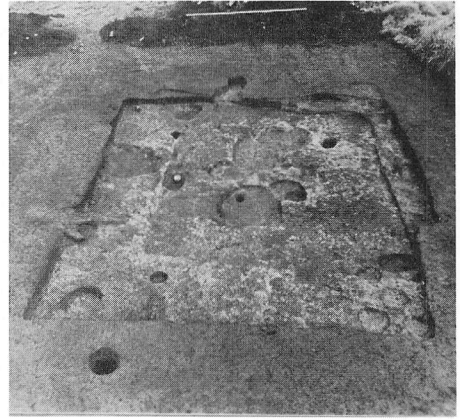


古屋敷遺跡遺構配置図

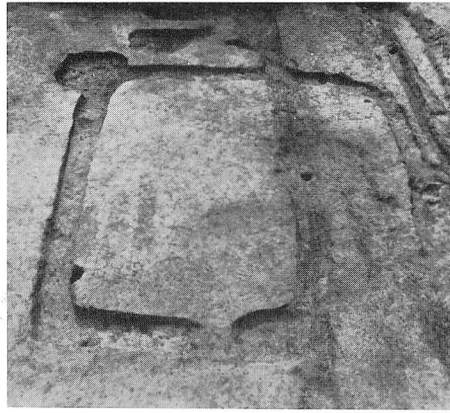




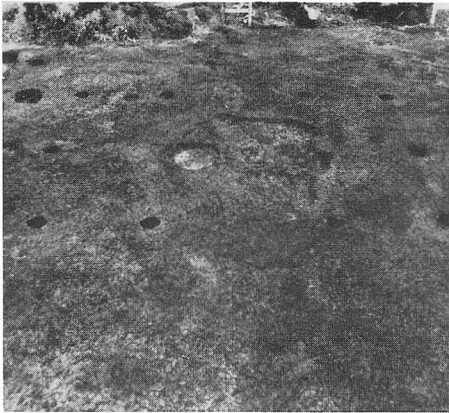
C-2住居址



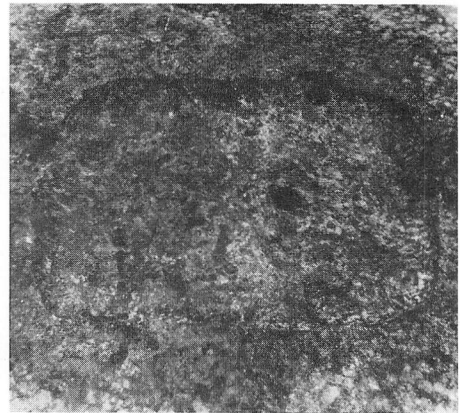
D-1.D-2a.D-2b住居址



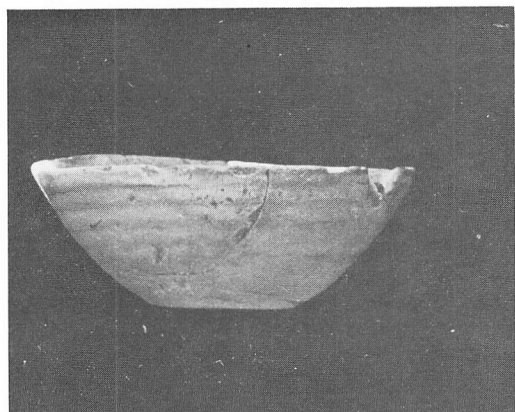
B-201方形周溝



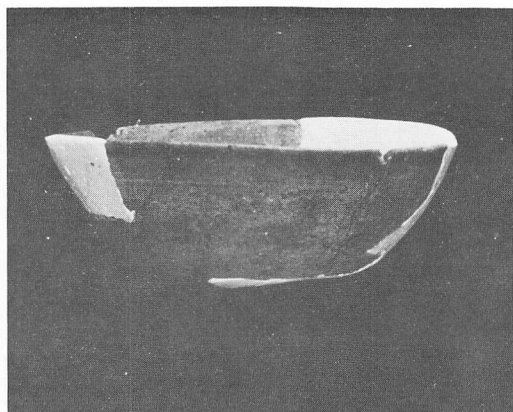
掘立柱 建物跡



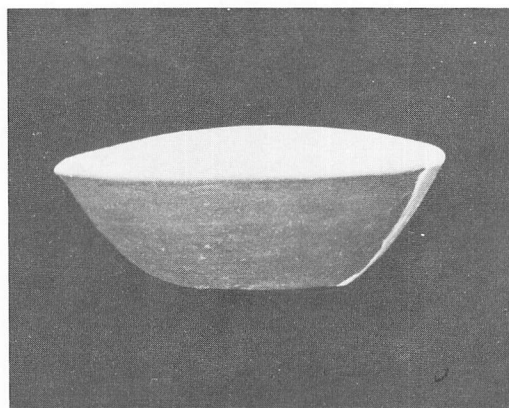
C-51住居址状遺構



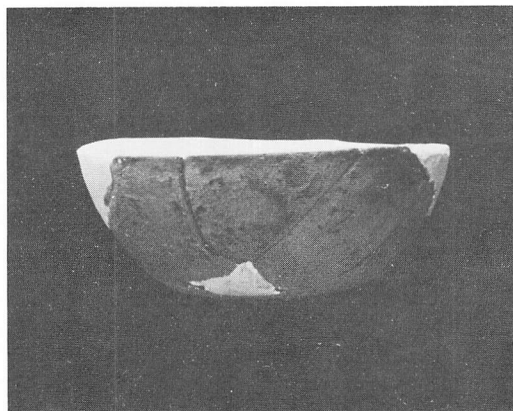
A - 1住居址



A - 3住居址



C - 2住居址



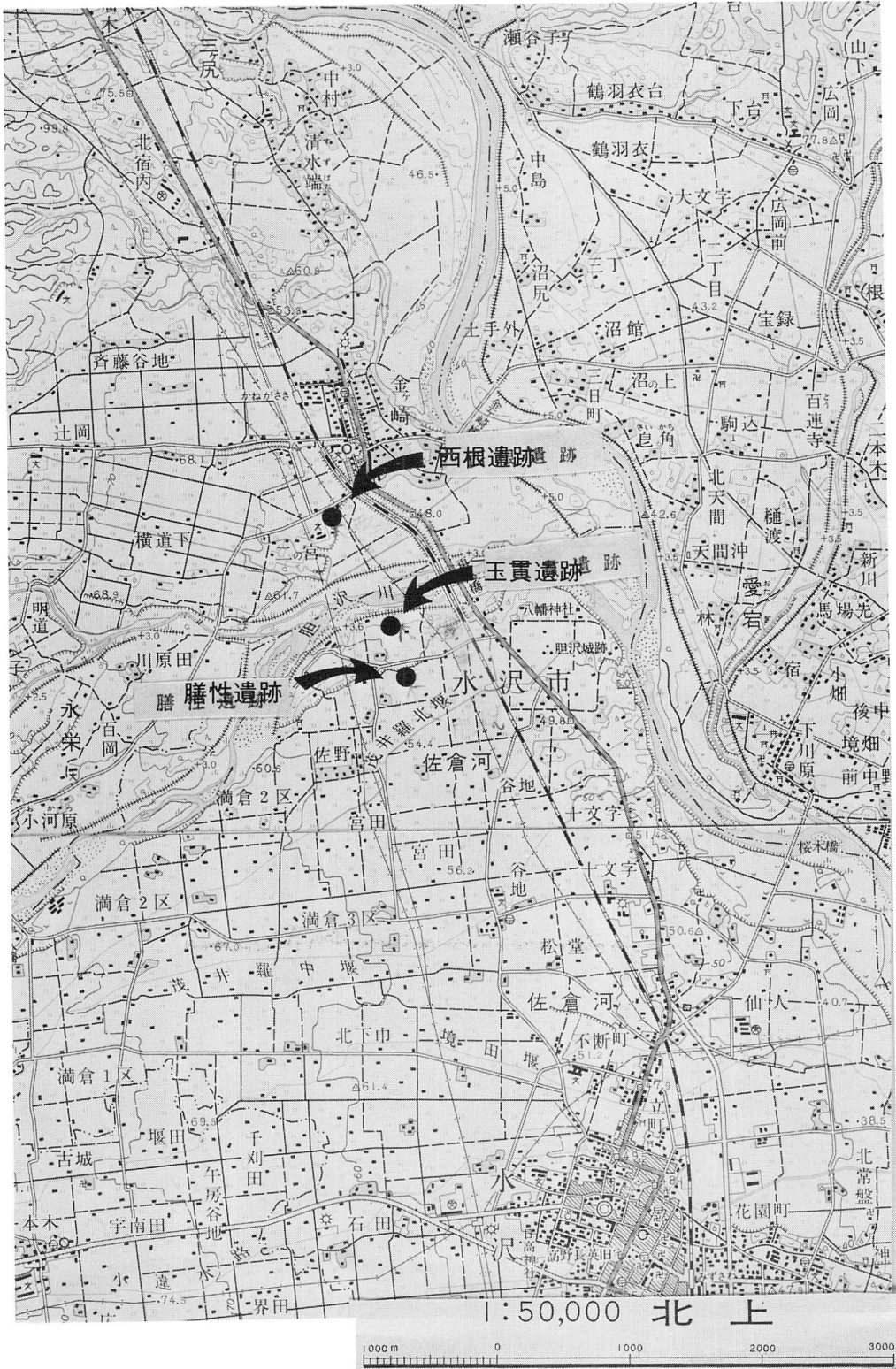
C - 2住居址



D - 1住居址

(6) 膳 性 遺 跡

遺跡所在地	水沢市佐倉河字膳性
事業主体	建設省岩手工事事務所
調査期間	昭和54年4月9日～11月26日
調査対象面積	4,700㎡
発掘面積	1,140㎡
遺跡記号	ZS-79
協力機関	水沢市教育委員会



金ヶ崎バイパス関連遺跡位置図

1. 遺跡の立地

本遺跡は、東北本線水沢駅北 4.5 km、胆沢城跡真西 1 kmの所に位置する。胆沢川によって形成された胆沢扇状地の扇端部に近い北側の縁辺部の段丘崖沿いに立地している。段丘区分では、胆沢扇状地の下位段丘水沢段丘に立地する。標高53.8m、胆沢川との比高7mである。

周辺の遺跡として、玉貫遺跡・胆沢城跡・高山遺跡・今泉遺跡・東大畑遺跡がある。

2. 調査の概要

本遺跡の調査は、金ヶ崎バイパス建設工事に伴う緊急事前調査である。調査は昭和53年度より開始され2年目である。昨年は全域に粗掘をかけ、一部調査を行った。本年は、第1次調査を4月から6月にかけて行い、第2次調査を10月、第3次調査を11月に行った。3次にわたったのは、工事の進行に合わせるためである。その結果、第1次調査竪穴住居址9棟、溝2条、土坑2基、第2次調査、竪穴住居址4棟、第3次調査竪穴住居址12棟、溝5条、ピット40数ヶを検出精査した。以下調査の概略であるが、包括した形でのべる。

〈竪穴住居址〉

竪穴住居址は伴出する遺物によってロクロ未使用土師器伴出竪穴住居址15棟、ロクロ使用土師器伴出竪穴住居址10棟に大別される。

ロクロ未使用期の住居址プランはほぼ隅丸方形である。最大規模9.0m×8.5mで最小規模一辺2.5mである。床面は地山シルト面を利用し固くしまっており、周溝の存在が確認されるものと、されないものがある。最大規模の住居址は、拡張が認められるが、そのどちらにも東側柱間に間切り溝が認められる。この住居址は出土遺物においても特異な存在である。柱穴は4本が主体で明瞭な掘り方をもっている。柱穴の確認されないものが4棟あり昨年度調査未使用期と異なる。カマドは、北壁中央部にある。袖部は地山のケズリ出しによってつくられ、袖部先端に立石を用い、上部に横架していると推定される。燃焼部の支脚には川原石を用い土器を2ヶ並列している例も見られ、この場合右側は鉢形土器、左側は甕形土器を用いることが多い。煙道部は0.9m～2.0mの長さをもっており、ほぼ平坦か、緩かな傾斜である。天井部は耕作による削平のため不明なものもあるが、トンネル式のもの、掘り込み式のものが認められる。掘り込み式のもの、天井部に部分的に川原石を用いていたもの、甕形土器片を用いたものがある。出土遺物は土師器が主でカマド右側から多く出土する。最大規模の住居址からは須恵器の高坏が出土している。ロクロ使用期の住居址10棟は、ロクロ未使用期住居址を埋め立て又は、埋没後につくられているものが多く、床面の検出は、未使用期よりも浅い所でなされる。住居址プランは方形で、一辺4.5m前後であり、床面はほとんどが貼床で黒色土とシルトの混合土

である。柱穴をもつものは1棟のみで3ヶしか検出されなかった。カマド位置の判明しているものは、全て東壁につくられているが、どちらかに片寄っている。袖部はシルトによって構築されており、川原石等の使用は認められない。煙道は長く、2.0mであり傾斜はほとんどない。

〈溝 跡〉

溝跡は8条検出精査したが、完掘したものは1条もない。1条は、昨年度部分的に調査した継続であるが、今年度も完掘できず来年度に持ち越した。新たに調査した溝も、いずれも来年度に持ち越した。時期的には、住居址よりも新しいと考えられる。

〈土 塚〉

径80cmの不整円形状ピットで深さは10cmである。底面に細かい炭化物がしきつめた様な状態で検出された。遺物は、ロクロ使用土師器の細片のみである。

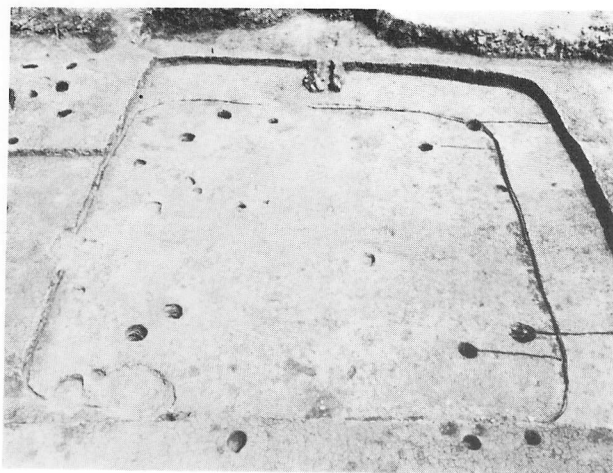
〈出土遺物〉

出土遺物としては、土器・石器・鉄器・土製品がある。土器としては、縄文式土器（晩期）・土師器・須恵器である。縄文式土器は埋土からの出土で細片である。土師器は、ロクロ未使用のものとロクロ使用のものに分けられる。ロクロ未使用の土師器は器種としては、坏・高坏・甕・壺・甑・鉢である。坏は内面黒色処理と無処理の2種類で、更に無処理には内外面ともに朱塗りを施したものがあり、外面有段丸底である。高坏も坏と同様である。甕は長胴のもので頸部に段を有するものが多く、体部は内外面とも刷毛目が認められる。壺は大型・小型があるが、体部が強く張り出しており、刷毛目が認められる。甑は無底のものが出土している。ロクロ使用土師器の器種は坏と甕である。坏は内面黒色処理のものと処理をしていないものがあり、底部切り離しは回転糸切り無調整である。甕は、完形はなく破片が多いが、須恵器の系統と思われる小型の甕が出土している。石器は石剣1点が住居址埋土から出土している。鉄器はロクロ使用期の住居址から多く出土している。鉄斧が1点みられるが、他は殆どが刀子と思われる。土製品は、紡錘車と有孔土玉である。

3. ま と め

昨年度調査区域の南側と東側の一部を調査したが、北側段丘縁に近い所ほど全面的に切り合い関係が認められ、段丘縁を離れるに従って単独の形で検出された。一辺4m前後の住居址が平均値であるが、9mを越える大型住居址の存在は、奈良時代における集落構成を解く一つの鍵と考えられる。更に来年度も約3,700㎡の調査を残しており、40棟前後の竪穴住居址が存在するものと思われる事から、遺跡全域における住居数は80棟を越え一大集落を形成しており、一時代における集落の変遷に何らかの手がかりが得られるものと考えている。





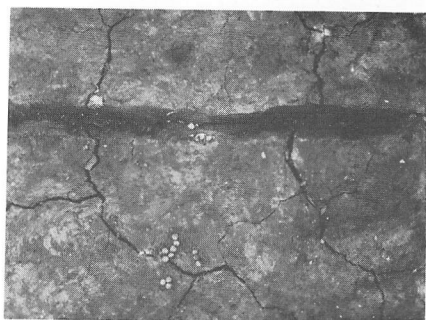
D-8-1住居址・D-8-2住居址
(南より)



D-8-1住居址
青銅器出土状況



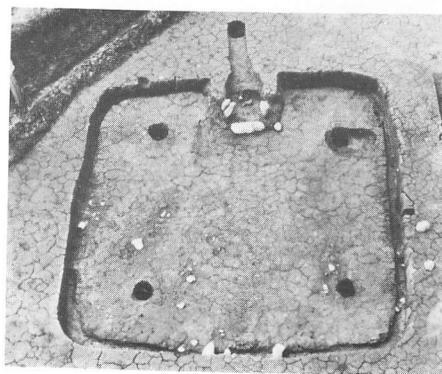
D-8-1住居址 カマド



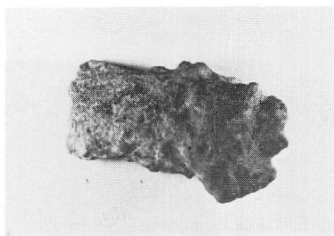
D-8-2住居址
間仕切り部土玉出土状況



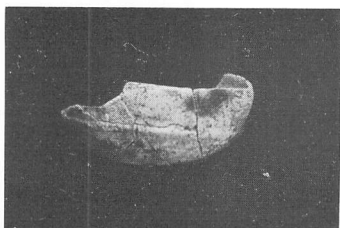
D-19溝跡



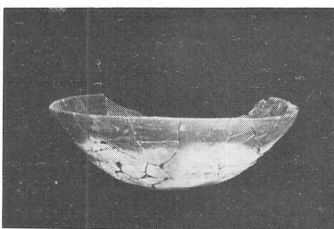
C-13住居址 (南より)



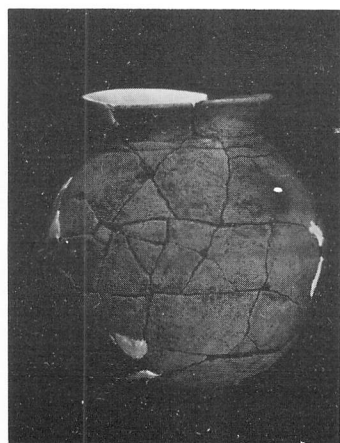
鉄斧 (C-13住居址)



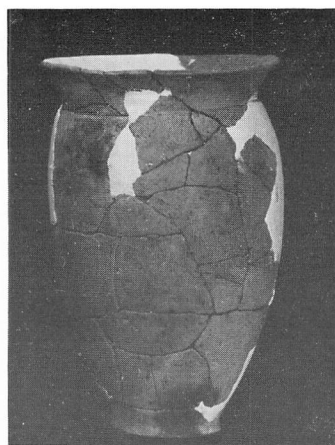
坏 (H-11住居址)



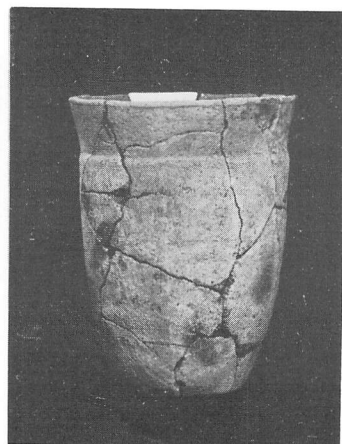
坏 (H-11住居址)



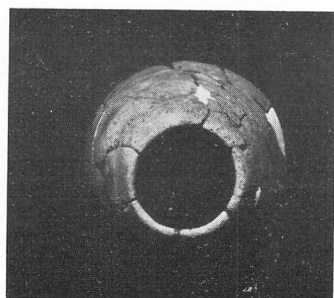
壺 (C-13住居址)



甕 (D-12住居址)



甕 (C-13住居地)



(7) 玉 貫 遺 跡

遺跡所在地	水沢市佐倉河字玉貫
事業主体	建設省岩手工事事務所
調査期間	昭和54年6月1日～8月12日
調査対象面積	3,800㎡
発掘面積	3,800㎡
遺跡記号	T N 79
協力機関	水沢市教育委員会

1. 遺跡の立地

本遺跡は、東北本線水沢駅北 5.0 km、胆沢城真西 1 kmの所に位置する。胆沢川によって形成された沖積地の胆沢川畔自然堤防である。胆沢川は玉貫遺跡北 50mの所を東流している。遺跡の状況や、土層から、数次にわたる冠水を受けており、南側の礫層から氾濫時には孤立した可能性も強い。標高48mで、胆沢川との比高 2.5 m である。

周辺の遺跡として、膳性遺跡・今泉遺跡・胆沢城跡・高山遺跡等がある。

2. 調査の概要

本遺跡の調査は、金ヶ崎バイパス建設工事に伴う緊急事前調査である。調査は第 2 年次であり、第 1 年次の昨年は、粗掘をかけ、遺構範囲の確認を行った。遺構の確認は、冠水によって遺構埋土と、自然土層との区別がつきにくく、僅かに煙道部の存在をもって住居址とした。本年の調査においても土層の判別に悩まされ、カマドの確認から床面へと、通常の調査の逆を行かなければならず、掘りすぎ、不足等があった。精査の結果竪穴住居址 20 棟、掘立柱建物跡 1 棟、小ピット 300 ケ、土壇 10 基である。

以下調査の概略である。

〈竪穴住居址〉

竪穴住居址 20 棟のうちロクロ未使用土師器伴出の住居址 19 棟、ロクロ使用皿形土器伴出の住居址 1 棟である。ロクロ未使用土師器伴出の住居址は、路線外にまたがるもの 5 棟を除いて全て完掘した。プランは、「隅丸」方形で最大規模一辺 6 m と最小規模 4.46m × 3.96m である。床面は比較的固く締っており、焼失家屋と思われるもの 2 棟の床面直上に炭化材の配列が見られた。周溝はどの住居址からも検出されなかった。柱穴は 3 棟をのぞき 4 ケが検出された。ただ 1 棟のみであるが、カマドの存在する北側の柱穴が 4 ケ検出され対になるもの 2 ケと合わせて 6 ケのものもある。カマドは、北壁が多く、西壁が 2 棟のみである。いずれも壁中央部につくられている。住居の主軸方向は、磁北 10、北西 4、西 2、不明 4 にわかれる。又、切り合い関係は認められない。カマド袖はシルトのみで構築しているもの 4 棟で、他の住居のカマド袖は川原石か甕を芯にしてシルトを張りつけている。支脚の存在がはっきりしたものは 4 棟で、川原石か甕を倒立させている。煙道は、平坦か燃焼部からゆるやかに下がるものが多い。出土土器はロクロ未使用土師器・鉄器・土製品である。須恵器は破片が少量出土している。

ロクロ使用皿形土器出土住居址 1 棟はプランが長方形で東壁北側に張り出しをもつ。規模は張り出しを除いて、5.72m × 2.94m で壁高 17cm である。床面はほぼ平坦で中央部に小規模の地床炉を持っている。柱穴は壁際に 10 本検出された。出土遺物としてロクロ使用皿形土器・緑釉

陶器・鉄製内耳鍋・砥石が出土している。形状より中世竪穴住居址の初原的なものと考えられる。

〈掘立柱建物跡〉

掘立柱建物跡は、遺跡中央部において検出された。ロクロ未使用土師器伴出住居と重複しているが、掘立柱建物跡が新しい。3間×2間の南北棟で庇はつかない。柱穴は円形で、掘り方、柱部分が判別できるのは少ない。又住居址柱穴より小ぶりである。その他小ピット群が、掘立柱跡と思われるが、間が取れるものがない。

〈土 壇〉

土壇は25基検出された。形状は円形・方形・不整形である。規模は不整形土壇で5m×3mで深さは西側部分で70cm、東側部分で10cmと段差がついている。円形土壇は径1m、深さ40cmが代表的な規模である。長方形土壇では3.5m×1.2mである。これらの土壇の共通事項として、埋土に炭化物を含むこと。底面がやや不安定であること。検出面が、住居址検出面より高い事、位置は調査区北西部に集中している。出土遺物は、ロクロ使用皿形土器を中心に鉄製紡錘車・北守銭・片口摺鉢片などである。時期は平泉後期～室町期と思われる。

〈溝 跡〉

検出は5条である。この溝は調査区北西部にある。方向は東西方向3、南北方向1、円形周溝1である。4条の最大巾は90cm、最小巾36cmである。いずれも中世以降のものと考えられる。

〈出土遺物〉

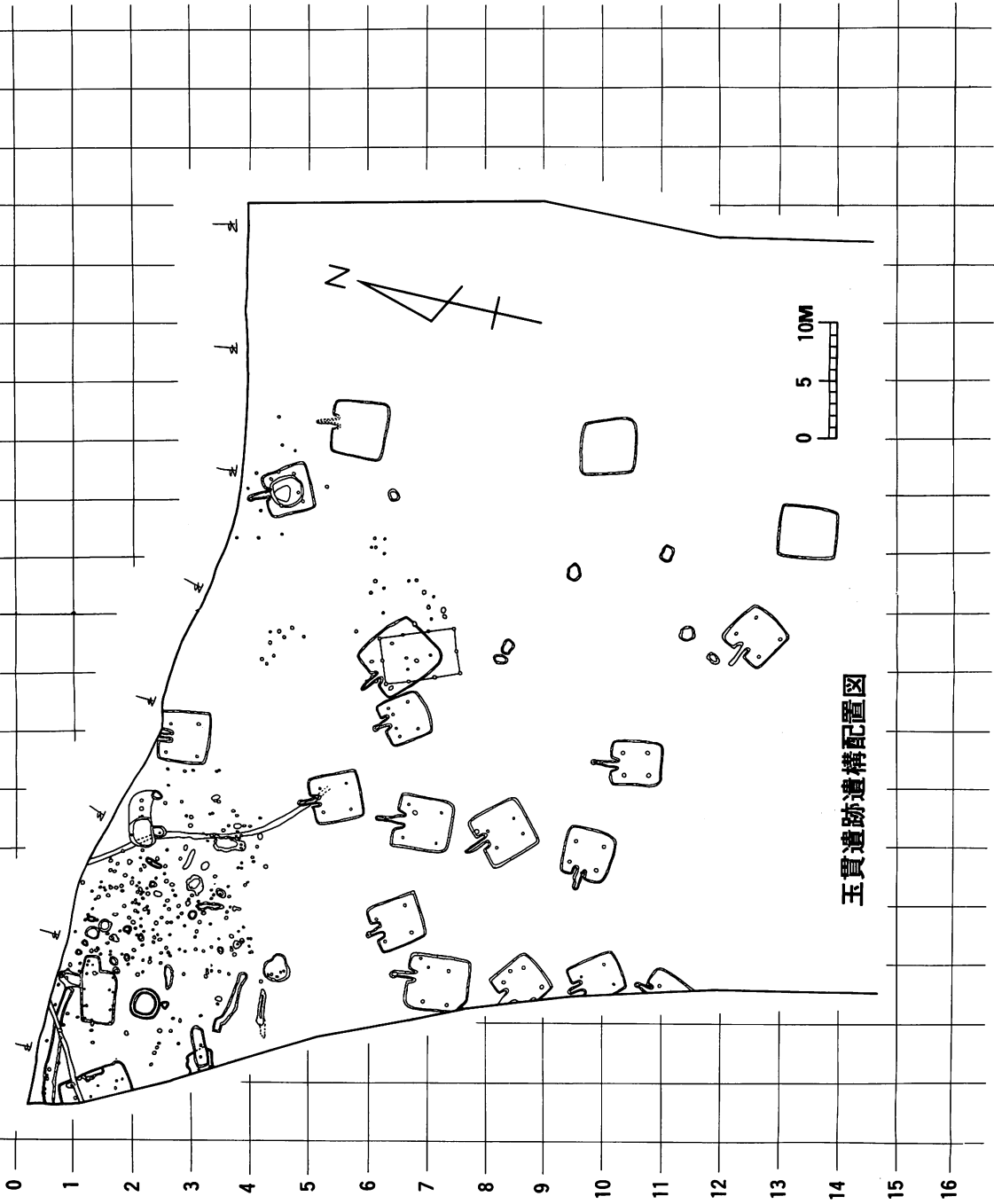
出土遺物は、土師器・須恵器・石製品・鉄器・土製品である。土師器はすべてロクロ未使用土師器である。器種は坏・高坏・壺・甕・甑・埴盤である。坏は内面黒色処理で有段丸底と無段平底のものがある。高坏は小型のもので内面黒色処理をしている。坏部と脚部の間に段をもっているものもある。

甕は長胴の甕であり、頸部に段を有する。甑は1ケのみで多孔式の完形品である。埴は内面黒色処理で口縁部は若干内湾ぎみである。須恵器は甕の破片のみである。石製品は円形有孔紡錘車である。径は5cmである。鉄器は鎌・刀子片が出土している。土製品は勾玉・有孔土玉が出土している。その他中世のものと思われる皿状土器（燈明皿）・片口摺鉢・緑釉陶器・鉄製内耳鍋（口径37.0cm、深さ15.7cm）・鉄製紡錘車・鉄製釘・北宋銭（熙寧元宝）が出土している。

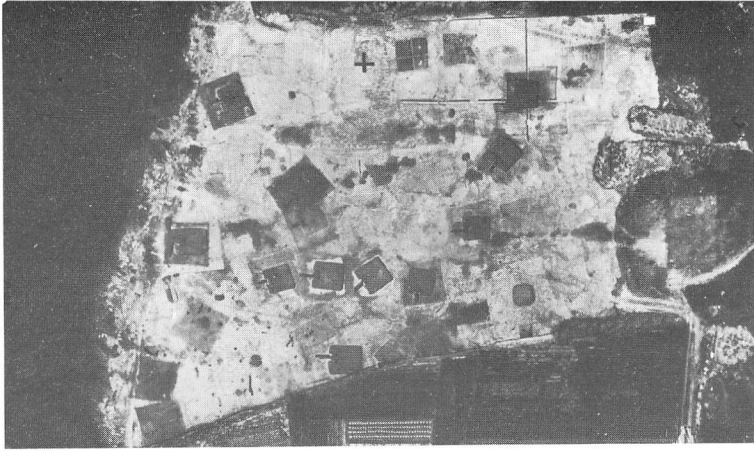
3. ま と め

水沢市内における奈良時代の遺跡は段丘上に立地しており、沖積地自然堤防上に立地した遺跡の調査は初めてである。しかも単独住居ではなく集落形成を為しており、今後の遺跡の立地に対する考えに大きな課題を与えた。又、平安末期（12C）における資料も東北縦貫自動車道関連遺跡鳥海A遺跡と胆沢川を対峙して出土したことも興味深く、平安末期の研究に多いに参考になるものと考えられる。

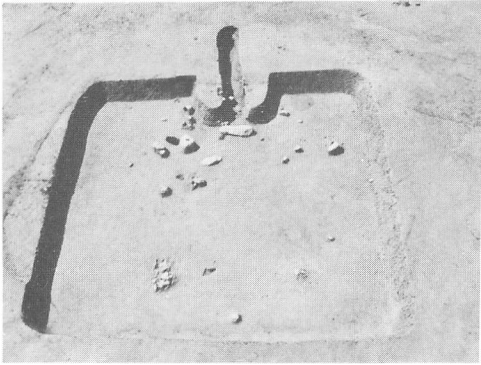
A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T



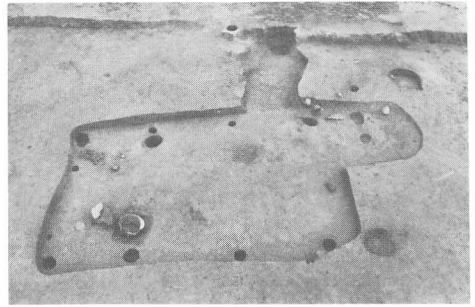
玉貫遺跡遺構配置図



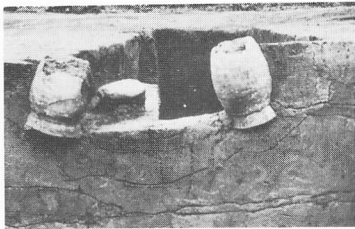
玉貫遺跡全景（西より）



E-7-1 住居址



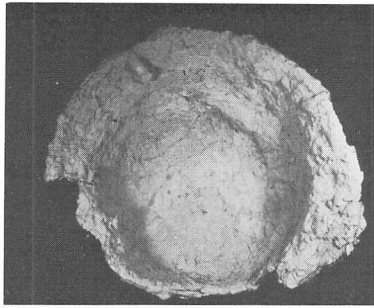
B-1-1 住居址



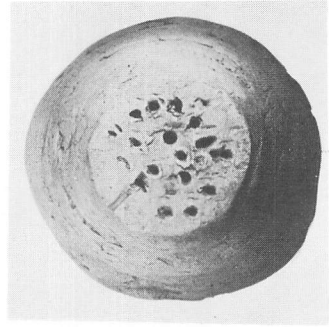
K-3-1 住居址カマド断面



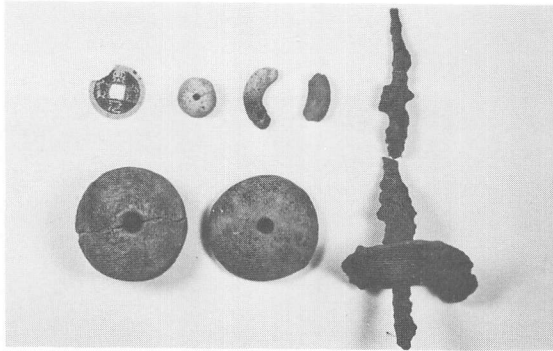
G-9-1 住居址
炭化柱根



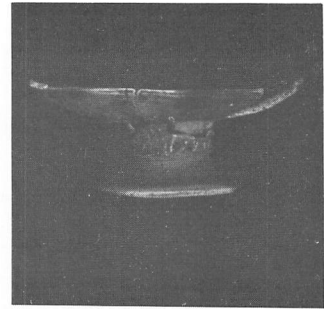
鉄製内耳鍋 (B-1-1 住居址)



多孔式甑 (E-7-1 住居址)



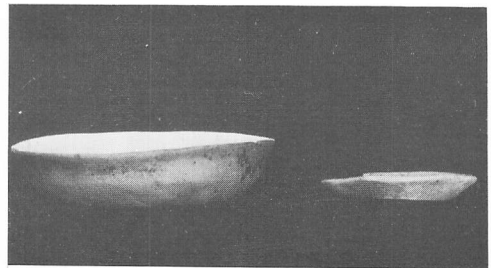
熙寧元宝・勾玉・土玉・紡錘車(鉄・石・土製)



高杯 (G-2-1 住居址)



甕 (K-3-1 住居址)



燈明皿 (D-2-5 pit)

(8) 西 根 遺 跡

遺跡所在地	胆沢郡金ヶ崎町西根縦街道
事業主体	建設省岩手工事事務所
調査期間	昭和54年8月6日～11月15日
調査対象面積	5,800㎡
発掘面積	5,800㎡
遺跡記号	NN79
協力機関	金ヶ崎町教育委員会

1. 遺跡の立地

本遺跡は東北本線金ヶ崎駅南約0.9 km、金ヶ崎役場より南西約0.4 kmの所に位置する。遺跡は奥羽脊梁山脈の東麓、夏油川によって形成された六原扇状地が東西に伸びる段丘崖沿いである。六原扇状地は高位から、西根段丘・村崎野段丘・金ヶ崎段丘に大別されるが、本遺跡は金ヶ崎段丘の縁辺部に存在する。かつて岩手大学草間教授らによって調査された西根遺跡に包括され、伊藤玄三氏によって調査された縦街道古墳群と同一である。標高58mで、胆沢川との比高は約12mである。周辺の遺跡としては鳥海遺跡・館山遺跡・上餅田遺跡・中荒巻遺跡があり、胆沢川をはさんで、玉貫遺跡・膳性遺跡・今泉遺跡がある。

2. 調査の概要

本遺跡の調査は、金ヶ崎バイパス建設工事に伴う緊急事前調査である。金ヶ崎バイパス関連遺跡では金ヶ崎町唯一の遺跡である。昨年度は縦街道をはさんで南北を粗掘したが、北側には遺構は存在しなかった。南側は、堀を境に南側は古墳群、北側に住居址がある。検出遺構は、墳丘部の残存が認められるもの4基、周滄のみのもの17基、ロクロ使用土器伴出住居址2棟、竪穴状遺構3棟、堀跡1、溝跡8条、土壇22基である。尚、墳丘部残存のものうち大型のもの2基は昭和34年に調査済であるが、今回煙滅する為再調査を行った。

以下調査の概要である。

〈墳丘部の残存している古墳〉

墳丘部の残存している古墳は4基であるが、そのうち2基は昭和34年の調査によって発掘され、中央部の内部は攪乱を受けている。他の2基は、盗掘や崩壊によって破壊、又は攪乱されている。1号墳の規模は南北軸9.5 m、東西軸7.5 m、墳丘高は地山面から0.6 mである。墳丘上面には20～30cmの川原石の茸石が検出された。形状は円形であり、周滄は東側と西側で検出され、やや楕円形状のカーブを画いている。南側と北側では周滄部は検出されない。周滄巾は1～2 mで深さは最深部で60cmである。周滄埋土には十和田 a 降下火山灰の堆積が認められる。主体部は黒色土をやや整地した後、30～50cmの川原石を2～3列2～3段積み上げて構築し、南側は石を平面的に配列したらしい痕跡がある。主体部より遺物は検出されなかった。遺物の出土は墳丘東南部より有孔土玉11ヶが西側周滄埋土から須恵器壺が1個体出土した。2号墳は主軸方向が北西で15.4 m × 14.3 m、墳丘の高さは0.8 mである。周滄は南東部を残して馬蹄形状に巡る。形状は円形である。既掘、盗掘部をのぞいて、墳丘上部に30～50cmの川原石を茸石としている。周滄は最大巾は23.6 cm、深さ44 cmである。埋土には十和田 a 降下火山灰が堆積している。封土は黒色土を主体に積み上げられている。主体部は封土下の黒色土に扁平な川

原石を1～2列に墳丘の主軸方向に合わせて並べ段は1段である。川原石はほぼ中央部に1列しきりが入り、北側には3～5列の敷石をし、南側に2～3列の敷石をし、小石も用いている。主体部の攪乱部分から水晶切子玉・有孔ガラス玉、周湟部より須恵器甕1個体・壺2個体が出土している。3号墳は段丘崖線に位置する小型の円墳で、南半分は盗掘によって削平されている。残存部には川原石の葺石が点在している。周湟は、半月形を2つ組み合わせる1号墳と同様で規模は南北軸6.5m×東西軸6.0mの円墳である。周湟巾は48cm、深さ10cmである。埋土中に十和田a降下火山灰が堆積している。墳丘の高さは低く0.4m前後と思われる。主体部は、1号墳、2号墳同様に川原石をもって作っている。全体については不明であるが、北側に敷石状のものがあり、小石も敷きつめている。出土遺物はない。4号墳は段丘縁辺にあり、規模は、南北軸4.8m、東西軸4.9mの円墳で墳丘高は3号墳と同様である。周湟は西側で部分的に確認できた。墳丘上部には、僅かながら葺石がある。主体部は、小型の川原石を不整形に並べている。遺物は、封土より土師器片が出土している。

〈周 湟〉

今回の調査によって精査した周溝は17基である。形状は二分されるが、いずれも基本的には円形を画き、一つは馬蹄形を示すもの、一つは半月形が対峙するものである。検出面が、地山の粘性火山灰層である為、耕作土による削平によって馬蹄形が変形した可能性があるが、半月形対峙型は本来的に南側を開口部とし、北側の周湟部の掘込みは浅かったものと考えられる。埋土には十和田a降下火山灰が堆積している。周湟の最大径は11m、最小径は6mである。周湟の最大巾は2.0m、最小巾は0.8mで最深部は49cmである。出土遺物は、縄文土器片・土師器片・須恵器片である。

〈竪穴住居址〉

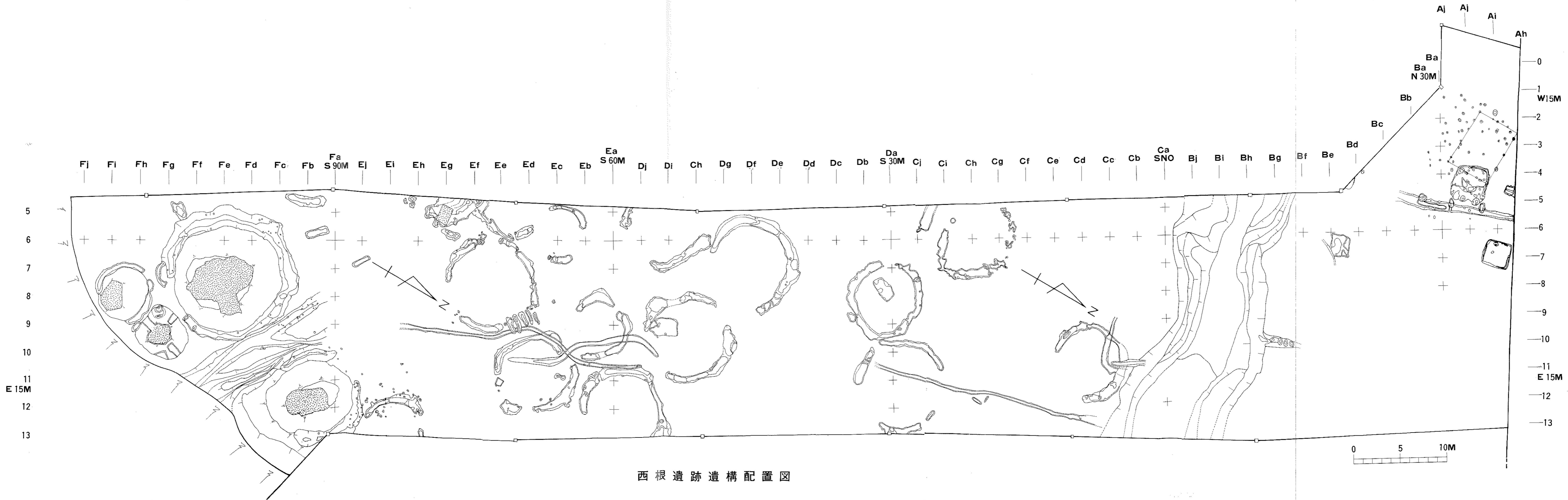
住居址は2棟であり、いずれもロクロ使用土師器伴出住居址である。検出は、表土下の粘性シルト面であり、プランは方形と不整形で規模は2m前後である。床面は貼床は認められないが凹凸が激しい。柱穴は4ヶ検出されている。カマドは1棟のみ東壁南側にある。他の1棟は中央部に地床炉がある。遺物はロクロ使用土師器坏・酸化炎焼成坏・須恵器片が出土している。

〈堀〉

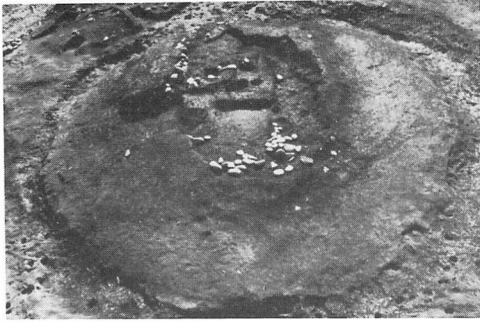
調査区北側において、堀1条が検出された。上巾11mで東西方向に走っている。深さは東側において約3mとなり、西側においては0.5m前後となる。堀の傾斜壁において、中段の存在が一部において認められた。底面の西高東低の傾斜からいって、昭和50年調査の西根遺跡北側堀と連続する可能性は少ない。出土遺物は陶器片である。

3. ま と め

昭和34年調査において、古墳の形状は方形、主体部は存在しないと報告されたが、円形であり、主体部も粗末ながら存在した。又、堀によって墓域を区画していたものと考えられる。今回の調査により、岩手県古墳偏年について考える資料が与えられたものと思う。



西根遺跡遺構配置圖



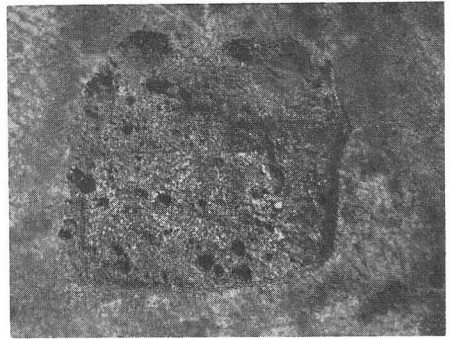
2 号 墳 (北より)



1 号 墳 主体部残存状況 (北より)



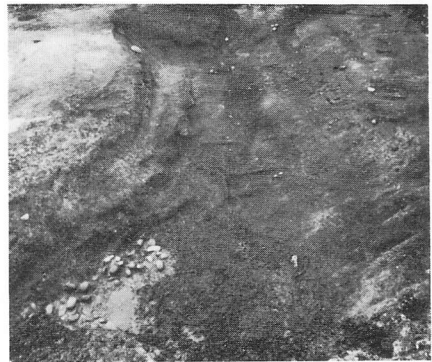
D-d-5 周隍 (南東より)



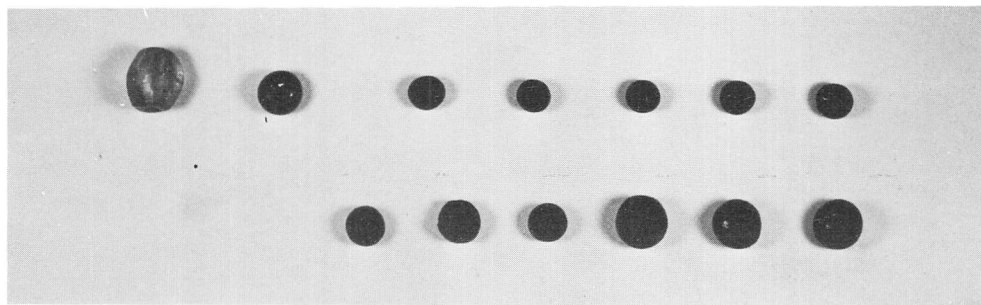
A-i-3 住居址 (西より)



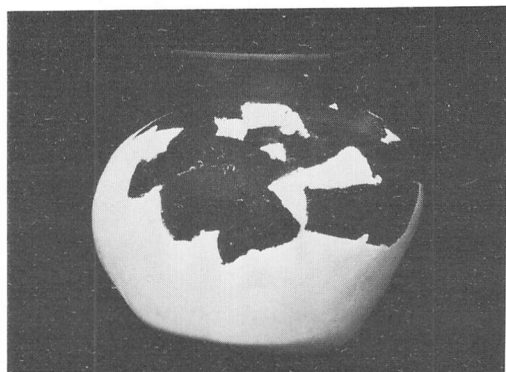
D-j-9 溝と
E-b-9 周隍
(北より)



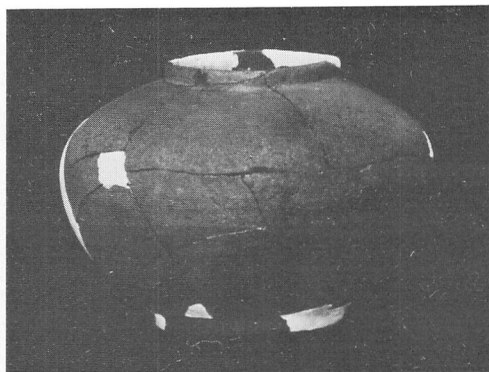
B-g-5 堀 (東より)



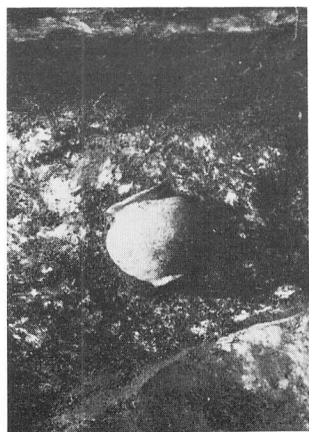
水晶切子玉・ガラス玉（2号墳出土）と土玉（1号墳出土）



須恵器 甕（2号墳）



須恵器 壺（2号墳）

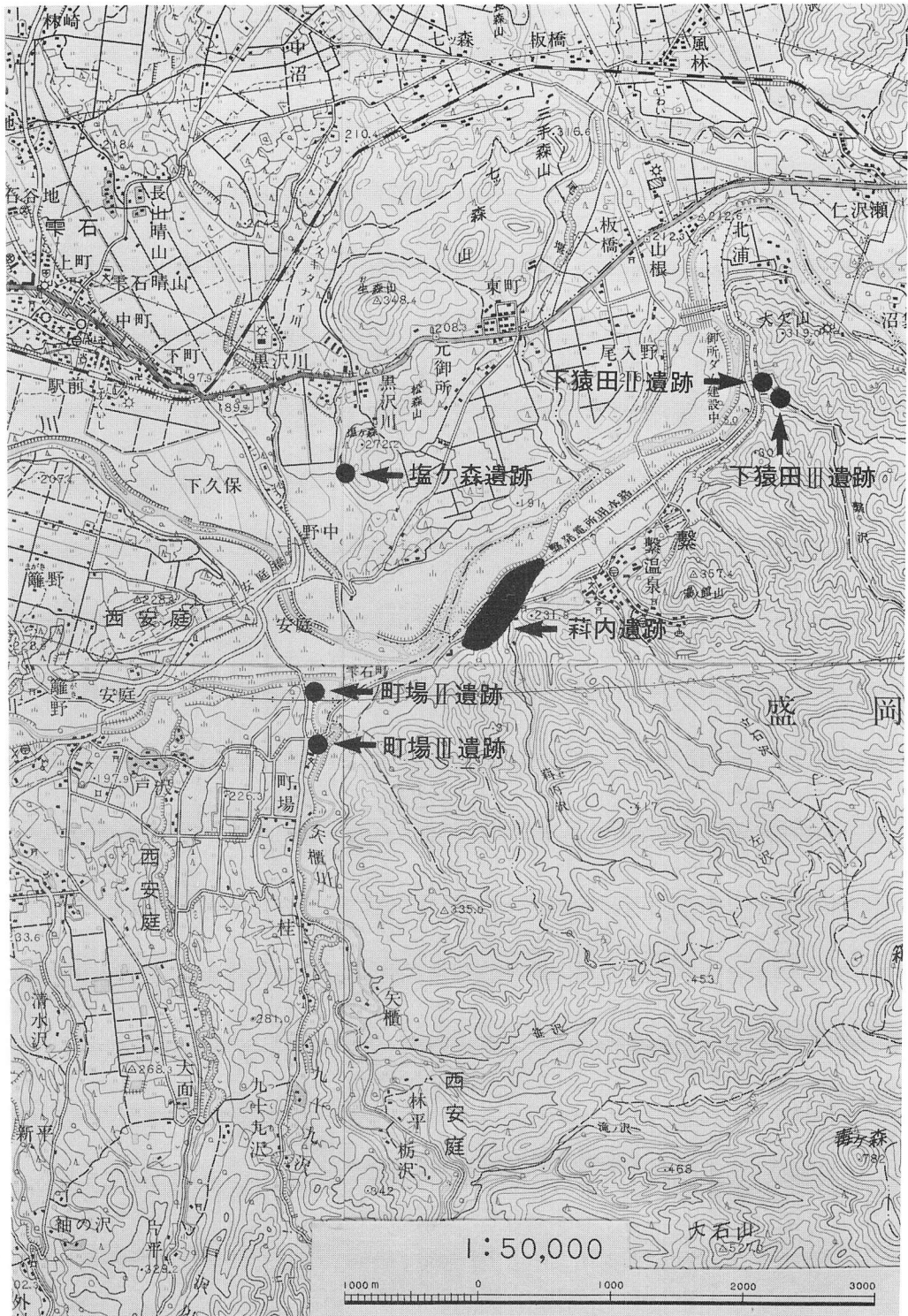


壺出土状況(F-a-4 周隍)



釧 出土状況 (E-i-6 pit)

II 御所ダム関係



御所ダム関連遺跡位置図

(1) 萩 内 遺 跡

- (1) 遺 跡 所 在 地 盛岡市繋字萩内河原
事 業 主 体 建設省御所ダム工事事務所
調 査 期 間 昭和54年4月7日～11月15日
調 査 対 象 面 積 32,090m²
発 掘 面 積 12,090m²
遺 跡 記 号 SD-79
協 力 員 栗 田 真 澄 (岩手大学)
佐 藤 典 邦、菅 原 晃 (明治大学)

1. 遺跡の位置

盛岡市の西郊外磐温泉よりさらに約1 km地点、雫石川右岸の沖積段丘上にある。

2. 調査の概要

本遺跡の調査は昭和48年以来実施せられてきた御所ダム建設に伴う緊急事前調査の一つである。本遺跡に対する調査は昭和51年以来行われてきたが本年度が第3次調査であり、調査面積は12,090㎡である。このうち3,000㎡については来年度再調査する予定である。本年度調査は遺跡の南西部分に広がる配石土塚群を主として行われた結果、縄文時代住居址6棟、平安期住居址1棟、配石土塚群154基を検出精査した。これと並行して遺跡の一部にテスト・ピットによる堆積土層確認と旧河道部およびその北側の砂州状地に対しても調査を行った。以下調査の概要である。

〈竪穴住居址〉

縄文時代晩期初頭のもの3棟が遺跡南西部配石土塚群の検出地点中より検出された。3棟ともに直径3.5 m～4 mほどの円形を呈し、中心部に小型礫を組んだ円形の石囲炉が存在した。柱穴は周壁に沿って10数本の小さなものが検出された。この地点よりやや北、導水路のすぐそばから平安期の住居址1棟が検出された。住居址のプランは東西に長い長方形で東壁中央部にカマドを持つ。その他縄文時代晩期もしくは後期のものと推定される住居址数棟が旧河道部北側の砂州状地から検出された。しかし本地点の住居址は砂地上で相接して切り合っているために実数は明確につかみえないが2棟分について約 $\frac{1}{2}$ 程度壁の立上りを確認した。伴出遺物は縄文時代後期末および晩期初頭の土器が混在しており现阶段でははっきりした見解を述べ得ない。

〈配石土塚群〉

遺跡南西部分においては後世の削平攪乱により土塚上部の配石群が検出されたのは極くまれである。直接検出面において土塚の輪郭を認める状態であった。形態は円形・長方形であり前年度調査次のものと変化はない。しかし本地点の土塚埋土中には礫が少ない。この差異はテスト・トレンチにより調査の結果段丘面下部の礫層が地点により波状になっていることが判明しこの土層堆積の変化が土 塚埋土に現われたものとみるべきであろう。

〈旧河道部〉

旧河道部については前年度魴の検出された地点より西方部分の調査を行った。土層堆積等は前年度調査と基本的に同様であるが、流路が西端部においてやや北よりにカーブしている事を確認した。すなわち現雫石川本流路方向へカーブしている事である。今年度調査においては特殊な遺構は検出されなかった。

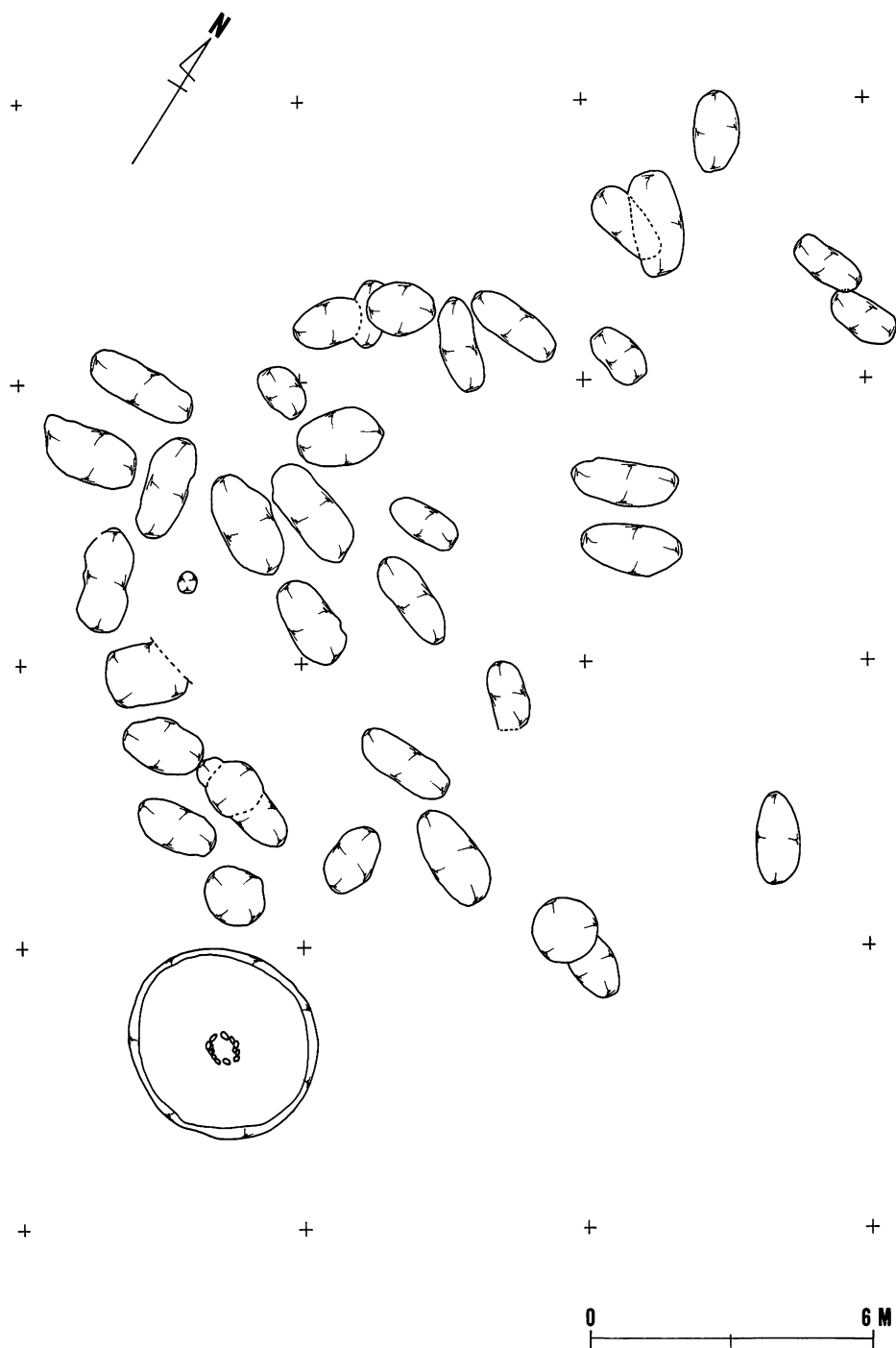
〈出土遺物〉

配石土壙群検出地点よりは縄文時代後期後半と晩期初頭の土器が出土している。テスト・トレンチによる深掘り中から後期前半に位置する土器が検出されているが、遺構等に伴うかどうかは不明である。他に石器類が多く出土した。木製品としては台付皿・脚付皿・砧状木製品および赤色漆塗りの弓（両端を欠く）等が出土した。特殊遺物として土壙内から鼻2ヶが出土している。

3. ま と め

前年度に引きつづき配石土壙群が多数検出され南北の限界線をおさえることが可能になったが東西両端部を完全に破壊されているため前年度略報に記した大単位の形態を確認しえない状態であることが判明した。さらに縄文時代晩期住居址の検出により配石土壙群の時期決定を可能にすることができることとなった。

なお、53年度において検出された縄文人足跡88ヶのうち、33ヶを奈良国立文化財研究所主任研究官沢田正昭氏、文部技官秋山隆保氏の協力により切り離し保存を図った。



菫内遺跡T区域の土壇・住居址分布図

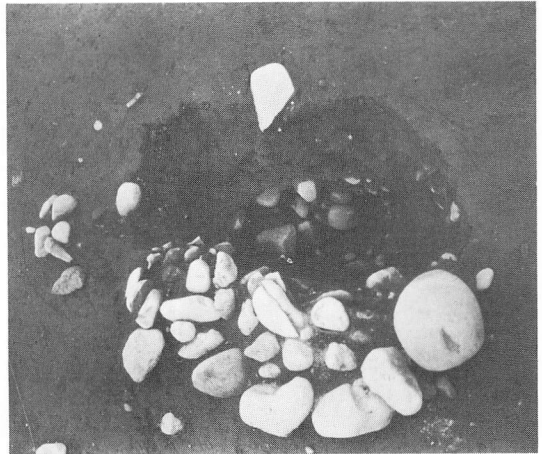
住居地



遺物出土状況



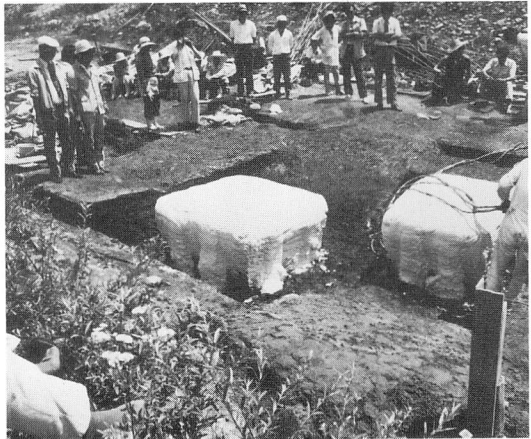
土塚 1



土塚 2



足跡



(2) 下猿田 II 遺跡

(2) 遺跡所在地 盛岡市繫字下猿田
事業主体 建設省御所ダム工事事務所
調査期間 昭和54年6月4日～8月11日
調査対象面積 1,100m²
発掘面積 1,100m²
遺跡記号 SSTII79

1. 遺跡の立地

遺跡は、盛岡市繫第4地割字下猿田に所在する。標高318mの大欠山から南北にはり出した山地の末端部にあたり、標高180mである。周辺の遺跡としては、下猿田Ⅰ・下猿田Ⅲ遺跡がある。

2. 調査の概要

本遺跡の調査は、御所ダム建設に伴う緊急事前調査で、昭和48年より継続して行われ、本年は第七年次となる。遺跡は、雫石川からの比高18mのテラスに集中しておる。このテラスを全面調査をし、近世礎石建物跡1棟、付属建物跡2棟、掘立柱建物跡1棟が検出された。

以下調査の概要である。

〈建物跡〉

礎石建物跡は、御所ダム建設に伴い移転した曲家の民家であり、礎石上に墨縄痕「十」が多数認められた。建物跡の基盤は、北半分を地山切り出し事業をして造成している。付属建物跡2棟は、曲家に付属するものと思われる。

掘立柱建物跡は、礎石建物跡の事業面を取り除いて検出され、北と西に縁を回した礎石建物跡より小規模なものである。井戸址1基も検出された。

〈その他〉

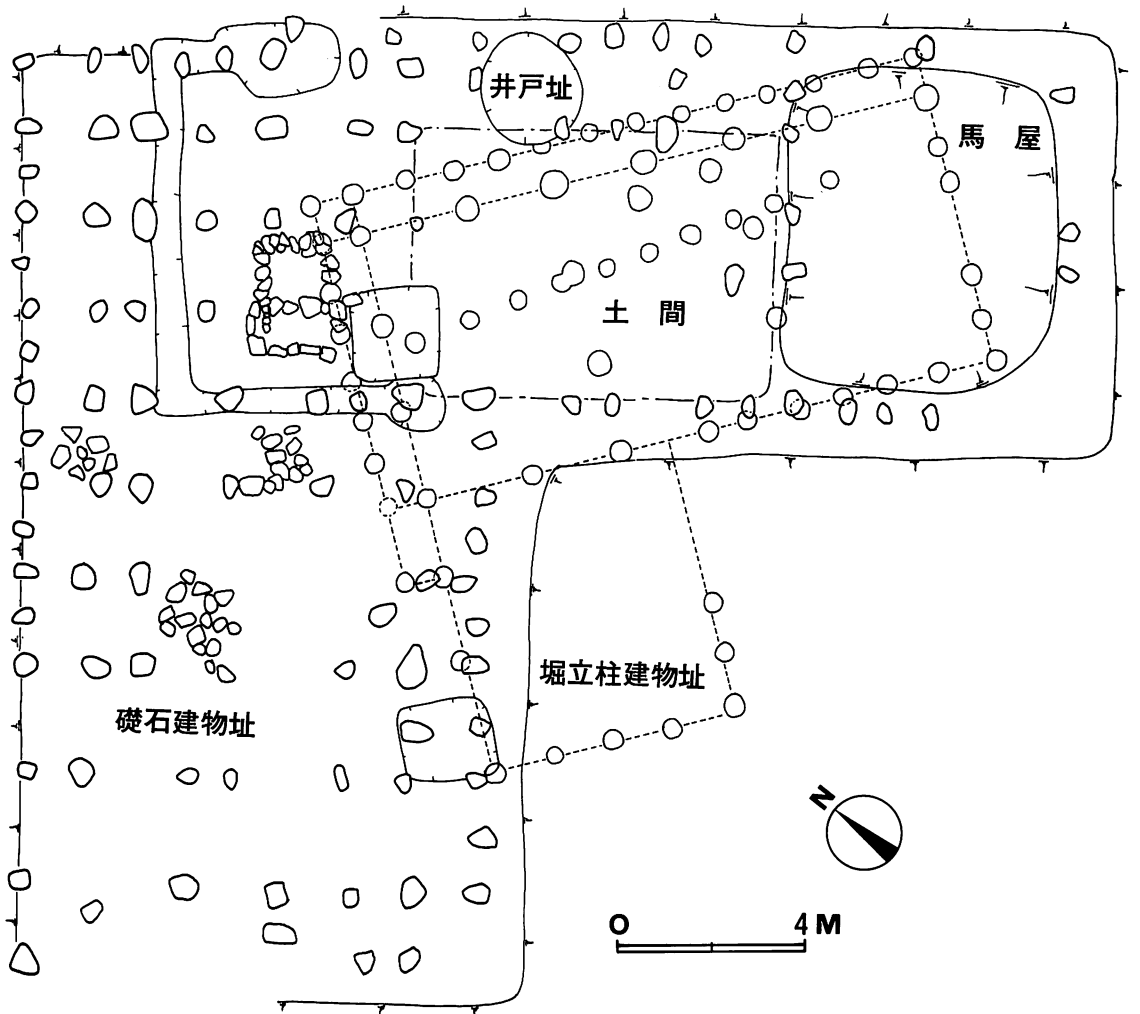
近世末期の墓址10基が検出されている。

〈出土遺物〉

出土遺物については、縄文土器片・石器・鉄器・陶磁器片・古銭である。

3. ま と め

礎石建物跡の事業面を取除くと掘立柱建物跡が検出され、掘立柱建物から、礎石建物への移行を知る手掛りとなった。又、町場Ⅲ遺跡・下猿田Ⅲ遺跡とともに近世建物についての資料として貴重なものとなろう。



下猿田Ⅱ遺跡建物址平面図

(3) 下猿田Ⅲ遺跡

- (3) 遺跡所在地 盛岡市繫字下猿田
事業主体 建設省御所ダム工事事務所
調査期間 昭和54年9月3日～11月15日
調査対象面積 2,200㎡
発掘面積 2,200㎡
遺跡記号 SST-Ⅲ79

1. 遺跡の立地

遺跡は、盛岡市繫第4地割字下猿田に所在する。標高318mの大欠山からの尾根が南北にはしりだした末端部にあたり、標高175m～184mにかけての緩斜面に形成されている。雫石川の現河床よりの比高は25m以上を計る。周辺の遺跡としては、下猿田I・下猿田II遺跡がある。

2. 調査の概要

本遺跡の調査は、御所ダム建設に伴う緊急事前調査で、昭和48年より継続して行われ、本年は第七年次となる。遺跡範囲のうち、畑地部分の北西平坦地については全面粗掘りを、宅地造成された南東平坦地および南西緩斜面については2m×10mのトレンチ掘りとした。その結果建物跡5棟と陥し穴状遺構6基を確認することができた。以下調査概要である。

〈建物跡〉

確認された5棟の建物跡は、いずれも御所ダム建設に伴い移転した民家あるいはこれを前後する比較的新しい時期のものと推定される。

〈陥し穴状遺構〉

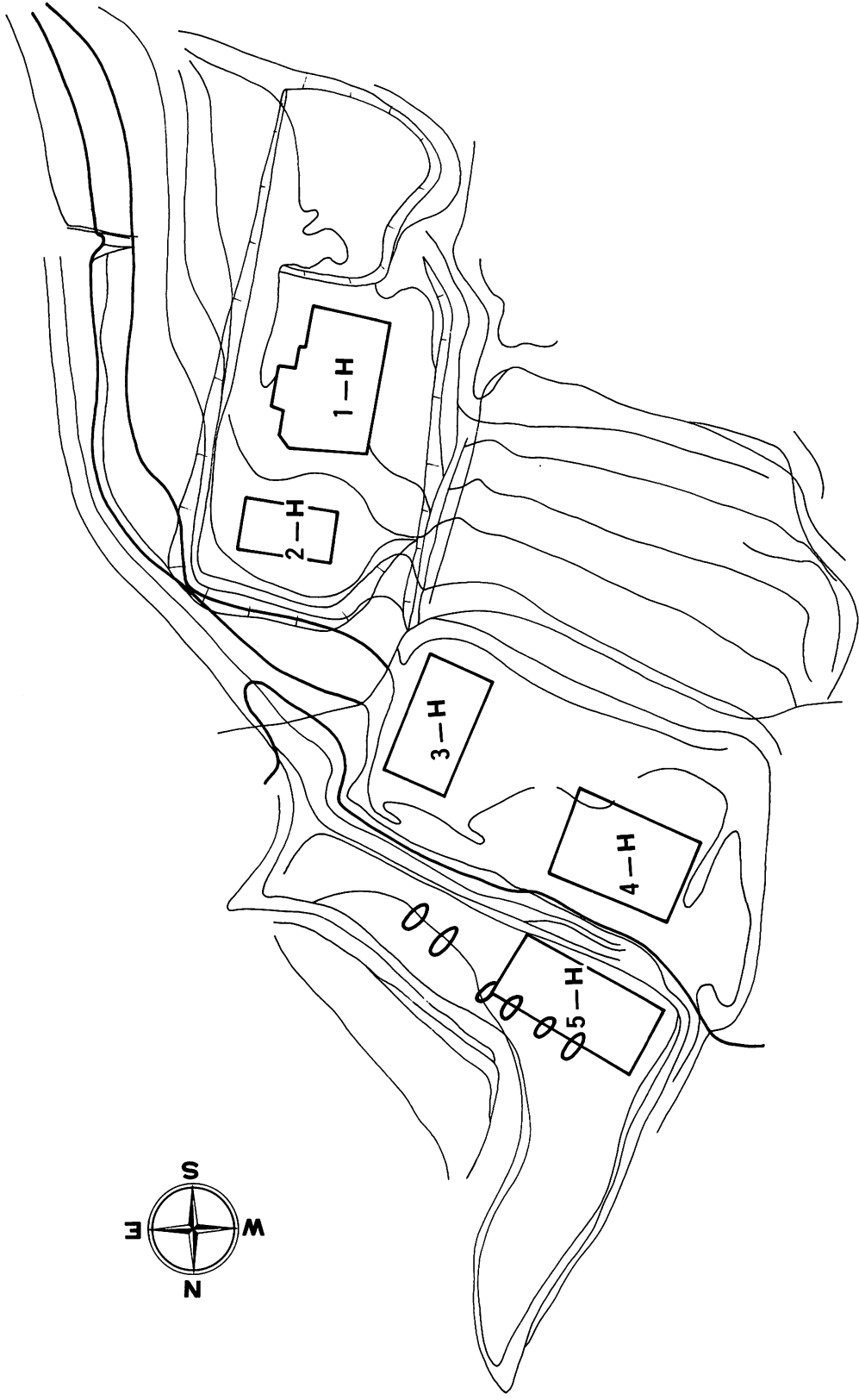
陥し穴状遺構は、遺跡の北側平坦面15m±の範囲からのみ検出されたもので、いずれも長軸をほぼ北東に向け、1.5m～2.0mの間隔をもって並列している。規模は最大が上幅2.5m×1.1m、最小が1.8×0.8mである。

〈出土遺物〉

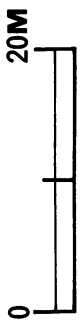
若干の繊維土器片・石鏃・石匙・フレイク等を検出したのみである。

3. ま と め

この遺跡の状態は、陥し穴状遺構の確認された北側平坦部の一部を除き、そのほとんどが宅地造成等によって煙滅したものと推定される。



下猿田Ⅲ遺跡遺構配置図



(4) 塩ヶ森 I 遺跡

(4) 遺跡所在地 岩手郡雫石町塩ヶ森
事業主体 建設省御所ダム工事事務所
調査期間 昭和54年4月9日～6月9日
調査対象面積 500m²
発掘面積 500m²
遺跡記号 SMI a-79

1. 遺跡の立地

塩ヶ森遺跡は、国鉄田沢湖線雫石駅東南東2kmに位置する。遺跡は雫石川と黒沢川によって形成された段丘上にあり、標高186～188mの緩斜面になっている。遺跡の西側は黒沢川に臨む急峻な崖となり、南側は緩斜面で元御所遺跡を経て雫石川を臨む。

周辺の遺跡としては、兔野・桜松・元御所Ⅰ・Ⅱ遺跡、雫石川対岸に萩内遺跡がある。

2. 調査の概要

雫石川流域遺跡群の調査は、御所ダム建設に伴う緊急事前調査であり、昭和48年度を第1年度として本年は第7年次である。本遺跡の調査は、昭和49～50年度の2年度にわたり3,600㎡を調査したが、本年度の調査はその南西部の500㎡である。調査は調査区全域にグリッドを組み全面調査を行った。その結果、縄文時代竪穴住居址3棟、竪穴状遺構1棟、焼土ピット1基、ピット2基、列石1基、小溝跡2条が検出された。

〈竪穴住居址、竪穴状遺構〉

住居址3棟のうち1棟は、楕円形プランを呈し、長軸13m、短軸9.3mを測る大型住居址である。一部に周溝が認められ、炉はほぼ長軸上に2ヶ所並び埋設土器石囲炉と石囲炉である。床面で、フラスコピット4基・ピーカー状ピット3基・埋設土器2基・柱穴状ピット多数が検出された。フラスコピットは最大のもので口径1.14m、最大径1.6m、底径0.8m、深さ1.95mを測り、うち1基から珧状耳飾が2点出土した。ピーカー形ピットは最大のもので口径2.1m、底径1.8m、深さ50cmを測る。柱穴状ピットは多数検出されたが、柱穴は判然としない。

他の2棟の住居址と竪穴状遺構は、いずれもこの大型住居址を切ってつくられたものである。住居址はいずれもほぼ円形プランを呈し、1棟は地床炉を伴い、柱穴は4～5本、径3.4mで他の1棟は複式炉を伴い、柱穴は壁際にまわり、径2.8mを測る。複式炉を伴う住居址は、炭化材の散乱から焼失家屋と思われる。竪穴状遺構は長軸4.1m、短軸3.0mの楕円形プランを呈する。これらの遺構はいずれも南部の緩斜面上につくられている。

〈焼土ピット〉

平面は楕円形でピーカー状を呈し、長軸1.8m、短軸1.6m、深さ30cmを測る。埋土に焼土が厚く堆積していた。

〈ピット〉

2基検出され、いずれもピーカー状である。上幅1.6～1.2m、深さ0.17mで、埋土から若干の縄文土器片が出土した。

〈列石〉

20～60cm大の扁平な川原石が10個南東～北西方向に並んだ状態で検出された。長さは 1.8 m におよび石と石はほぼ密着している。一部に掘り込みがあるが、時期・性格とも不明。

〈小溝跡〉

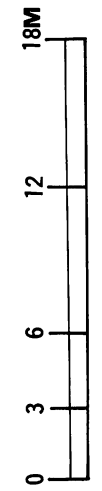
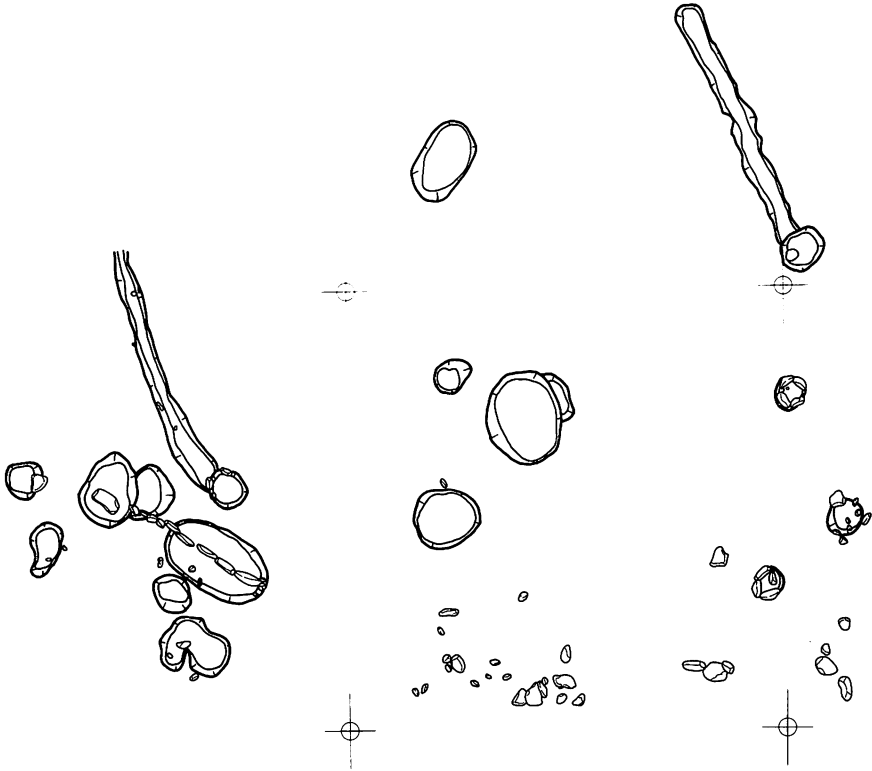
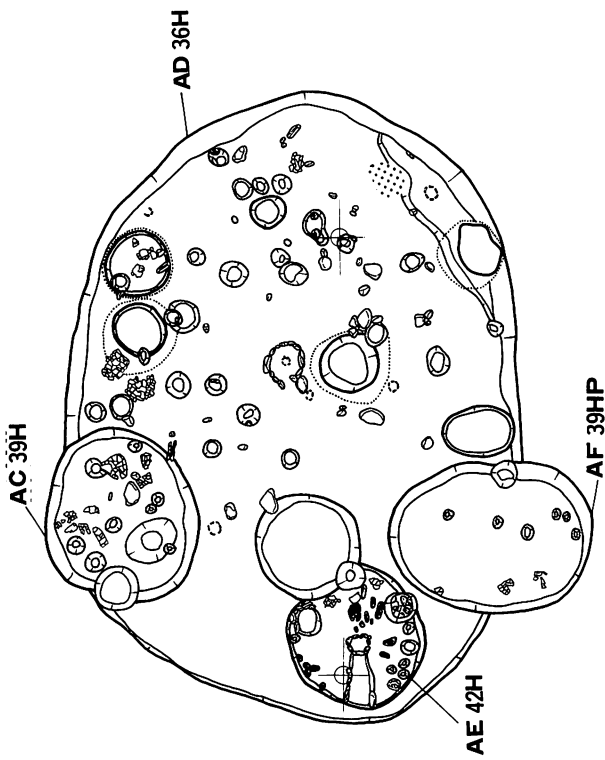
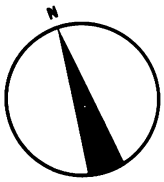
ほぼ東西に走る小溝を 2 条検出した。幅40～60cm、深さ10～15cmで、いずれも端に掘り込みが伴う。埋土から若干の縄文土器片が出土した。

〈出土遺物〉

縄文時代中期の土器がほとんどを占めるが、晩期の土器片も数点出土している。石器としては、石鏃・石槍・石錐・石匙・磨製石斧・石筥・半円形扁平打製石器・石皿・磨石・凹石など、石製品としては珧状耳飾 2 点、土製品として土版 1 点が出土している。

3. ま と め

昭和49～50年度の調査結果と来年度調査により、本遺跡の内容・性格が一層明らかになろう。昭和49～50年の調査において、大型住居系列の住居址 2 棟が検出され、今年度調査においても 1 棟検出されており、集落における大型住居の配置等貴重な資料が得られた。

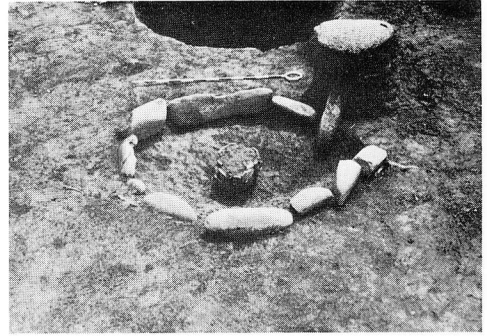


SM 1 a 79 site

塩ヶ森遺構配置図



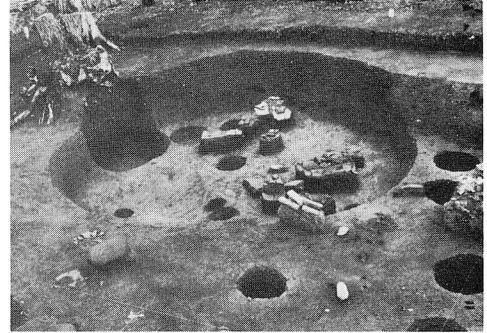
AD 36 大型住居址



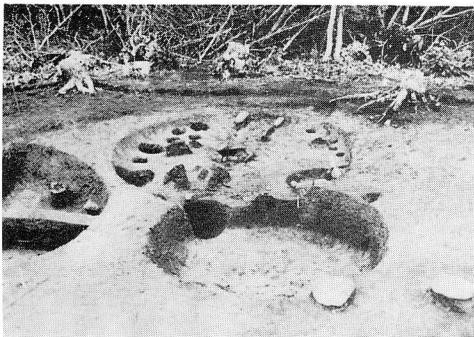
AD 36 住居址 石圍埋甕炉



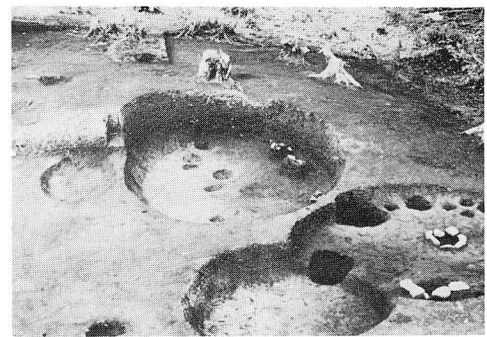
AD 36 住居址内埋設土器



AC 39 住居址



AE 42 住居址



AF 39 豎穴状遺構

(5) 町場 II 遺跡

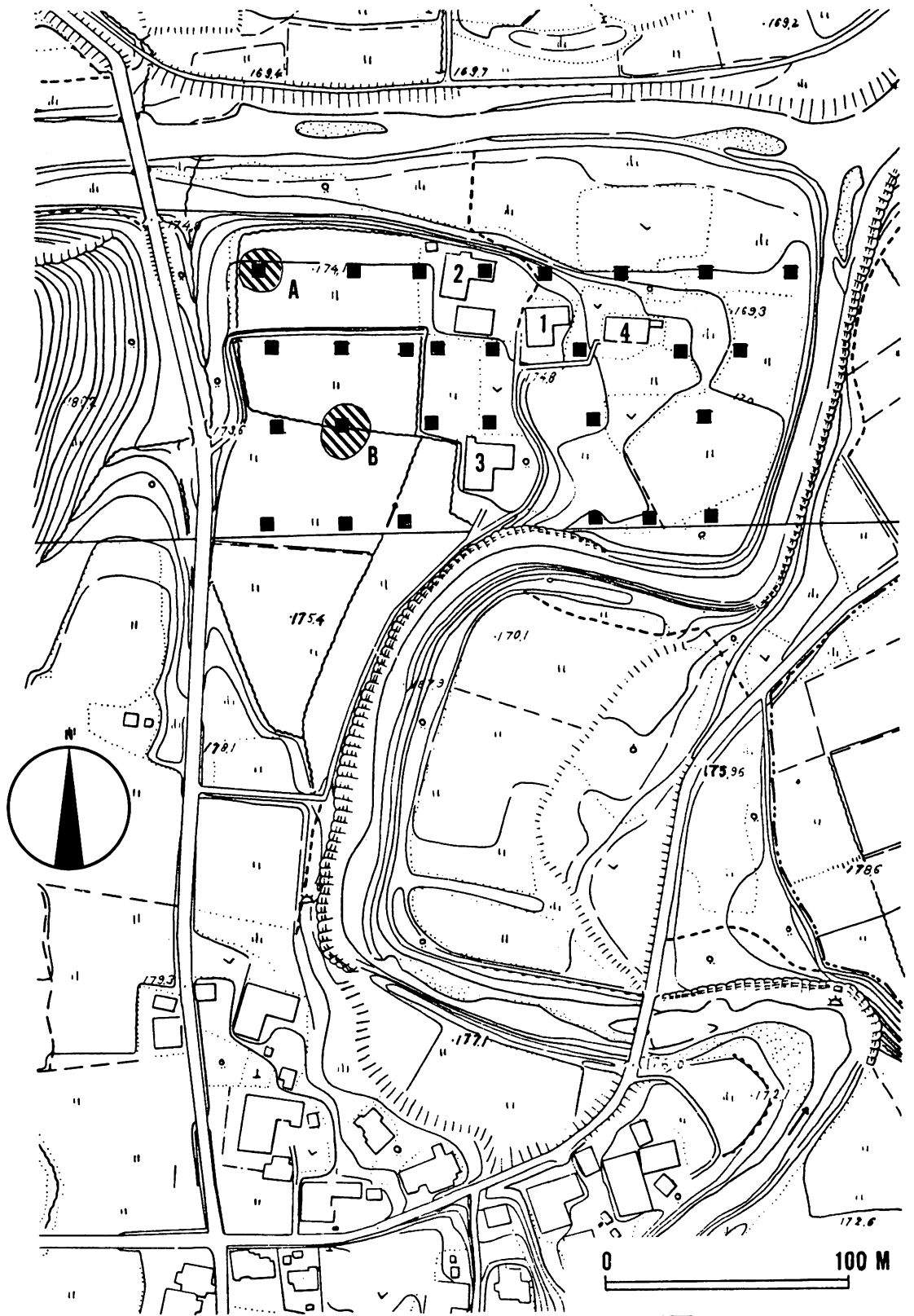
- (5) 遺跡所在地 岩手郡雫石町安庭字町場
事業主体 建設省御所ダム工事事務所
調査期間 昭和54年4月9日～6月2日
調査対象面積 9,400㎡
発掘面積 9,400㎡
遺跡記号 MB II 79

1. 遺跡の立地

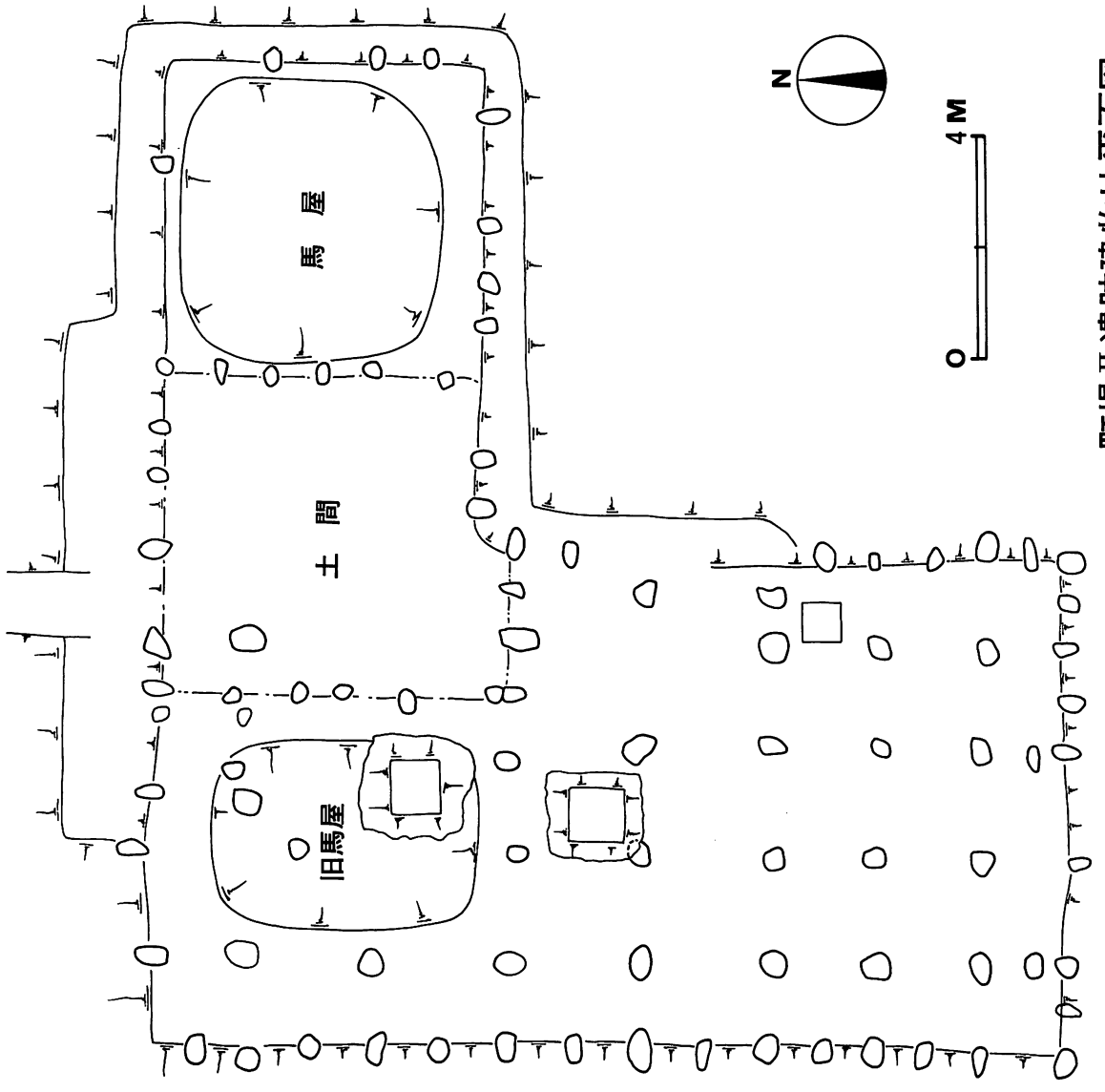
当遺跡は雫石川と北進する矢櫃川の合流点に位置し、両川にはさまれた低い河岸段丘上に所在する。南接して町場Ⅰ・町場Ⅲ遺跡が広範囲にある。西接して田屋館址と縄文時代の前期末と後期の遺物を出土する田屋館遺跡がある。

2. 調査の概要

町場Ⅱ遺跡は御所ダム建設により水没する遺跡で、緊急発掘調査である。遺跡全体の遺構確認と土壌堆積確認のため、東西約30m 間隔に2m×2mのテストグリッドを掘り下げ、それを南北に4条間隔をおいて設置した。遺跡の大半が宅地と水田のため遺構の確認はできなかったが、わずかに配置図のA・Bに繊維を含む縄文時代前期の土器細片を数点出土した。また遺跡内に礎石建物である曲屋と直屋が4軒昭和40年代まで点在し、現在は水没のため建物を解体し他に移っているが、礎石と跡が残っているので、そのルーツを調査するため礎石建物を発掘調査の対称に加えた。1号建物の2・3の所見として、貨幣は江戸時代の銅古寛永通宝から現行通用銭まで計約50枚出土した。また礎石上に「十」の墨縄が5ヶ所に発見され、建築当時の1スパンが何mにあたるか、言及する資料を加えた。また建物址の北西より、この礎石建物址より古い馬屋址が発見された。



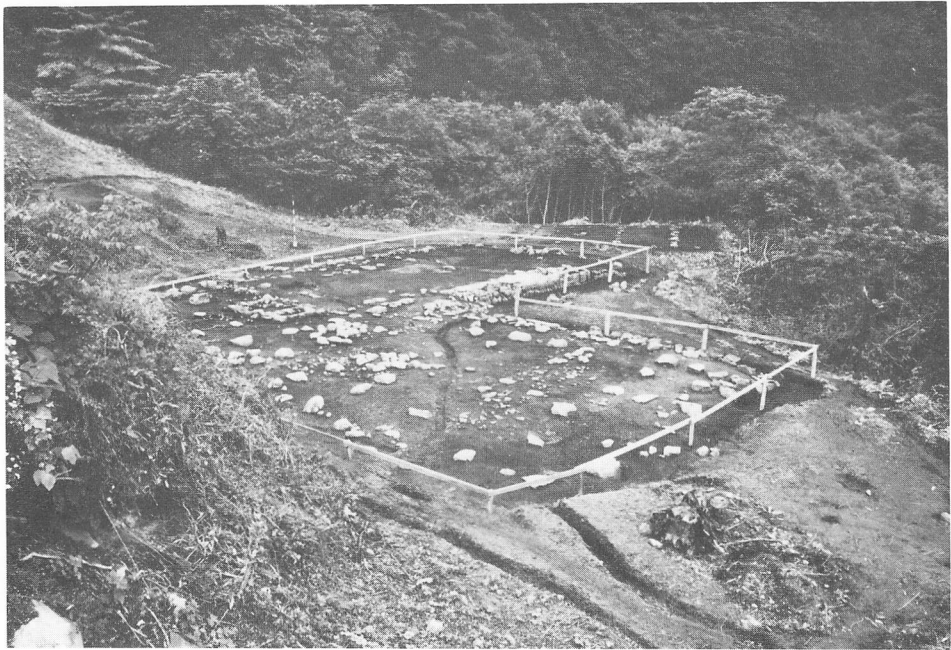
町場Ⅱ遺跡グリッド及び遺構配置図



町場Ⅱ遺跡建物址平面図



町場 II 遺跡



下猿田 II 遺跡

(6) 町場 III 遺跡

- (6) 遺跡所在地 岩手郡雫石町安庭字町場
事業主体 建設省御所ダム工事事務所
調査期間 昭和54年7月1日～9月7日
調査対象面積 2,000㎡
発掘面積 1,700㎡
遺跡記号 MBIII79

1. 遺跡の立地

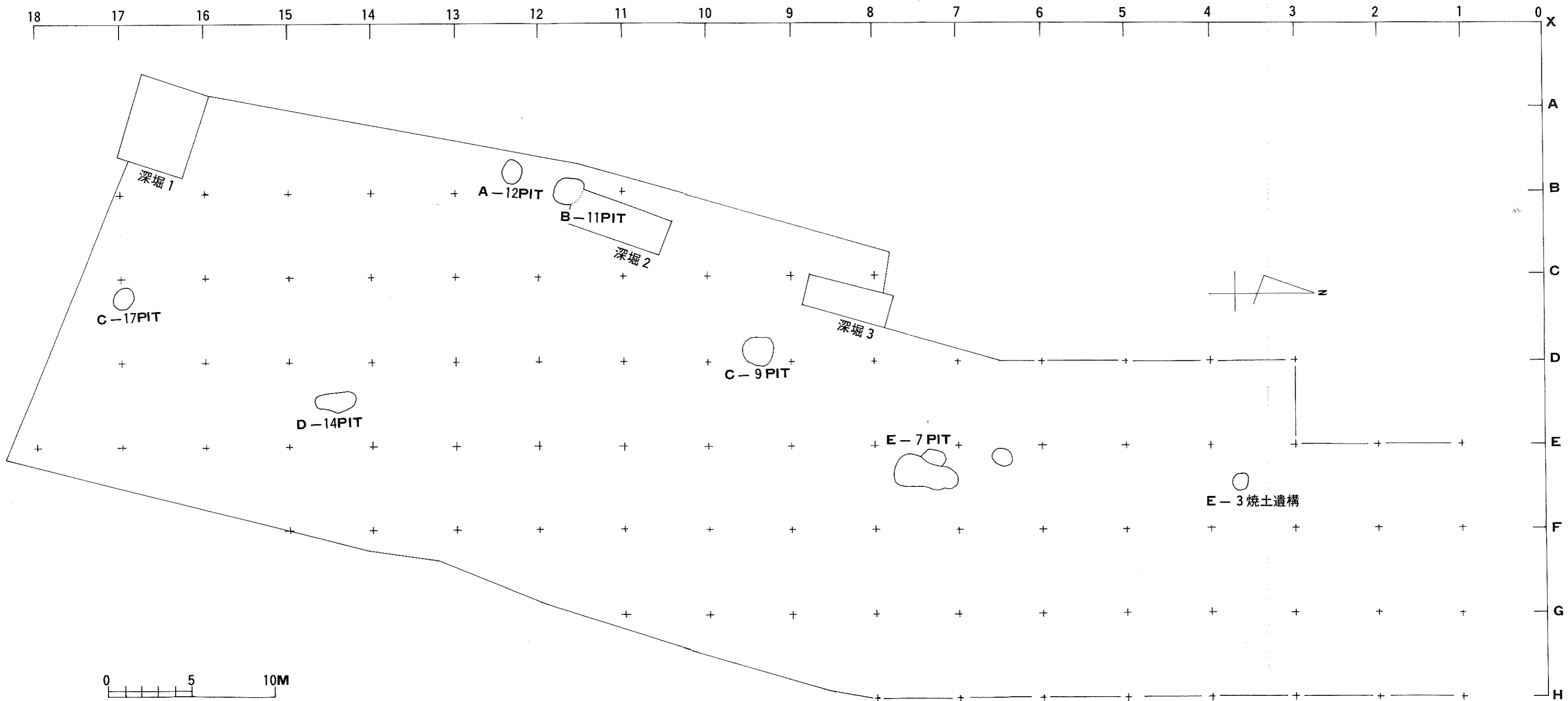
町場Ⅲ遺跡は国鉄田沢湖線雫石駅南東 3.4 kmの所に位置する。雫石川の支流矢櫃川によって開析された河岸段丘上に存在する。本遺跡の西側には丘陵性の上位段丘がある。東側は矢櫃川に望む急峻な崖となっている。矢櫃川との比高は 3 m 土である。周辺の遺跡としては、広瀬Ⅱ遺跡・町場Ⅰ遺跡・町場Ⅱ遺跡・熊の橋遺跡・田屋館遺跡等がある。

2. 調査の概要

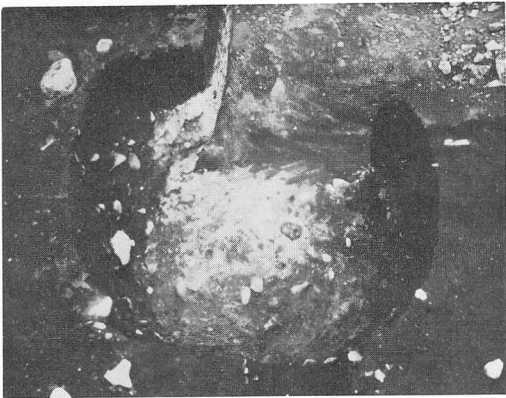
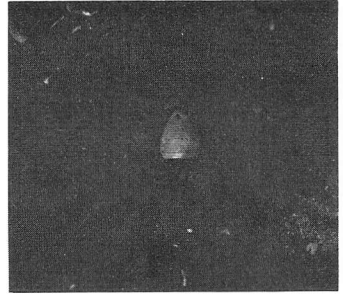
町場Ⅲ遺跡の調査は、御所ダム建設に伴う事前調査である。調査は昨年度と本年度の 2 ケ年にわたって行われた。本年度に検出された遺構は焼土遺構 1 基とピット 7 基である。出土遺物としては土器・石器・土製品がある。土器は縄文式土器であり縄文前期から後期にわたっている。石器は有柄石鏃・石ヒ・石斧等がある。土製品は土偶・鐸形土製品がある。

3. ま と め

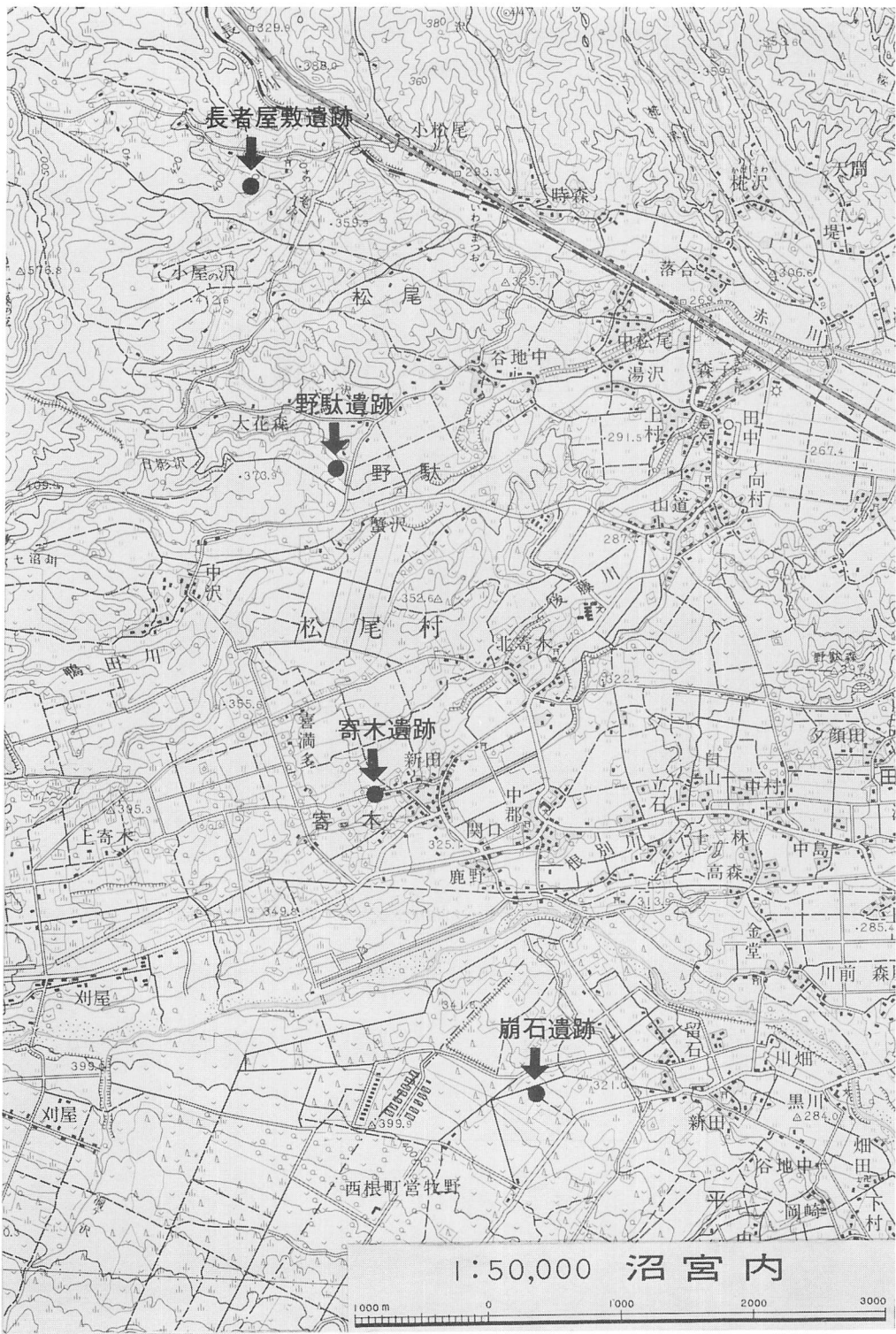
本調査で、集落が検出されるものと考えたが、調査の結果、焼土遺構とピットが検出されただけであり集落として遺跡の広がりはつかみ得なかったが、出土遺物より縄文時代後期の資料を得ることができた。



町場Ⅲ Grib 遺構配置図



III 道路公団關係



東北縦貫自動車道関連遺跡位置図(1)

(1) 長者屋敷遺跡

- (1) 遺跡所在地 岩手郡松尾村大字松尾字大花森
事業主体 日本道路公団仙台建設局
調査期間 昭和54年4月2日～11月30日
調査対象面積 29,380㎡
発掘面積 29,000㎡
遺跡記号 CY79
協力機関 松尾村教育委員会、西根町教育委員会
協力員 中村清也

1. 遺跡の立地

本遺跡は、国鉄花輪線岩手松尾駅西方 1.5 km、松尾村役場西北約 3.6 km に位置する。遺跡は前森山の山麓緩斜面の東側一帯に分布する山地性丘陵に所在し、標高 370 m ほどの丘陵性山地の頂部一帯、および金ヶ崎段丘相当面から更に、中松尾付近で赤川に合流する長川の一支流に沿った沖積古期面に分布している。周辺の遺跡としては、野駄遺跡・水切場遺跡がある。

2. 調査の概要

本遺跡の調査は、東北縦貫自動車道建設に伴う緊急事前調査である。遺跡は自動車道本線及び松尾パーキングエリア全域にわたる広大なものであり、2ケ年の継続調査とした。本年は、2ケ年目に当たり、本線部分の一部とパーキングエリア分全域を調査対象とした。調査は調査対象区域全域全面に粗掘をかけて遺構検出を行い精査を行った。その結果、縄文時代竪穴住居址 183 棟、平安時代竪穴住居址 5 棟、焼土遺構 4 基、ピット類 256 基、配石遺構 2 基、土器埋設遺構 2 基が検出された。以下調査の概要である。

<住居址>

縄文時代住居址 183 棟を時期別で大別すると、前期 108 棟、中期 61 棟、晩期 4 棟、不明 10 棟となる。各期における占地は、おおよそ次の様になる。前期住居址は、丘陵頂面部付近、緩傾斜面、中期住居址は丘陵頂面部付近の緩斜面部と、低位段丘の頂面及び傾斜面、晩期住居址は沖積古期面。前期竪穴住居址プランは規模によって大別される。規模が 10m を超すものにおいては、長形状又は不整楕円形、5 m ～ 7 m のものは隅丸方形、不整楕円形、5 m 以下のものは、長方形、隅丸方形となっている。床面は小型のものほど固く締まっており、周溝はそれぞれにおいて異なる。柱穴は 10m 以上の規模のものほど大きくとらえやすいし、数も多くなるが、10m 以下の規模の場合には、とらえにくく、5 m 以下の場合には全くとらえられないものもある。炉は地床炉で、10m 以下の規模では床面中央に 1 基配置されている。炉の断面の観察から二次使用と思われるものも存在する。10m 以上の規模では長軸に対して複数の地床炉が 1 列に並ぶもの、2 列に並ぶものもある。前期竪穴住居址の最大規模は長軸 21m、短軸 7 m である。中期竪穴住居址は前期竪穴住居址とは異なり明瞭な規模によるプランの変化はつかめない。総じて円形、楕円形が多い。床面はやや締まりが悪く軟かい傾向にあり、周溝はそれぞれによって異なる。柱穴は多角形になるものが多い。炉は地床炉、石囲炉、土器埋設炉の他複式炉系統がある。地床炉は床面中央部に配置され、他の炉は壁寄りにつくられているものが多い。複式炉の形態は種々あり、今後の課題である。中期竪穴住居址の最大規模は 12m × 9 m である。晩

期竪穴住居址は沖積古期面の黒色土層中に検出面を持つためにプランの把握は困難であり、従って正確な規模も不明である。焼失住居址1棟から推定するとプランは隅丸方形か、不整円形と考えられる。床面は炭化材直下と思われるが、軟かく、周溝は不明である。柱穴配置は不明である。炉は石囲炉と土器埋設石囲炉である。平安時代竪穴住居址は、丘陵北端付近に占地している。プランは方形・長方形で、規模は最大一辺6mで最小一辺4m（推定）である。床面は比較的固く、所により肌分け現象も見られ、周溝をもつものもある。柱穴は4ケで対角線上にのるものもある。カマドは一樣に南壁につくられ、どちらかに片寄りを見せている。袖は安山岩類の礫を火山灰で覆ってつくっており、燃焼部から煙道部にかけての立ち上りは急で、煙道部自体は緩やかな上り勾配を呈している。カマド付近に貯蔵穴状のピットが伴う。出土遺物はロクロ使用期の土師器と鉄器である。

〈フラスコピット類〉

フラスコピットと確認されたもの112基、その他の形状を示すもの144基である。これらのピットの占地は、住居址の占地と大きな係わりを持つものと考えられるが、丘陵頂面部東側及び、北側埋没谷付近に集中している。平面形は円形・楕円形のものが多く、底部に浅いピットや溝を伴うものもある。埋土が、炭化物を含む層と黄褐色土層の互層が認められるものもあり人為的なものを思わせ、再利用とも考えられる。出土遺物は土器が主であるが、1基から中期の完形深鉢7ケが出土した例がある。

〈その他の遺構〉

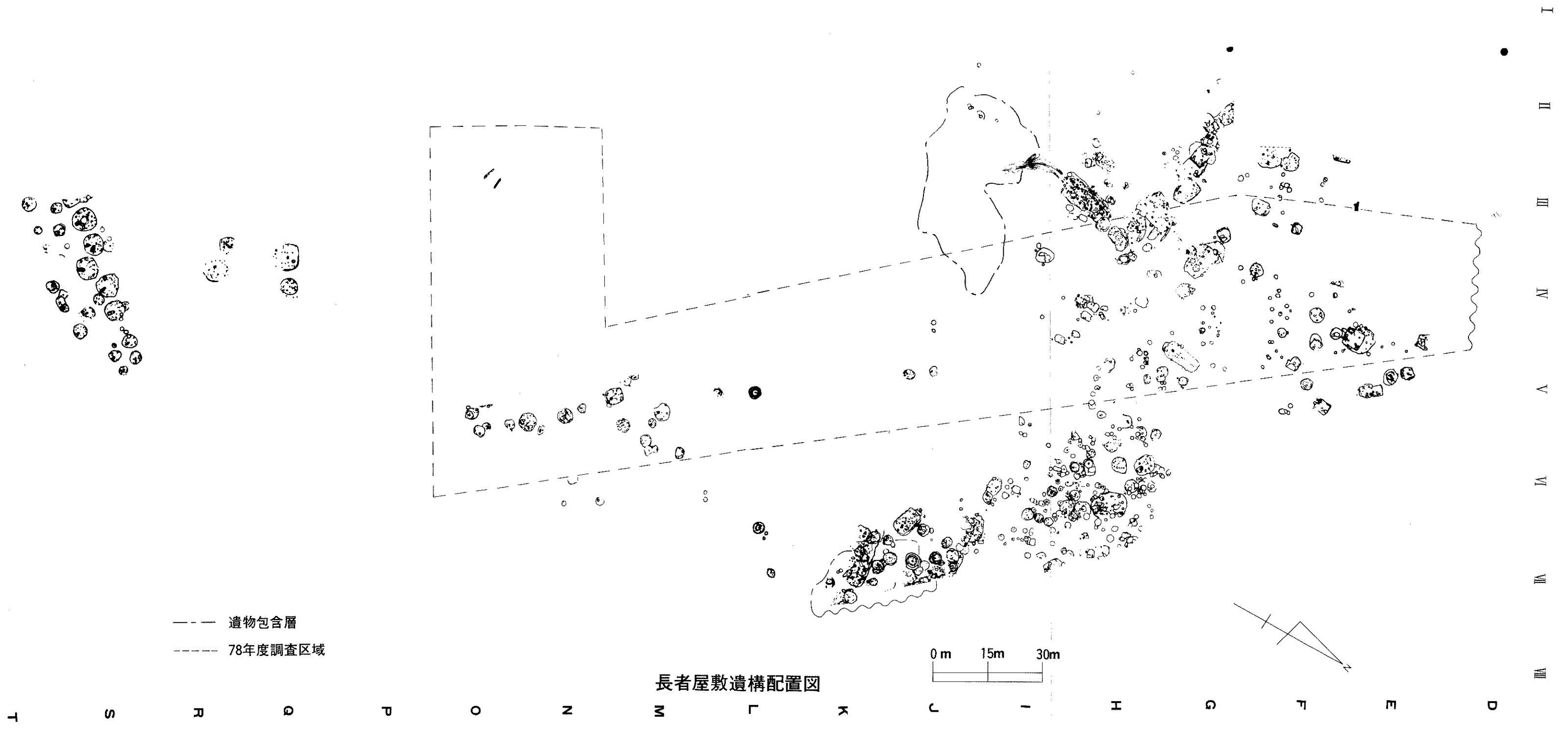
配石遺構は丘陵頂面から東側緩斜面にかけて2基検出されており、立石を使った組石状の遺構と考えられ、検出面から縄文時代中期以降であろう。丘陵西側急斜面に広範な遺物包含層が存在した。この包含層からの出土遺物の時期は縄文時代前期が主体である。又、斜面中央部付近の湧水周辺に安山岩巨礫が露出しており、その巨礫の間に縄文晩期の壺・鉢・石皿・敲石等が完全な形で出土した。

〈出土遺物〉

出土遺物は縄文時代土器・石器・石製品・平安時代土師器・鉄器である。縄文時代土器は、時期的には前期・中期・晩期のもので、器種としては深鉢・浅鉢・壺・ミニチュア土器が多い。出土は住居址、ピット、包含層から巨礫の間からも出土している。石器は石斧・石鏃・石匙であるが、石製品としては、石棒の他、岩偶・青竜刀型石器が出土している。土師器はロクロ使用で杯・甕が出土しているが、非常によく磨かれた糸尻つきの埴状のものが出土している。

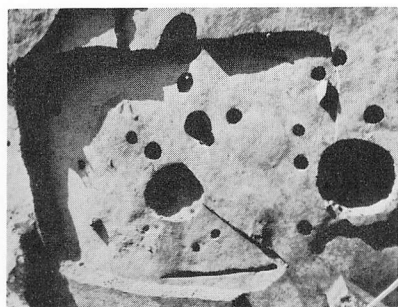
3. ま と め

昨年度調査面積とほぼ同程度の面積を調査したが、縄文時代前期、中期を中心とした大集落が検出され、いわゆる大型住居址も多くの形状を有しており、又時期による集落占地の問題とか、特殊遺物の出土など、縄文時代研究に多くの新資料が与えられた。

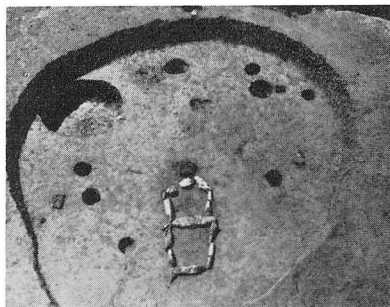




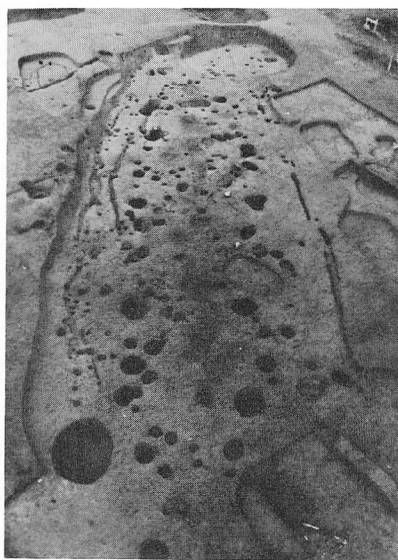
遺跡航空写真



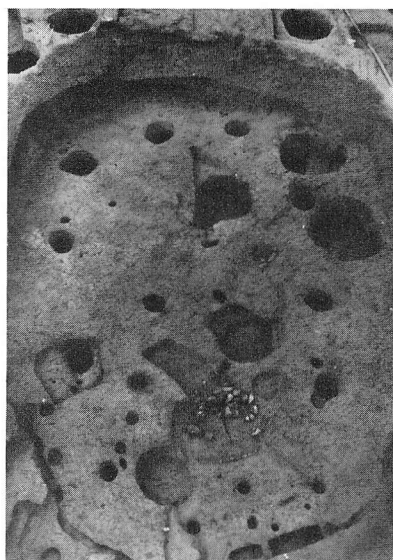
F II-2住居址



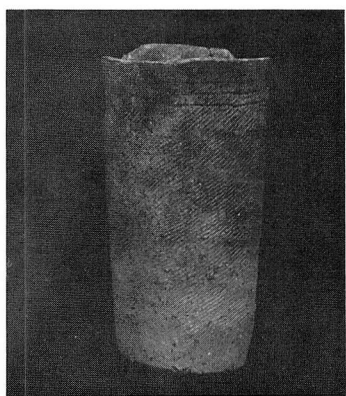
SV-3住居址



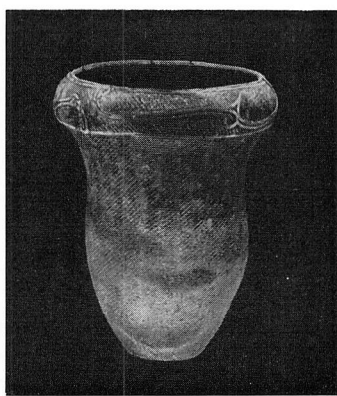
H III-11住居址



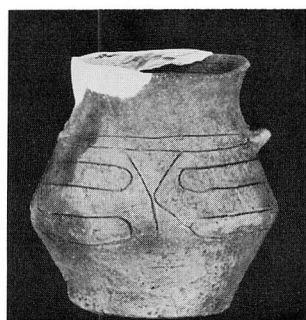
H VII-1住居址



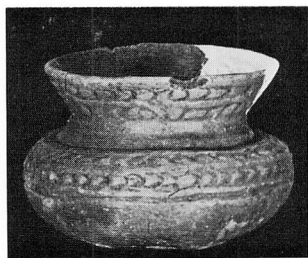
H III 区出土



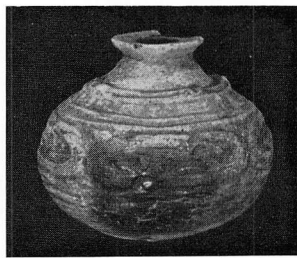
I VII 区出土



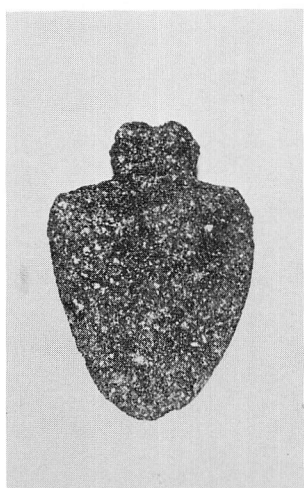
J III 区出土



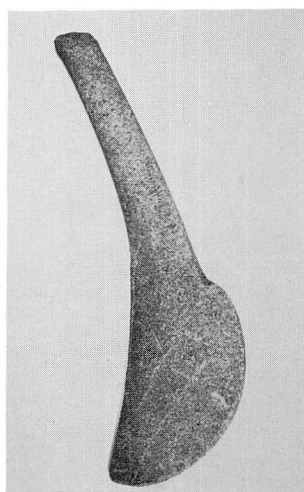
J III 区出土



G VI 区出土



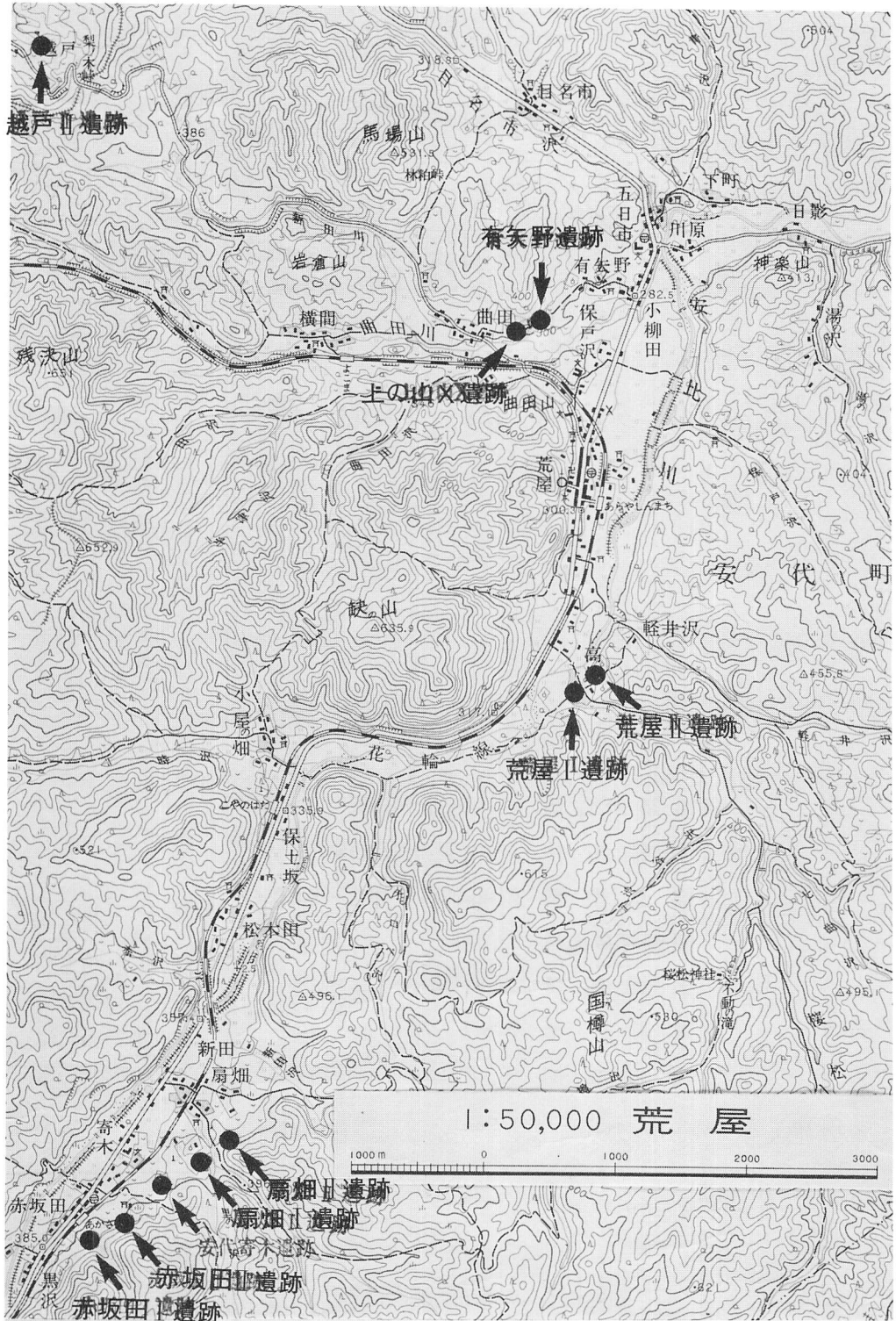
I VII-3 住居址出土



H VI-5 住居址出土

(2) 赤坂田 I 遺跡

- (2) 遺跡所在地 二戸郡安代町赤坂田
事業主体 日本道路公団仙台建設局
調査期間 昭和54年4月16日～8月31日
調査対象面積 12,800㎡
発掘面積 12,800㎡
遺跡記号 ASI-79
協力機関 安代町役場



東北縦貫自動車道関連遺跡位置図(2)

1. 遺跡の立地

本遺跡は国鉄花輪線赤坂田駅東南 150 m に位置する。遺跡の東側は山地で、その山地より流れる小沢によって形成された小規模の扇状地が発達しており、この扇状地上に位置している。この扇状地は、北側の山地沿いに発達し、途中小沢や小川をはさみながら扇畑II遺跡まで連なる。標高約 410 m で安比川との比高30m である。周辺の遺跡としては、赤坂田II遺跡・扇畑 I・II遺跡がある。

2. 調査の概要

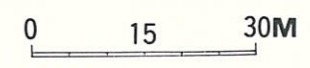
本遺跡の調査は東北縦貫自動車道建設による緊急調査である。本遺跡の調査は2ケ年に涉って行うこととし、本年は遺構検出でとどめた。検出された遺構は縄文時代竪穴住居址15棟、ピット類である。時期については不明である。

3. ま と め

一連の扇状地上の遺跡の性格を明らかにする事のできる資料が得られるものと、来年度の精査に期待している。



赤坂田Ⅰ遺跡遺構配置図



(3) 赤坂田 II 遺跡

- (3) 遺跡所在地 二戸郡安代町赤坂田
事業主体 日本道路公団仙台建設局
調査期間 昭和54年4月16日～8月31日
調査対象面積 7,800㎡
発掘面積 7,800㎡
遺跡記号 AS II-79
協力機関 安代町役場

1. 遺跡の立地

本遺跡は国鉄花輪線赤坂田駅東 400 m に位置する。遺跡の東側は山地で、その山地より流れる小沢によって形成された小規模の扇状地が発達しており、この扇状地上に存在している。標高約 400 m で安比川との比高は約30m である。周辺の遺跡としては、赤坂田 I 遺跡・扇畑 I・II 遺跡がある。

2. 調査の概要

本遺跡の調査は東北縦貫自動車道建設による緊急事前調査である。本遺跡の調査は、調査体制の都合から 2 ケ年に涉って行う事とし、本年は遺構検出までとした。検出された遺構は縄文時代竪穴住居址 22 棟、ピット類である。時期については、検出時に採取された遺物より後期と考えられる。

3. ま と め

一連の扇状地上の遺跡の性格を明らかにする事のできる資料が得られるものと、来年度の精査に期待している。



赤坂田Ⅱ遺跡遺構配置図

(4) 安代寄木遺跡

- (4) 遺跡所在地 二戸郡安代町寄木
事業主体 日本道路公団仙台建設局
調査期間 昭和54年4月16日～8月31日
調査対象面積 3,000㎡
発掘面積 3,000㎡
遺跡記号 AY-79
協力機関 安代町役場

1. 遺跡の立地

本遺跡は国鉄花輪線赤坂田駅北東 750 m に位置する。遺跡の東側は山地で、その山地より流れる里の沢によって形成された扇状地上に立地している。標高約 390 m で安比川との比高は約 20m である。周辺の遺跡としては、赤坂田 I・II 遺跡、扇畑 I・II 遺跡がある。

2. 調査の概要

本遺跡の調査は東北縦貫自動車道建設による緊急事前調査である。当初の調査予定では 2 ヶ年に涉って行う事とし全面に粗掘をかけたが、遺構は全く検出されず、路線範囲内には遺跡が存在しないものと考え、粗掘で調査を打ち切った。地層を見るに里の沢の開析をまともに受け、崖錐性の堆積物が厚く堆積していた。

(5) 扇畑 I 遺跡

- (5) 遺跡所在地 二戸郡安代町扇畑
事業主体 日本道路公団仙台建設局
調査期間 昭和54年4月16日～11月2日
調査対象面積 2,800㎡
発掘面積 2,800㎡
遺跡記号 OHI79
協力機関 安代町役場

1. 遺跡の立地

本遺跡は国鉄花輪線赤坂田駅北東 1.0kmの所に位置する。遺跡の東側は山地で、この山地より流れ出る安比川支流の見嶽川によって形成された扇状地上に立地する。この扇状地の南側、西側はなだらかな傾斜となり、安比川によって形成された沖積地に続いている。しかし一部は開田によって、本来の地形を失っている。北側は、見嶽川によって侵食され、崖を形成している。標高約 390 m、安比川との比高約 25m である。周辺の遺跡としては、赤坂田 I・II 遺跡・扇畑 II 遺跡がある。

2. 調査の概要

本遺跡の調査は東北縦貫自動車道建設に伴う緊急事前調査である。当初予定としては、赤坂田 I 遺跡から扇畑 II 遺跡までの 5 遺跡について粗掘、遺構検出のみにとどめる予定であったが予定以上に粗掘が進行し、精査が可能となり、単一時代の遺構のみが検出された扇畑 I 遺跡を精査した。精査した遺構はロクロ使用土師器を伴出する竪穴住居址 10 棟、ピット 15 基、焼土遺構 3 基、陥し穴状遺構 2 基である。以下調査の概要である。

〈竪穴住居址〉

竪穴住居址 9 棟は、いずれも伴出遺物から同時期のものと考えられ、切り合い、拡張、縮小は認められなかった。住居址のプランは方形又は長方形で、規模は最大規模 6.5 m × 6.0 m で、最小規模 3.4 m × 3.7 m である。床面は比較的平坦でしまりは良い。周溝は存在するものと、しないものがある。床面真近くに十和田 a 降下火山灰がブロック状又は層となって堆積している。カマドは南壁の東寄りに位置するが 1 棟のみ西寄りに位置する。袖部は板状の安山岩を主とした礫を土器片とシルトで補強して構築している。煙道部も壁と天井部に礫を用いているものもある。煙道のつくりは、トンネル式はなく全て掘り込み式である。カマドの周辺には貯蔵穴状の掘り込みが見られる。柱穴は 2 棟で検出されたのみである。柱位置は、2 本が南壁に接し、2 本が北壁よりの床面にある。又他の住居址外周に柱穴状のピットがいくつか存在するが、柱穴とは断定でき得なかった。10 棟の住居址のうち 3 棟が焼失住居であり、放射状に炭化材の配列が見られ、1 棟においては北東のコーナー付近で敷板状の炭化板材が認められた。この焼失住居は屋根材の炭化物が多量に残っており、未鑑定ではあるが、笹竹類と思われる。この屋根材の上部には火熱を受けたシルトが堆積している。十和田 a 降下火山灰は、床面直上と、炭化材の上に薄く堆積していた。この他方形竪穴が 1 棟検出されたが、カマド・炉・柱穴が認められなかったが、土師器の内外黒色処理をした坏を出土している。住居址からの出土遺物は土師器・須恵器・鉄器・炭化櫛・石製品である。

〈ピット〉

ピットのプランは円形・楕円形・長方形で、規模は1 m前後で深さは50cm前後である。出土遺物は土師器細片のみで、出土しないものが多い。

〈焼土遺構〉

遺跡調査区域内で3基検出され、焼土の範囲は0.7 m × 0.8 から1.3 m × 1.1 m でレンズ状に堆積したものとピット状のものがあり、現地性の焼土と思われる。焼土中から土師器片が出土した。

〈陥し穴状遺構〉

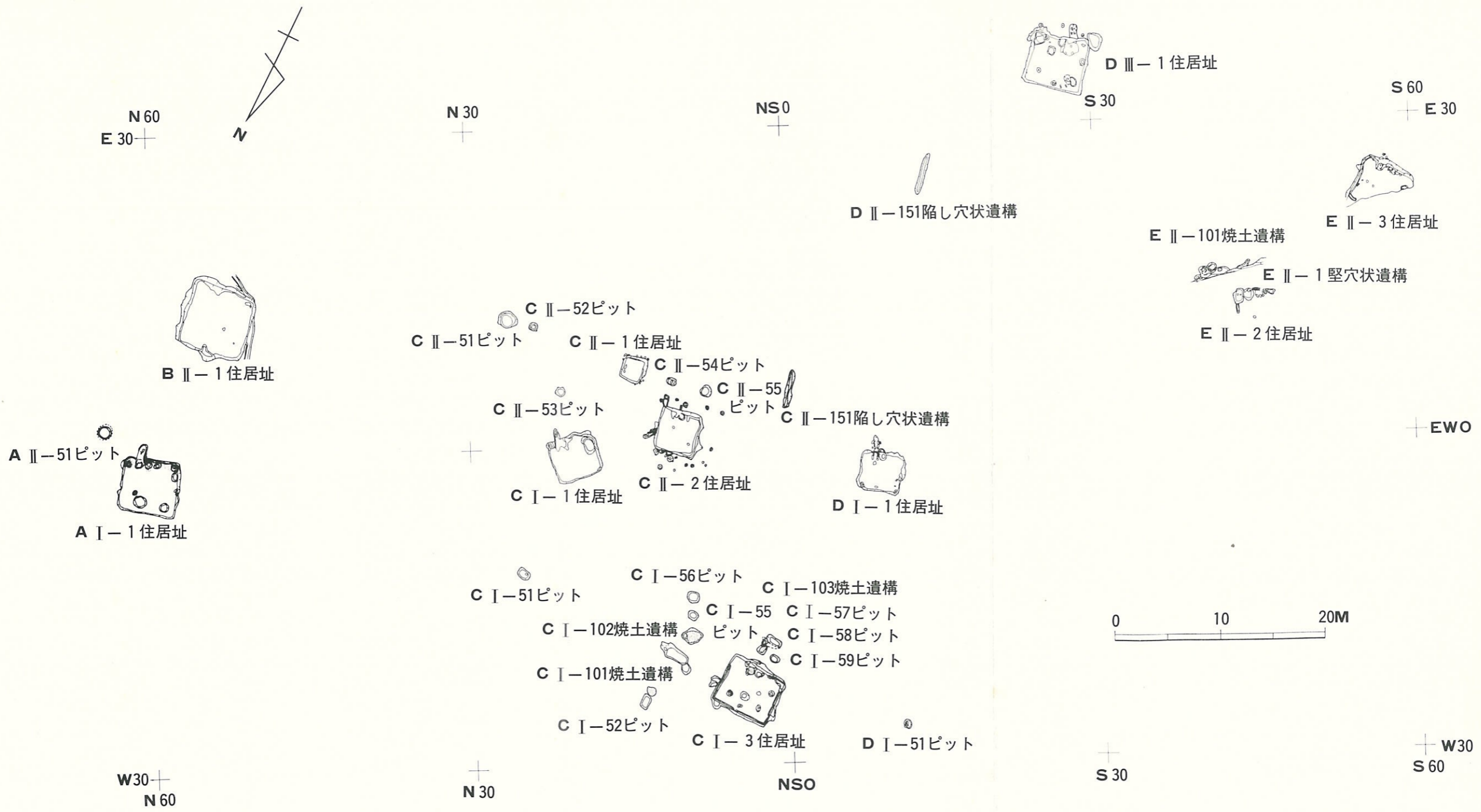
陥し穴状遺構は調査区域西側に2基検出され、開口部長軸4.0 m と3.6 m、短軸55cm、深さ1.0 m と1.1 m である。長軸方向はほぼ南北である。埋土は暗褐色土で出土遺物はない。

〈出土遺物〉

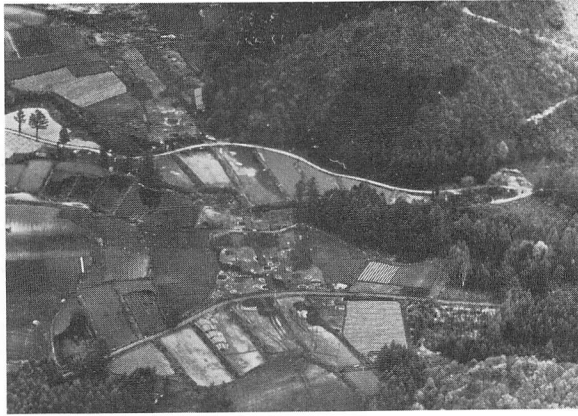
出土遺物は縄文土器・土師器・須恵器・鉄器・木器・石製品である。縄文土器は細片でいずれも表土中より出土しており、時期は不明である。土師器はロクロ使用とロクロ未使用である。器種は坏・甕である。ロクロ使用土師器の坏は内面黒色処理のものが比較的少なく、黒色処理をほどこさないものが多い。内面黒色処理のものは内面の器面調整にヘラミガキをほどこしている。糸尻風の高台をもつもの、小型の塊状のものが出土している。又、ロクロを使用せず手こねで製作された摺鉢状の形状をもつ土器の一部も出土している。甕は小型と大型に分けられる。小型のものは口径14～15cm、高さ15cmでロクロ成形である。胎土・焼成共に良好である。大型甕は体部成形が雑で輪積や巻上げ痕を残し粗いけずりが見られる。須恵器は大甕の破片のみである。鉄器は刀子、角釘である。木器は炭化した櫛1点である。この櫛は、焼失住居の床直上から発見された。発見時は完形で、炭化していた。形状は長方形の櫛目の細い精巧な作りである。

3. ま と め

出土遺物はほぼ一時期のものであることから同時期の集落と考えられる。住居址間における切り合いもなく、カマド位置、方向、構築法もほぼ同一であることから同時期と思われる。平安時代中期の集落構成を知る上で貴重な資料となる。又、安代町における平安時代集落としても重要な資料が得られた。来年度精査予定の扇畑II遺跡にも同時期と考えられるものが検出されており、併せて考えていきたい。



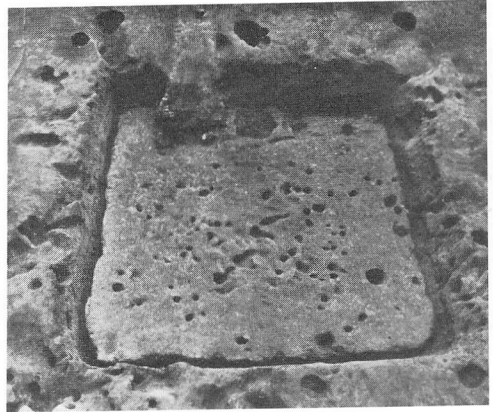
扇畑I遺跡遺構配置図



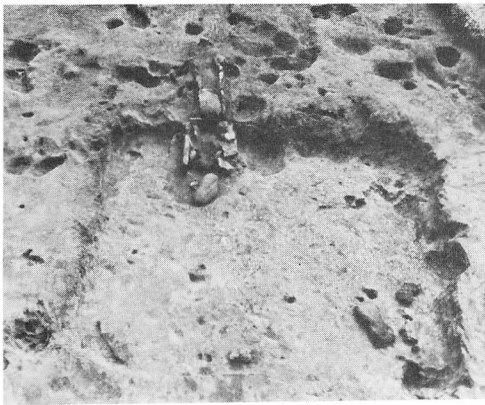
遺跡航空写真



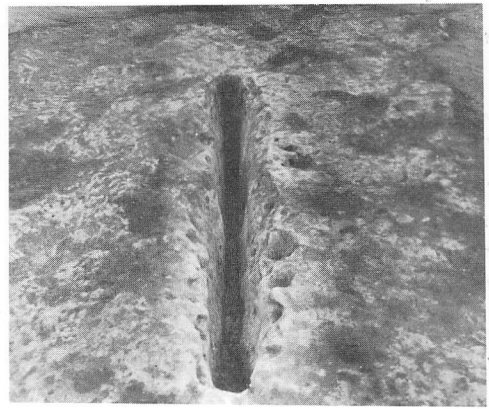
C I - 1 住居址 炭化物出土状況



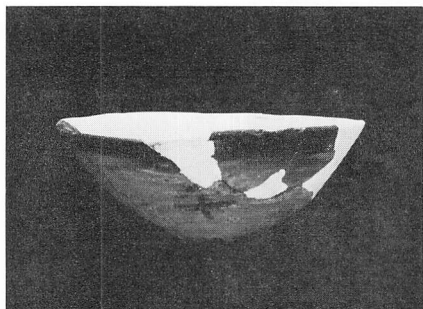
C II - 2 住居址 全景



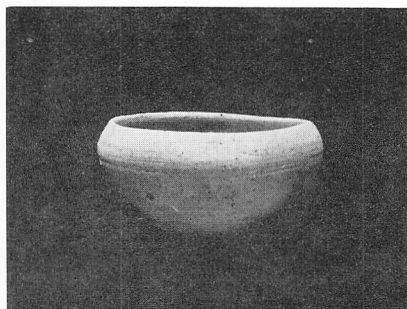
D I - 1 住居址 全景



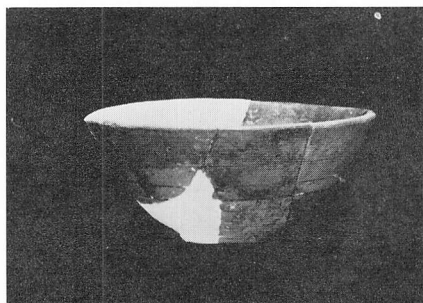
D II - 151 陥し穴状遺構



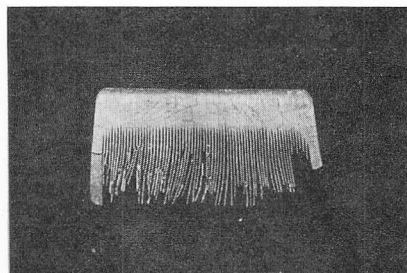
C I - 2 住居址出土 坏



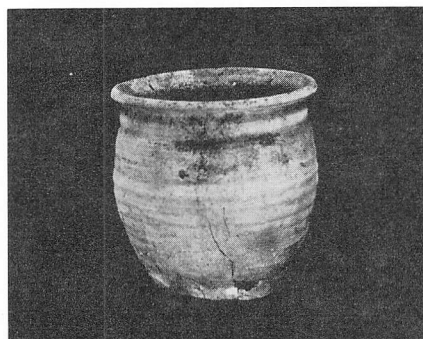
C I - 1 住居址出土 坏



A I - 1 住居址出土 坏



C I - 1 住居址出土 櫛



A I - 1 住居址出土 甕



A I - 1 住居址出土 甕

扇畑 I 遺跡出土遺物

(6) 扇畑 II 遺跡

- (6) 遺跡所在地 二戸郡安代町扇畑
事業主体 日本道路公団仙台建設局
調査期間 昭和54年4月16日～8月31日
調査対象面積 12,270㎡
発掘面積 12,270㎡
遺跡記号 OHII-79
協力機関 安代町役場

1. 遺跡の立地

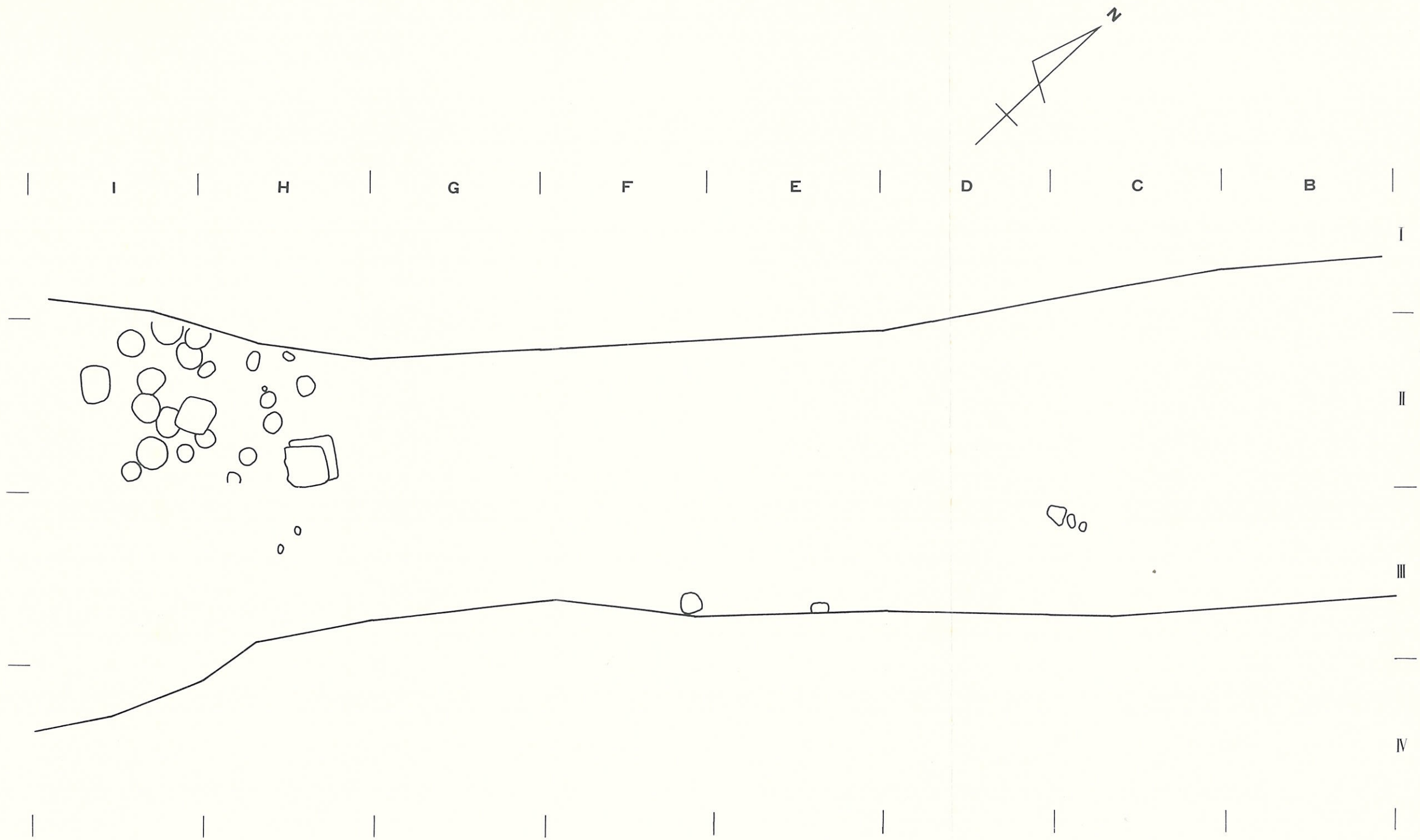
本遺跡は国鉄花輪線赤坂田駅北東 1.2kmに位置する。遺跡の東側は山地で、安比川の支流見嶽川によって形成された扇状地上に立地する。この扇状地の北側、西側はなだらかな傾斜となり、安比川によって形成された沖積地に続いている。南側は見嶽川によって侵食され、崖を形成している。標高約 385 m で安比川との比高は約25m である。周辺の遺跡としては赤坂田Ⅰ・Ⅱ遺跡・扇畑Ⅰ遺跡である。

2. 調査の概要

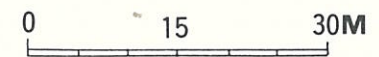
本遺跡の調査は東北縦貫自動車道建設に伴う緊急事前調査である。調査は、調査体制の都合により 2ケ年に涉って行う事とし、本年度は遺構検出までとした。調査は路線範囲内全域に粗掘をかけた結果、遺構は、南側崖縁を中心にまとまりを見せた。検出された遺構は縄文時代竪穴住居址12棟、平安時代竪穴住居址 6 棟とピット類である。縄文時代竪穴住居址の時期は検出時に採取された遺物から縄文時代後期のものと思われる。

3. ま と め

一連の扇状地上の遺跡の性格を明らかにする事のできる資料が得られるものと、来年度の精査に期待する。



扇畑II遺跡遺構配置図



(7) 荒屋 I 遺跡

(7) 遺跡所在地 二戸郡安代町高畑
事業主体 日本道路公団仙台建設局
調査期間 昭和54年5月14日～6月16日
調査対象面積 6,000㎡
発掘面積 3,600㎡
遺跡記号 AY I 79
協力機関 安代町

1. 遺跡の立地

本遺跡は国鉄荒屋新町駅南 1.3 km、安代町役場南南東 1.5 km に位置する。遺跡は北流する安比川にそそぐ、不動川によって形成された河岸段丘で、金ヶ崎段丘相当面である。遺跡の南側は山地となり、北側は小規模な中位段丘面と高位段丘面が分布し、東側は本遺跡と同一段丘面が、ゆるやかな傾斜で巾狭く続き、西側は安比川による沖積地となっている。標高は 316 m で安比川との比高は 12 m である。周辺の遺跡としては、荒屋 II 遺跡・有矢野遺跡・保土沢遺跡・上の山 X 遺跡がある。

2. 調査の概要

本遺跡の調査は、東北縦貫自動車道建設に伴う緊急事前調査である。調査は工事の関係上、家屋の移転前に行われた為宅地部分を工事立会いとして 3,600 m² の畑地を対象にして行われた。対象地全域に粗掘をかけ、遺構検出した結果、竪穴住居址 5 棟、ピット 7 基、焼土遺構 3 基である。以下調査の概要である。

〈竪穴住居址〉

竪穴住居址 5 棟はいずれも縄文時代で、時期としては、中期 2 棟、後期 1 棟、晩期 2 棟である。中期住居址はプランは円形で規模は 3.2 m × 2.9 m で（1 棟不明）、壁高 10 cm である。床面は平坦で炉周辺が固い。周溝・柱穴は検出されなかった。炉は土器埋設炉で床面中央よりやや西側によっている。出土遺物は深鉢形土器である。後期住居址はプランは円形で規模は 4.0 m × 4.0 m、壁高は 5 cm である。床面は平坦であるが、周溝・柱穴は検出されなかった。炉は斜位の土器埋設炉で床面ほぼ中央部である。出土遺物は土器片。晩期住居址は 2 棟であるが 1 棟は石囲炉とかすかに床面らしきものの存在で判明したものであるが、プラン規模等は不明である。1 棟のプランは円形で規模は 2.5 m × 2.3 m、壁高 30 cm である。床面はほぼ平坦で固く締っており、周溝・柱穴は検出できなかった。炉は床面中央にあり石囲炉である。出土遺物は土器片が少量である。

〈ピット〉

ピット 7 基を大別すると、形状からは浅鉢形 5 基（縄文時代中期 2、後・晩期 3）、フラスコ形 2 基（縄文時代後・晩期）である。浅鉢形ピットのプランは円形・楕円形で規模は開口部径 2.8 m ～ 0.9 m で深さは 0.3 m ～ 0.8 m である。いずれのピットからも土器片が出土し、1 基からは晩期（大洞 C₁ 式）の注口土器が出土している。フラスコ形ピットのプランは円形で規模は開口部径 1.0 m ～ 1.1 m で深さ 0.4 m ～ 0.6 m の浅いものである。出土遺物は土器片である。

〈焼土遺構〉

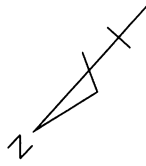
焼土遺構3基のうち掘込みをもつものが1基で、2基は自然層のまま火を焚いている。いずれも現地性の焼土である。プランは不整楕円形で、規模は0.7m×0.4mが最大で0.45m×0.35mが最小である。時期的には縄文時代中期末から後期にかけてと思われる。出土遺物は縄文土器片である。

〈出土遺物〉

出土遺物は縄文時代土器・石器である。土器は時期的には、早期・前期・中期・後期・晩期である。早期は尖底土器の底部が出土している。前期は深鉢形土器片、中期も同様である。後期は深鉢形破片・粗製土器片、晩期は深鉢形・浅鉢形・注口土器片が出土している。石器は石匙・篋状石器・磨石・スクレイパー・石槍・半円状扁平打製石器でそれぞれ1・2点である。

3. ま と め

河岸段丘縁の集落追求の資料を得られるのではないかと調査前予想したが、住居址の占地条件が限られ、集落形成に至らなかったものと考えられる。又、不動川の氾濫や、耕作、粗掘時の不手際等によって遺構の破壊が進行している。又、遺構外の遺物の多くは、不動川による他からの運搬とも考えられる。遺構から考えた時、キャンプ址的なものであらうと思われる。



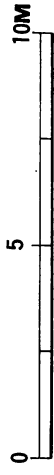
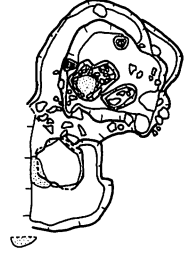
W15
N15



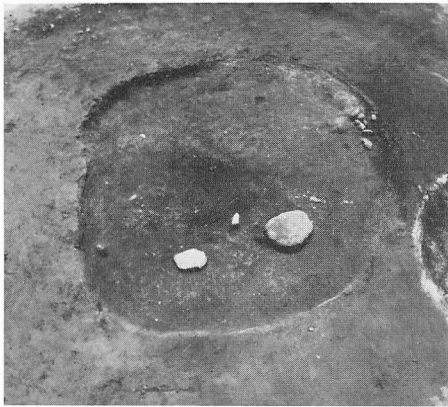
EWO



E15
N15



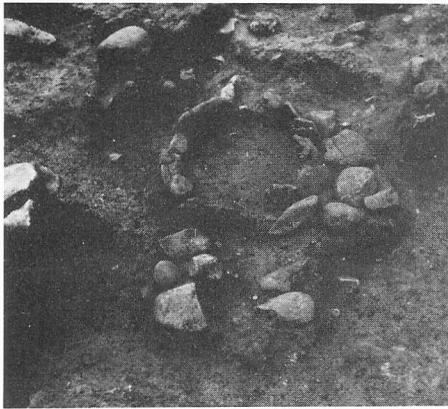
荒屋 I 遺跡遺構配置図



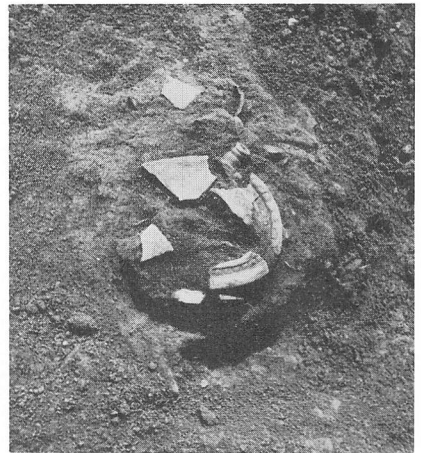
D II-1 住居址



D III-53ピット



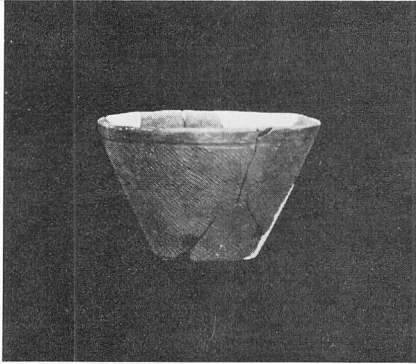
D III-3 住居址 炉



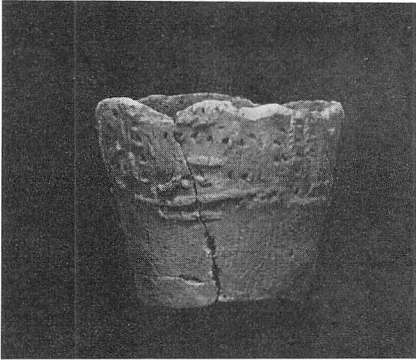
D III-51ピット 土器出土状況



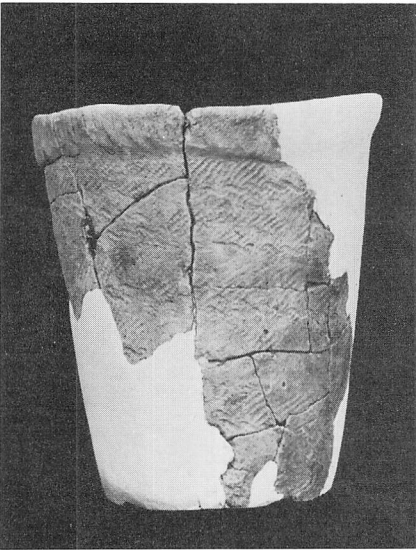
D III-4 住居址



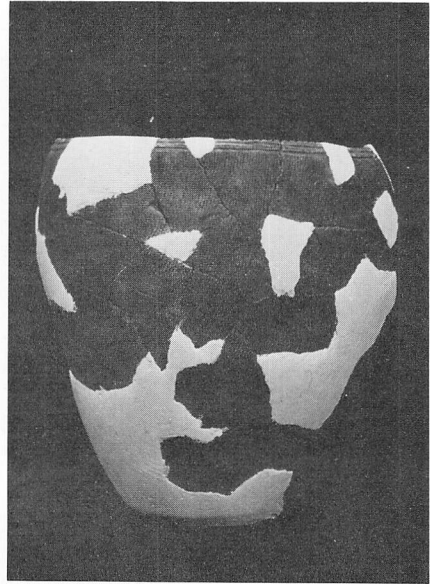
D II 区



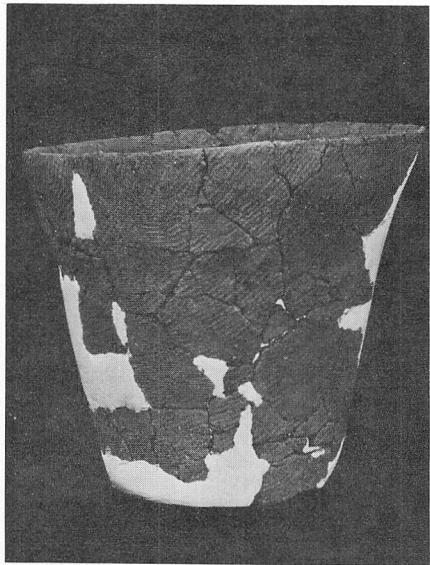
D II-1 住居址



D II 区



C II 区



D III-51 ピット

(8) 荒屋 II 遺跡

- (8) 遺跡所在地 二戸郡安代町字高畑
事業主体 日本道路公団仙台建設局
調査期間 昭和54年4月16日～5月31日
調査対象面積 6,800㎡
発掘面積 4,420㎡
遺跡記号 AY-II79
協力機関 安代町

1. 遺跡の立地

本遺跡は国鉄花輪線荒屋新町駅南 1.2 km、安代町役場南南東 1.4 kmに位置する。遺跡は北流する安比川と、山地より流れ出る不動川によって開析された村崎野相当面の段丘縁に存在する。この段丘面は南北 100 m、東西 60 m の広さを持っている。この段丘面の東側は小規模な西根段丘相当面、西側と南側には金ヶ崎段丘相当面と沖積地が分布する。標高 330 m である。安比川との比高は 26 m である。周辺の遺跡としては荒屋 I 遺跡・有矢野遺跡・保土沢遺跡・上の山 X 遺跡がある。

2. 調査の概要

本遺跡の調査は、東北縦貫自動車道建設に伴う緊急事前調査である。調査は昨年度は対象面積 6,800 m²のうち 2,380 m²の調査を完了し、縄文時代竪穴住居址 3 棟、フラスコピット 4 基、陥し穴状遺構 19 基を調査した。本年度は引続き、調査を進めたがその結果、竪穴住居址 1 棟、ピット 8 基、陥し穴状遺構 14 基を精査した。以下調査の概要である。

〈竪穴住居址〉

縄文時代竪穴住居址は 1 棟でプランは円形で、規模は 4.7 m × 4.3 m、壁高 0.1 m である。床面は平坦で特に炉周辺が固い。周溝は断続的に巡り柱穴は 5 ケである。炉は石囲複式炉で壁際に構築されている。出土遺物は縄文土器で器種は深鉢形土器である。出土遺物から時期は縄文時代中期末と考えられる。

〈ピット〉

今調査で検出したピットは 8 基で形状からフラスコ形ピット 5 基、ピーカー形ピット 1 基、皿状ピット 2 基に大別される。フラスコ形ピットのプランは円形で規模は開口部径 2.0 m から 0.6 m で深さは 1.5 m から 0.6 m である。出土遺物は埋土中から縄文時代前～中期の土器片、石器が出土している。ピーカー形ピットのプランは円形で規模は開口部径 1.08 m、深さ 0.8 m である。出土遺物はない。皿状ピットのプランは円形で規模は開口部径 1.0 m、底部径 0.8 m である。陥し穴状遺構によって切られており、陥し穴状遺構よりは時期的に古いと考えられる。1 基は埋土に現地性の焼土が存在する。

〈陥し穴状遺構〉

昨年度の調査分と合わせ 33 基の精査を行ったが、単独で存在するもの 5 基で、28 基は 4～10 基のまとまりを持っている。路線外を調査すると更に増すかも知れないが、形状からは 3 類に分ける事が可能である。A、長軸が 2.5 m を越え、短軸が 1 m 以下のもの、この遺構には底部に 2～7 ケの柱穴をもっている。B、長軸が 2.0 m 以下で短軸が 1.2～0.7 m のもので、底部

に2～3ヶの柱穴をもっているもの。C、規模はB類と同じであるが底部に柱穴を持たないものである。A類は単独での存在は認められないで4～7基が並列している。B類は単独で存在することが多い。C類は7～10基が並列している。このうち今年度調査で精査されたC類10基は調査区域内最南端の微高地の同一等高線上を取り囲む様に4～6m間隔で構築されており、この10基には、十和田a降下火山灰が埋土上部に厚く堆積している。又、調査時において、野兔1羽がこの陥し穴状遺構に落込みとらえられた。

〈出土遺物〉

出土遺物はいずれも細片で、縄文時代前期・中期が主である。

3. ま と め

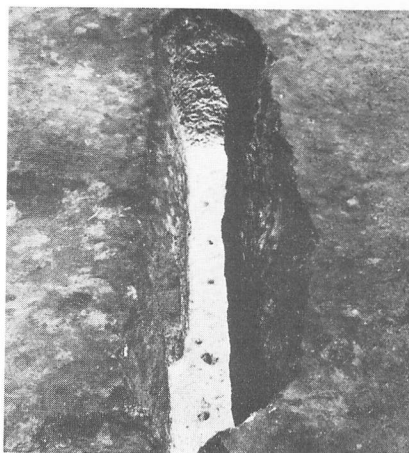
前年度の調査と合わせて、縄文時代竪穴住居址4棟、ピット12基、陥し穴状遺構33基を検出精査した。これらはいずれも縄文時代のものであると考えられるが、それぞれの切り合い関係から住居址・ピットが古い時期のものであると考えられる。縄文時代における陥し穴状遺構と住居址・ピットとの先後関係が明確にとらえられたのは県内においては、都南村湯沢遺跡しかなく本遺跡で更にその先後関係がとらえられ資料の増加を見た。又、従来の陥し穴状遺構と全くタイプを別にしたものがとらえられ、今後の研究に多くの示唆を与えたものと言える。又、時期設定については、埋土上部に十和田a降下火山灰をのせる事によって、時期幅とくにこの遺構の終末期についての年代に再考をうながすものであろう。



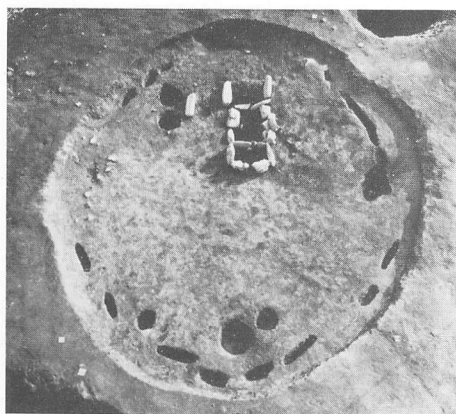
荒屋Ⅱ遺跡遺構配置図



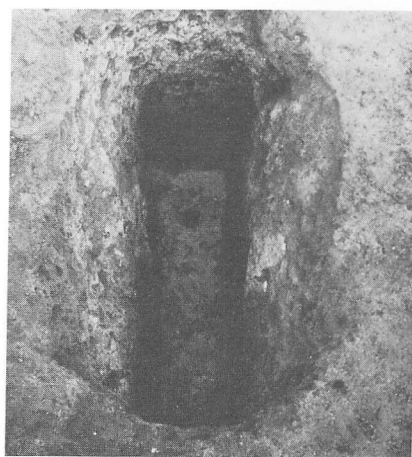
荒屋Ⅱ遺跡航空写真



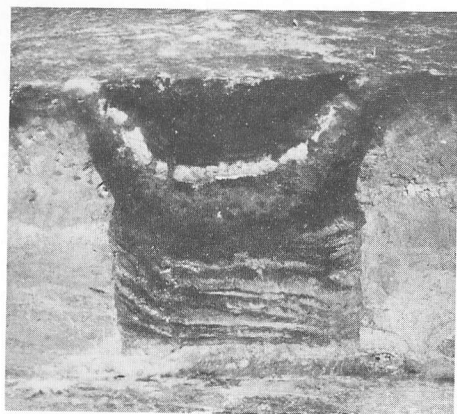
E I - 104 陥し穴状遺構



E II - 2 住居址



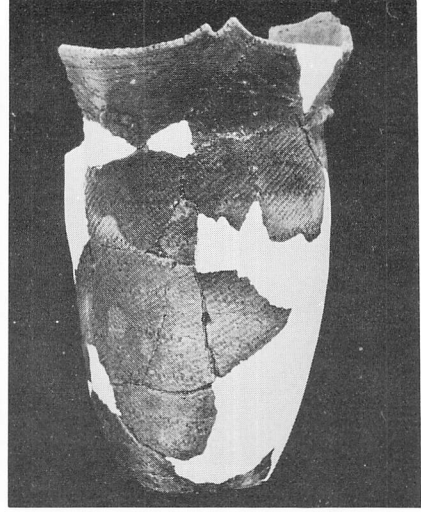
F I - 101 陥し穴状遺構



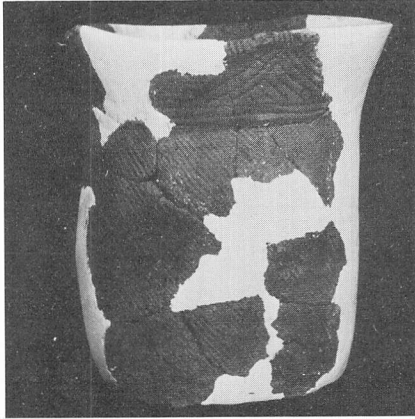
E II - 101 陥し穴状遺構断面



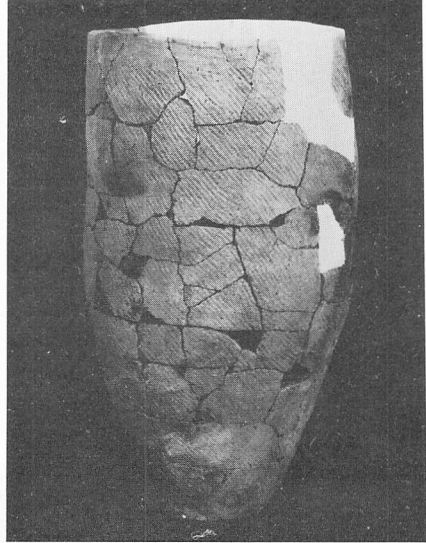
E I - 104 陥し穴状遺構



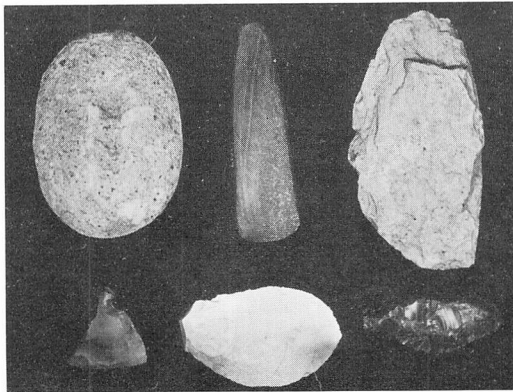
E I - 59 ピット



E I - 1 住居址



E II - 2 住居址



出土石器

(9) 有 矢 野 遺 跡

(9) 遺 跡 所 在 地 二 戸 郡 安 代 町 有 矢 野
事 業 主 体 日 本 道 路 公 団 仙 台 建 設 局
調 査 期 間 昭 和 54 年 6 月 16 日 ~ 8 月 11 日
調 査 対 象 面 積 6,000 m²
発 掘 面 積 6,000 m²
遺 跡 記 号 A Y N 79
協 力 機 関 安 代 町

1. 遺跡の立地

本遺跡は、国鉄花輪線荒屋新町駅北方約1.7kmに位置する。北流する安比川に合流する目名市沢と曲田川によって形成された段丘面上に立地する。この段丘面は長さが、北北東方向約1.2km、幅が西北西方向300mほどの広がりを持ち、段丘面全体が遺跡であり、過去安代町立五日市小学校建設時に多量の遺構・遺物が出土したといわれている。調査区域はこの段丘西南西端の段丘縁と斜面である。この段丘は村崎野段丘相当面である。標高305m～320m、安比川との比高15～30mである。周辺の遺跡として、上の山X遺跡・曲田遺跡・上の山館がある。

2. 調査の概要

本遺跡の調査は東北縦貫自動車道建設に伴う緊急事前調査である。路線範囲内全域に粗掘をかけ、遺構検出を行った。現状は斜面部は段状になって耕作されていたが、粗掘の結果は段は存在せず、傾斜面となっていた。遺構は竪穴住居址15棟、竪穴状遺構1棟、ピット36基、陥し穴状遺構3基、溝1条、土器埋設遺構1基が検出された。以下調査の概要である。

〈竪穴住居址〉

検出された竪穴住居址15棟の時期を大別すると、縄文時代10棟、平安時代5棟である。縄文時代竪穴住居址の占地は2ヶ所で、1つは段丘縁辺部と一つは斜面下部である。縄文時代竪穴住居址のプランは円形・楕円形で、規模は最大径5m前後、最小径3m前後である。斜面における構築のため、南側の壁が検出されないものが多い。床面は全面が検出されるものは少なく、壁同様南側に貼れたであろう床面は検出されなかった。柱穴は4ヶを主体に7ヶ～24ヶ検出されたものもある。炉は石囲い炉と地床炉に分かれる。床面上の位置は中央か、やや片寄った所である。時期的には縄文時代中期を主体とし晩期が1棟である。平安時代竪穴住居址5棟が検出され、プランは方形・長方形である。規模は方形が5.0m×4.5mと4.0m×4.0mの2棟である。これらは東壁と西壁で接しており、東側が古い。床面はほぼ平坦であるが、斜面に構築したため、一部貼ったと思われる部分が欠如している。柱穴は壁際に検出され、径20cm、深さ40cmであるがこれも床と同様南側が検出されない。カマドは1棟のみ東壁北寄りに構築されている。2棟ともほぼ中央部に地床炉をもっている。長方形のものは3棟のうち1棟は方形住居址で削平され北壁の一部が検出されたのみである。2棟の規模は11.5m×4.0m・11.0m×4.5mと推定され、床面の残存部は平坦である。方形と同様、斜面を切り出して構築している。床面には周溝が一部に認められる。柱穴は壁柱穴と主柱穴が検出された。主柱穴は対となる位置に大部分あるが、大きさに差異が認められ、特に西側住居址南側主柱穴列の中央部に2ヶ径の大きいのが認められ、入口施設を思わせる。カマドは検出されず、地床炉が床面中央部に1列に

3ケつくられている。出土遺物は土師器。

〈竪穴状遺構〉

調査区北東隅付近で検出された円形のプランをもつ、規模3.3m×3.2mで壁高35～20cmである。床面は平坦でかたくしまっているが、周溝・柱穴・炉が検出されない。出土遺物は縄文土器片である。

〈ピット類〉

ピット類36基であるが、占地は2ヶ所にわかれ、住居址の占地とほぼ同一である。ピットはプランによって円形と方形に大別される。円形は、フラスコ形とビーカー形、皿状とに分けられ、フラスコ形ピットは開口部径1.0m、深さ0.7mである。ビーカー形ピットは開口部径1.7m、深さ1.5mで斜面西側に環状に配置されている。埋土中に灰白色の十和田a降下火山灰が上位に堆積している。皿状ピットは斜面中央部付近につくられ、開口部径0.7m、底部径0.6m、深さ0.2mであり、遺物は殆ど出土しないが、1基から縄文土器片(中期末)と桃の種子が多量に出土した。方形のものはビーカー形ピットと同じ位置にあり、3基検出された。規模は開口部で一辺4～5m、深さ1.0～1.3m、底面中央部に柱穴状のものが2ヶある。出土遺物はないが、1基に植物性の炭化物が床面近くで認められた。1基はビーカー形ピットを埋めてつくられている。時期的には、平安時代住居址に近いと考えられる。

〈陥し穴状遺構〉

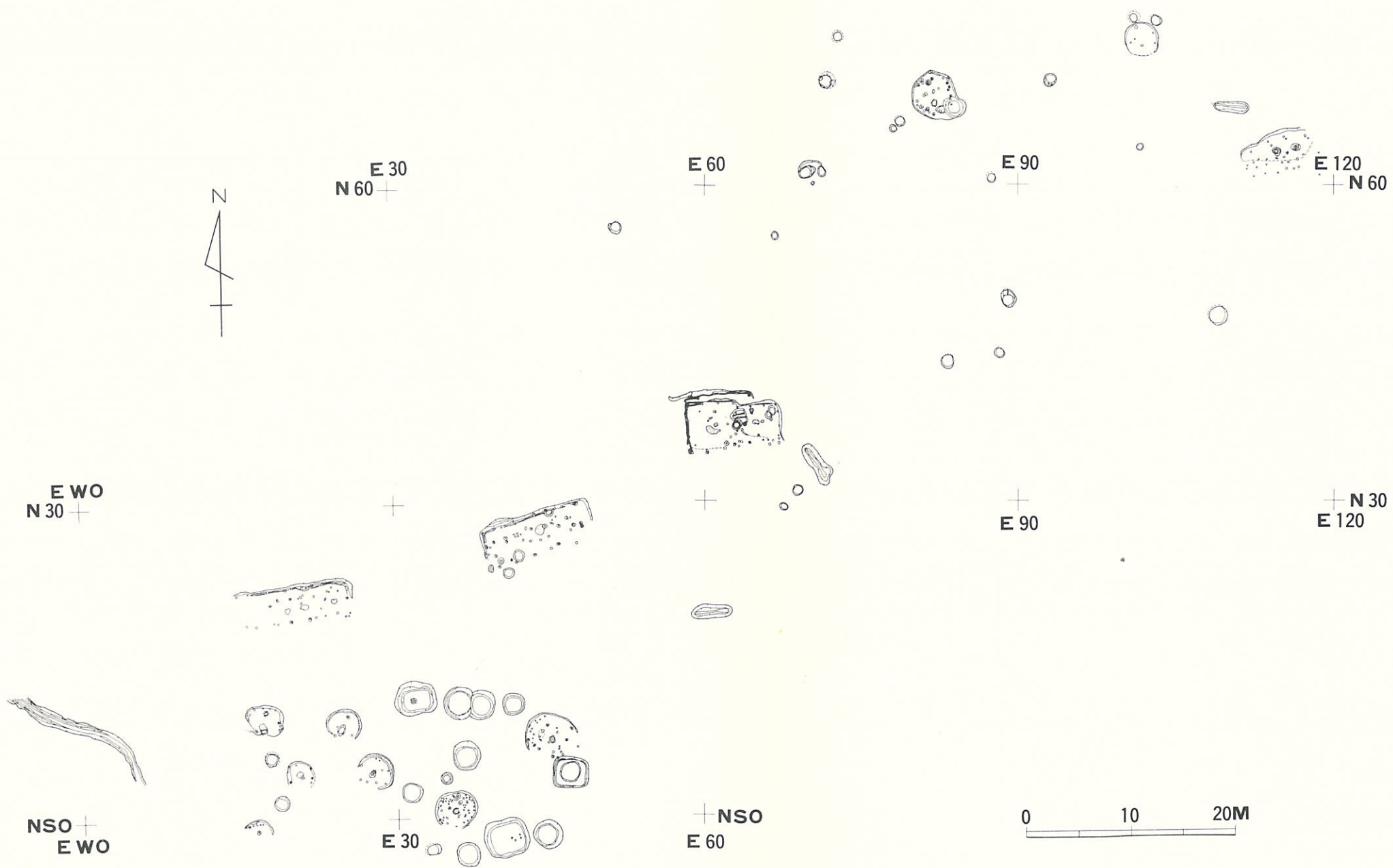
この遺構は3基検出されている。それぞれ単独で検出され、長軸方向は2基が東西方向、1基が北西方向である。規模は長軸2.4m～3.7mで短軸は0.9m～1.2m、深さ1.0m～1.4mである。底面の柱穴は5ヶあるものが1基ある。他の2基はない。柱穴のあるものは荒屋II遺跡と同系列で県内各地で検出されている陥し穴状遺構と同じ形態でない。出土遺物はない。

〈出土遺物〉

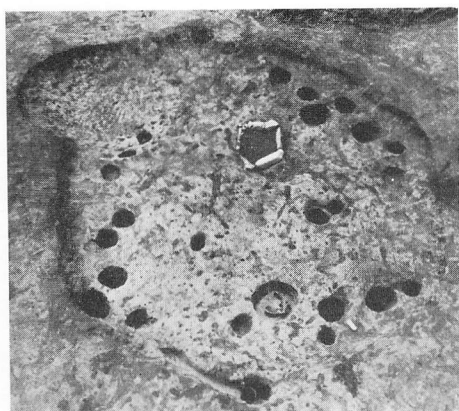
出土遺物は土器・石器である。土器は縄文土器と土師器であり、縄文土器は中期末葉と晩期に属するもので、復元可能も数点ある。土師器はロクロ使用土師器で甕はケズリが粗い。石器は石鏃・石匙・石斧・スクレーパー、磨石である。

3. ま と め

傾斜面を占地してつくられた住居址が大部分のため、完掘できるものは少なかったが、ほぼ同時期集落の占地としては興味を引く遺跡である。又、平安時代の住居址としては、最大のものと考えられる長軸11mのもの3棟が存在しているが、単純に住居址とは考えがたく、別な機能を考えなければならないのではないだろうか。又、方形ピットの時期について明確にはならないが、水沢市袖谷地遺跡・南矢中遺跡において検出されたものと同じ形状を示している事からも時代の決定の資料として重要な手掛りを得たものと思う。



有矢野遺跡遺構配置図



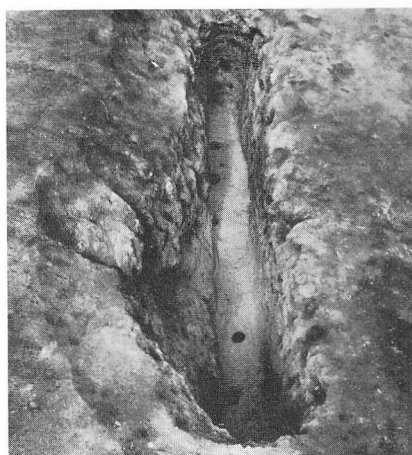
D IV-1 住居址



B II-6 住居址



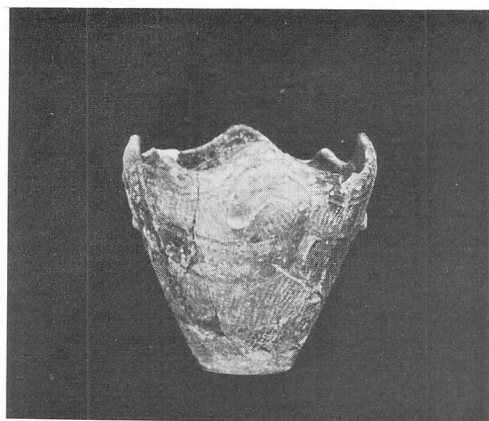
D III-3 住居址



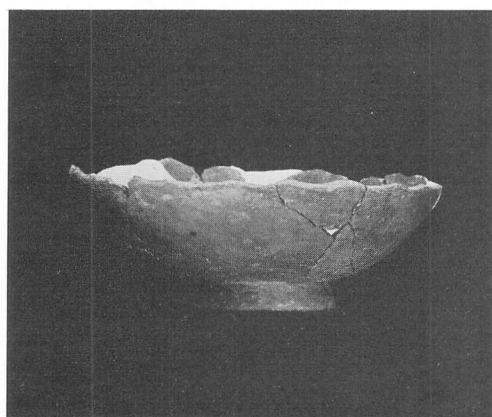
D II-101 陥し穴状遺構



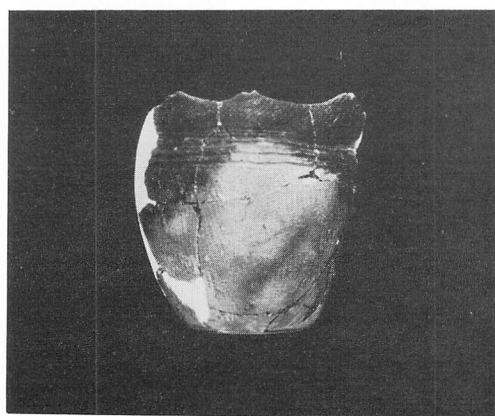
C II-54 ピット



B II - 6 住居址



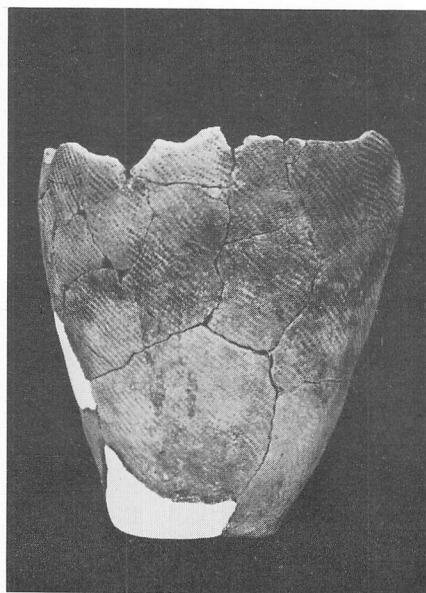
D IV - 53 ピット



E IV - 52 ピット



D IV - 15 埋設土器遺構



D IV - 1 住居址

(10) 上の山 X 遺跡

(10) 遺跡所在地 二戸郡安代町上の山
事業主体 日本道路公団仙台建設局
調査期間 昭和54年8月1日～8月31日
調査対象面積 570㎡
発掘面積 570㎡
遺跡記号 UYX79
協力機関 安代町

1. 遺跡の立地

本遺跡は国鉄花輪線荒屋新町駅北西約 1.8 km 安代町役場北西約 1.6 km に位置する。北流する安比川に支流の曲田川が合流する付近の北岸の段丘面上に立地する。同一段丘面に載る有矢野遺跡・曲田遺跡とは東西の小規模な浸蝕谷によって隔てられている。調査区域は遺跡南段丘縁の一部である。標高 310 m、曲田川との比高は 20m である。周辺の遺跡としては有矢野遺跡・保土沢遺跡・上の山館・曲田遺跡がある。

2. 調査の概要

本遺跡は、東北縦貫自動車道建設に伴う緊急事前調査である。調査は路線内全域を粗掘、遺構検出を行った。その結果竪穴住居址 4 棟、ピット 8 基、陥し穴状遺構 3 基が検出された。以下調査の概要である。

〈竪穴住居址〉

竪穴住居址 4 棟検出されたが時代別によると縄文時代中期 3 棟と平安時代 1 棟である。縄文時代竪穴住居址で完掘できたのはない。路線外に延びるもの 1 棟、段丘縁の浸蝕によって崩壊しているもの 1 棟、炉と柱穴のみのもの 1 棟である。検出されたプランは円形と思われ、規模は最大径 8.3 m、最小径 4.3 m である。壁高は 46cm である。床面は平坦で比較的しまっている。周溝は認められない。柱穴は検出できなかつたものもある。検出できたものは 4 ケである。炉はつくり変えも含めて、地床炉が 3 基で石囲炉が 1 基である。出土遺物は縄文時代中期の深鉢を主体としているが、柱穴よりミニチュア土器の完形が出土している。平安時代住居址のプランは方形で規模は 4.0 m × 4.3 m、壁高約 0.5 m である。床面は平坦で周溝はめぐるが柱穴は検出されない。カマドは南壁のやや西寄りに位置している。袖は安山岩を用いて構築し、煙道はなく、燃焼部より急激に立ち上がり煙出しとなる。いわゆる県内で言う「関東型」のカマドである。南壁両端に貯蔵穴状のピットがあり、土師器片が出土した。出土遺物はロクロ使用土師器である。

〈ピット〉

ピットは 8 基検出されたが、形状から大別するとフラスコ形ピット・ピーカー形ピット・皿状ピット・方形ピットとなる。このうちフラスコ形ピットが多く 5 基を数え、他は 1 基のみである。フラスコ形ピットのプランは円形で 1 基を除いて全て住居址内に存在する。規模は開口部最大径 2.25 m、最小径 1.1 m で深さは最大 1.26 m、最小 0.55 m である。出土遺物は埋土から縄文土器片が数点である。ピーカー形ピットはプランは円形で規模は開口部 1.42 m、深さ 1.26 m で出土遺物は埋土から縄文土器片が数点である。皿状ピットはプランは円形で規模は開口部 1.15 m、深さ 0.36 m で出土遺物は埋土から縄文土器片が数点である。方形ピットは規模 1.55 m

×1.35m、深さ0.92mで、埋土より平安時代のものと思われる。出土遺物は鉄器1点ある。

〈陥し穴状遺構〉

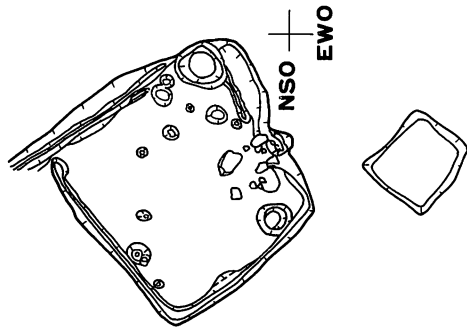
陥し穴状遺構は3基検出され、2基は長軸を同一方向に向け並列している。1基は平安住居址によって切られている。長軸はいずれも3mを超えており短軸は1m前後である。出土遺物はない。

〈出土遺物〉

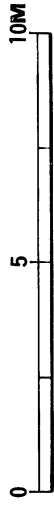
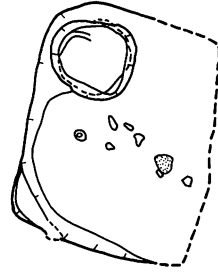
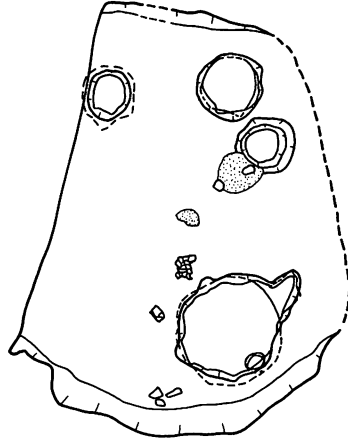
出土遺物は土器と鉄器である。土器は縄文時代中期・後期・晩期であり、ロクロ使用土師器とロクロ非使用土師器である。縄文土器は深鉢を主体として出土しており、中期土器は遺構床面、後期土器は埋土中、晩期土器は遺構外である。ロクロ使用土師器は高台坯の台部が出土しており、ロクロ非使用土師器はケズリ目の粗い甕と手こね土器が出土している。この手こね土器は最大幅が底部にあり、口縁部に向かって内湾し、口縁部から口唇部にかけて、水平に近い屈折を外側にもつもので器名不明のものである。

3. ま と め

調査面積が極めて小面積にもかかわらず、多くの遺構が出たことに注目したい。小谷に区切られた段丘全域に遺構が広がるものと考えられ、今回の調査は南端の一部分であることから、今後の保存対策に一考を要しよう。



INSO
E 15



上の山X 遺跡遺構配置図



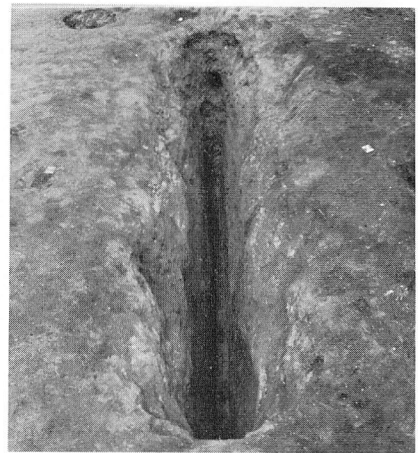
B I - 2 住居址



A II - 51 ピット



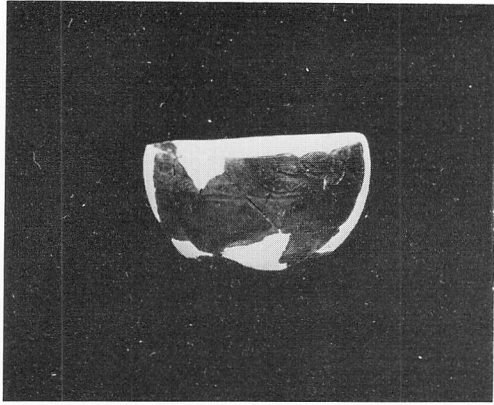
B II - 1 住居址



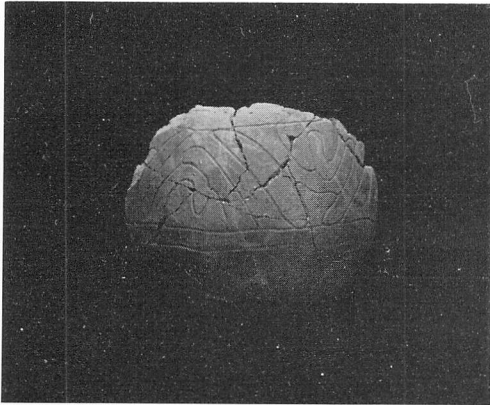
B I - 101 陥し穴状遺構



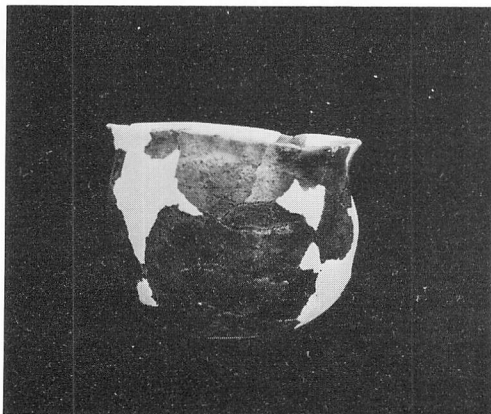
A II - 1 住居址



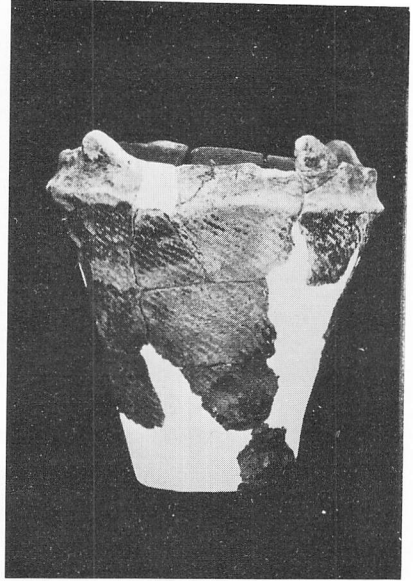
B I - 2 住居址



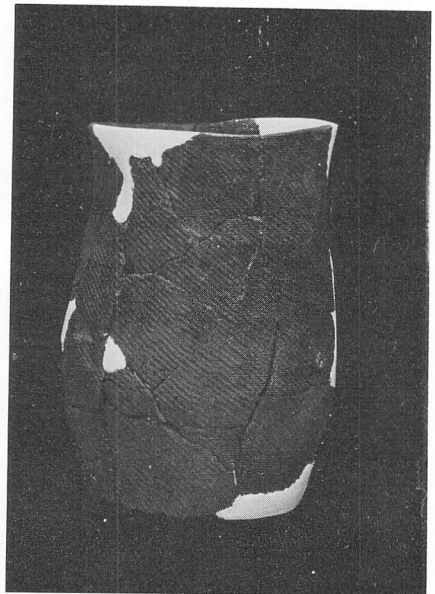
B I - 2 住居址



A II - 1 住居址



B I - 1 住居址



B I - 2 住居址

(11) 越戸 II 遺跡

- (11) 遺跡所在地 二戸郡安代町字越戸
事業主体 日本道路公団仙台建設局
調査期間 昭和54年9月1日～11月2日
調査対象面積 4,730㎡
発掘面積 4,730㎡
遺跡記号 KT II 79
協力機関 安代町

1. 遺跡の立地

本遺跡は国道 282 号線貝梨峠南約 1 km、旧津軽街道梨木峠の北西約 0.5 km に位置する。遺跡付近の地形は梨木峠を尾根の鞍部として、その北西と南東方向に緩傾斜地がほぼ円形に分布しており、この緩傾斜地の北西部に存在する。周辺の遺跡としては越戸 I 遺跡がある。

2. 調査の概要

本遺跡の調査は東北縦貫自動車道建設に伴う緊急事前調査である。本遺跡の調査は、当初の調査計画から除外されていたが、トンネル入口付近に存在するため、調査が急がれ、9 月から開始されたものである。調査区域全面に粗掘をかけ、遺構検出の結果、竪穴住居址 8 棟、ピット 4 基、陥し穴状遺構 2 基、炉址 1 基、焼土遺構 1 基を精査した。以下調査の概要である。

〈竪穴住居址〉

竪穴住居址 8 棟は全て縄文時代で中期末葉から後期初頭のものと考えられる。プランは円形・楕円形・隅丸方形である。規模は最大 3.9 m × 3.9 m、最小 3.2 m × 3.1 m で 4 m 以下の小規模のもので、ほぼ同規模である。壁は傾斜面を掘り込んで構築しているため様でないが、深い所で約 0.7 m あり、一部では検出されない。床面は平坦で比較的固い。柱穴は全住居址で検出され、4～17ヶである。主柱穴は、床面内部に存在する。炉は石囲炉と地床炉とを併せもつものが多い。石囲炉は複式炉の形状をとどめているもの 3 基であるが、他の石囲炉も複式炉の名ごりを残しており、壁際に位置しているものが多い。地床炉は床面中央部につくられ、焼土の残存は石囲炉よりもよい。遺物の出土は破片が主であり、全く出土しない住居址も 1 棟ある。

〈ピット〉

検出されたピット 4 基はフラスコ形ピット 2 基・皿状ピット 2 基である。フラスコ形ピットのプランは円形で開口部径 1.1 m、深さ 0.5 m の規模と開口部径 1.2 m、深さ 0.8 m の規模である。出土遺物は埋土から縄文土器片がある。時期は 1 基を埋め込んで縄文時代中期末住居址が構築されていることから中期末以前と考えられる。皿状ピットはプランが楕円形で、開口部径 1.1 m × 1.3 m・1.4 m × 1.6 m、深さは 30 cm 前後である。埋土は単層で出土遺物はない。

〈陥し穴状遺構〉

陥し穴状遺構は 2 基で長軸 3.1 m・2.1 m で短軸 0.6 m・0.1 m で深さ 1.4 m・0.6 m で底部には柱穴は持たない。出土遺物はない。

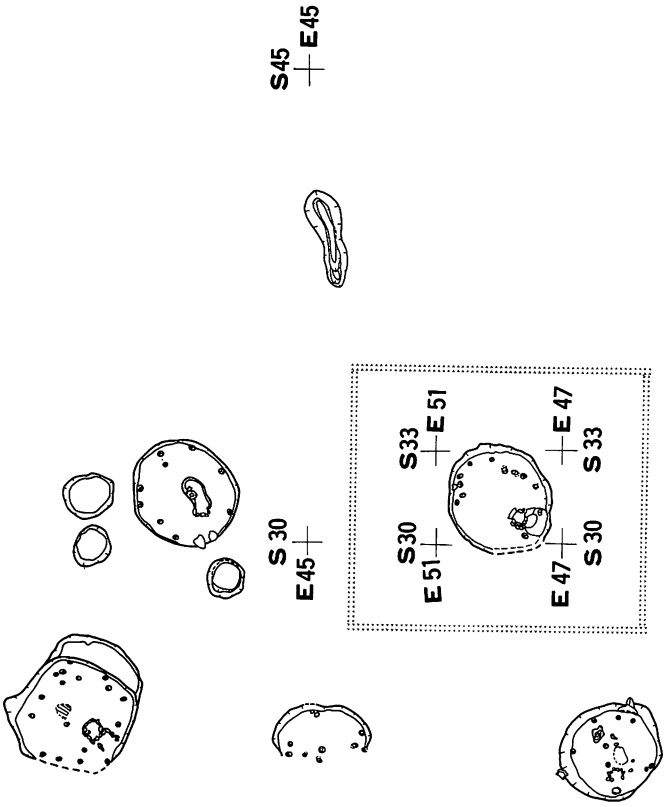
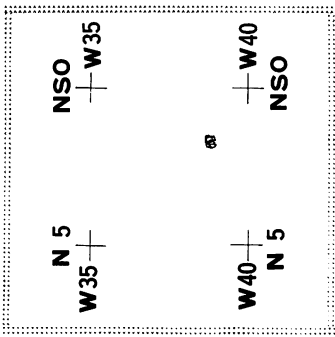
〈出土遺物〉

出土遺物は土器と石器で、土器は全て縄文土器であり器種は深鉢が主体である。時期として

は中期末（大木10式併行期）後期初頭（門前式）である。石器は磨石・スクレーパー・フレイクである。

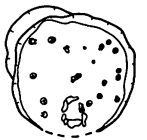
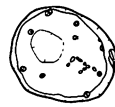
3. ま と め

緩傾斜地における遺跡の立地についての資料が得られた。時期差の少ない集落で、切り合い関係はない。又複式炉の終末的様相を呈しており、更に石囲炉の他に地床炉を設けている事など炉についての新しい資料が得られた。安代町西部旧田山地区における資料としても貴重であり、又分水嶺の貝梨峠西部として秋田県の遺跡との対比が必要となろう。

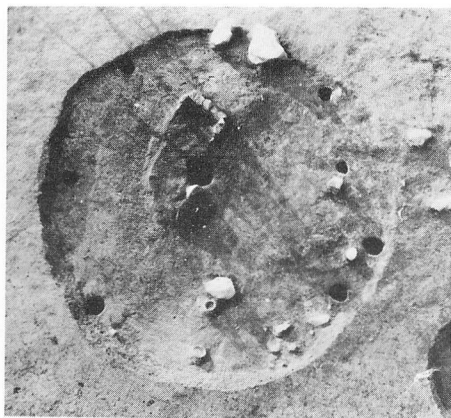


—E 30
—S 45

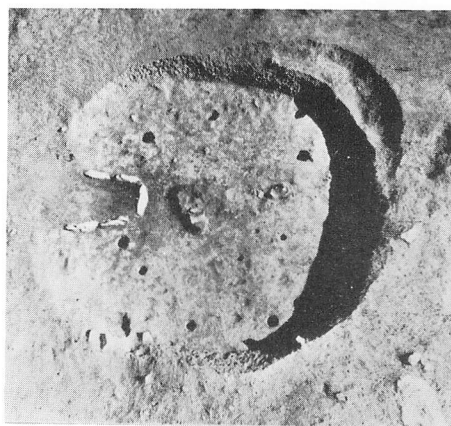
—E 30
—S 30



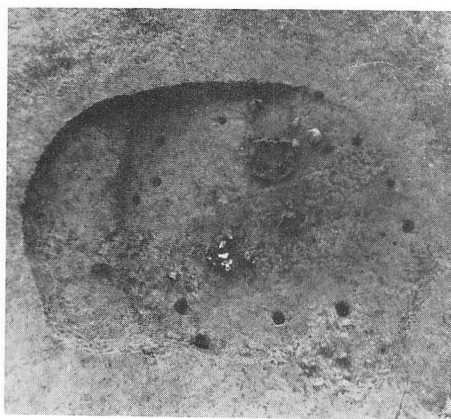
越戸Ⅱ遺跡遺構配置図



E IV-1 住居址



D III-2 住居址



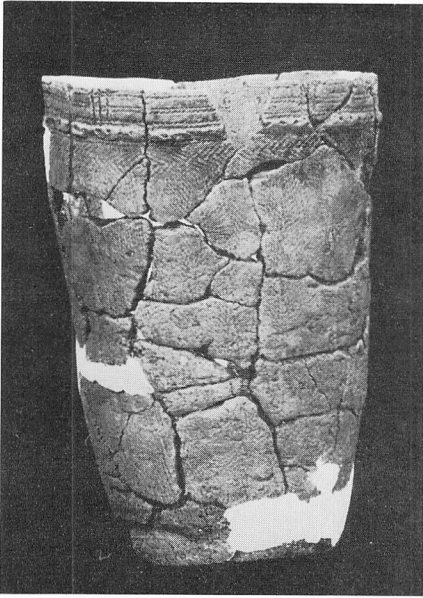
D IV-1 住居址



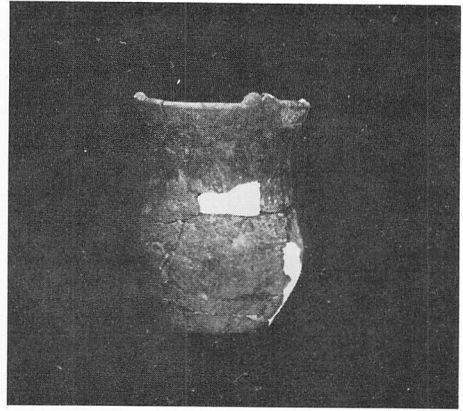
E IV-101 陥し穴状遺構



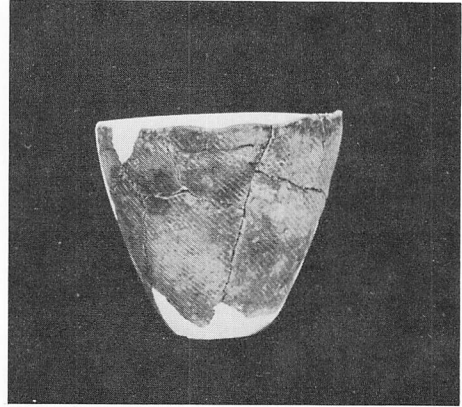
D IV-51 ピット



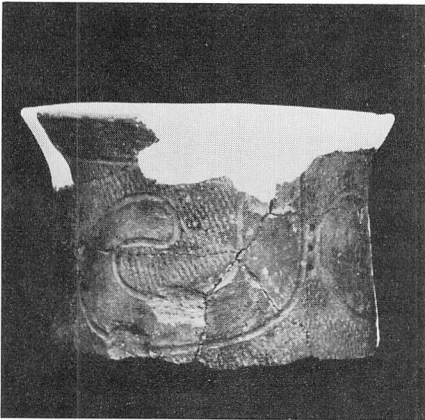
E IV 区



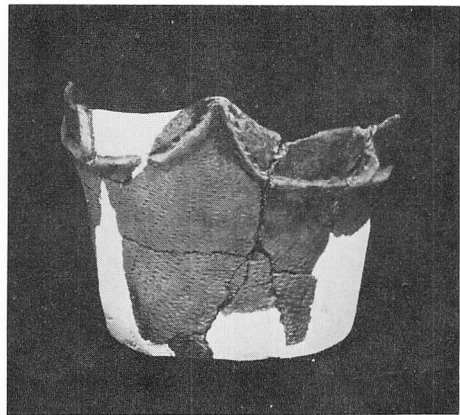
D IV-1 住居址



E IV 区

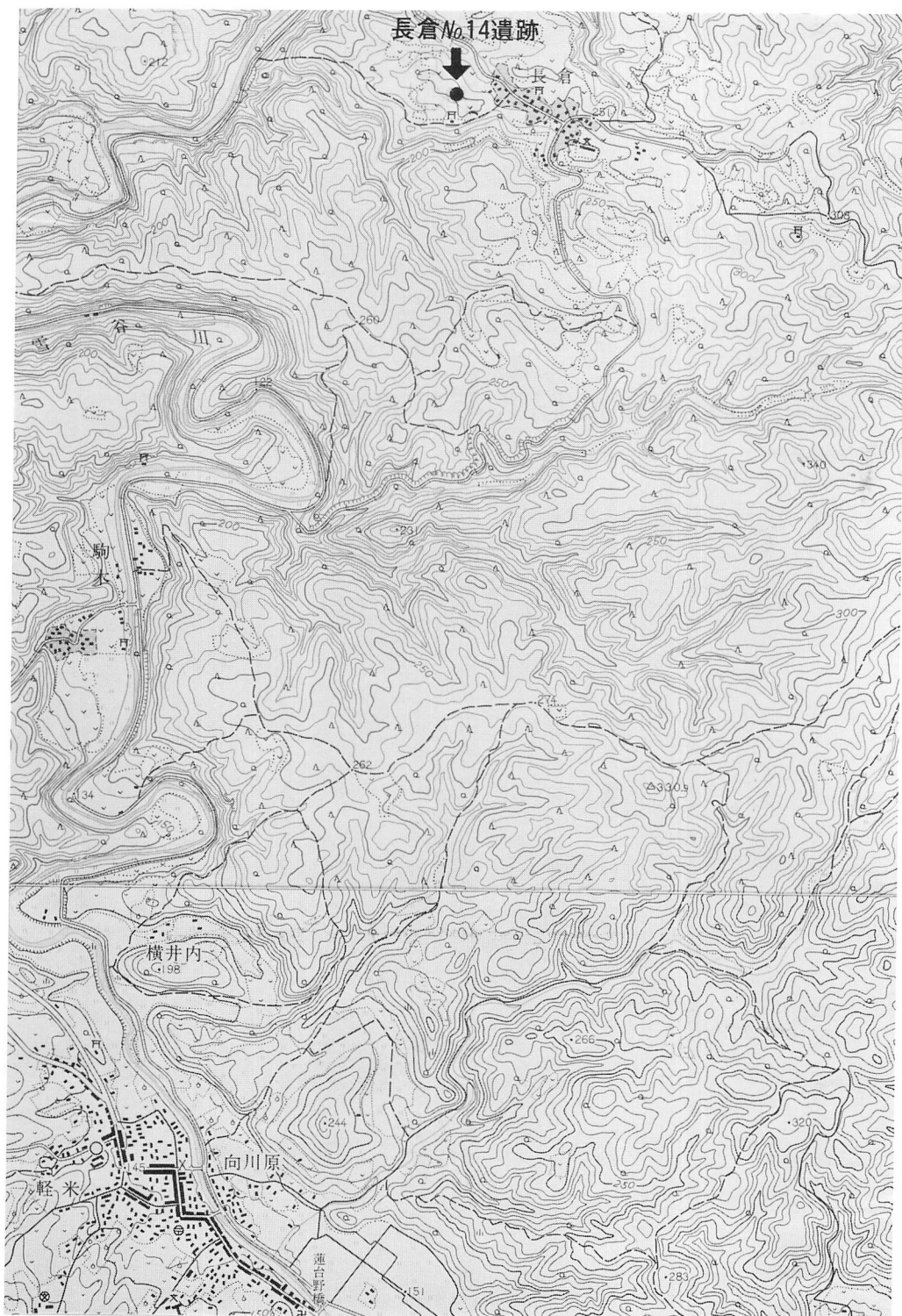


D IV-3 住居址



D III-2 住居址

IV 東北農政局八戸平原開拓事業關係



八戸平原開拓関連遺跡位置図

(1) 長倉 No.14 遺跡

- (1) 遺跡所在地 九戸郡軽米町大字長倉
事業主体 東北農政局八戸平原開拓事務所
調査機関 昭和54年10月1日～11月2日
調査対象面積 3,372㎡
発掘面積 3,372㎡
遺跡記号 NK14-79
協力機関 軽米町

1. 遺跡の立地

本遺跡は軽米町役場北 4.5kmに位置する。長倉地区は北上山地北端に位置し、低位の起伏のある丘陵が多く分布している。遺跡もこの丘陵頂部に載り、南側と西側は開析を受けて深い谷を刻んでいる。丘陵は八戸火山灰に覆われ、その上位に南部浮石層がのる。周辺の遺跡としては長倉遺跡があり、又周辺一帯の丘陵は遺跡が点在している。

2. 調査の概要

本遺跡の調査は八戸平原開拓事業による緊急事前調査である。調査は本年度事業地区切土区域全域に粗掘をかけ、遺構検出を行った。その結果竪穴状遺構 1 棟、溝 1 条、ピット 7 基が検出された。以下調査の概要である。

〈竪穴状遺構〉

検出された竪穴状遺構はプランは不整楕円形で規模は 3.9 m × 3.0 m、深さ 40cm である。床面は比較的平坦であるが、周溝・柱穴は検出されず、炉も検出できなかった。

〈溝 跡〉

溝 1 条は、調査区域を東西方向に走り東西とも区域外まで延びている。溝上幅 46cm、深さ 32 cm、長さ 80m で、遺物は縄文土器破片少量出土。時期不明である。

〈ピット〉

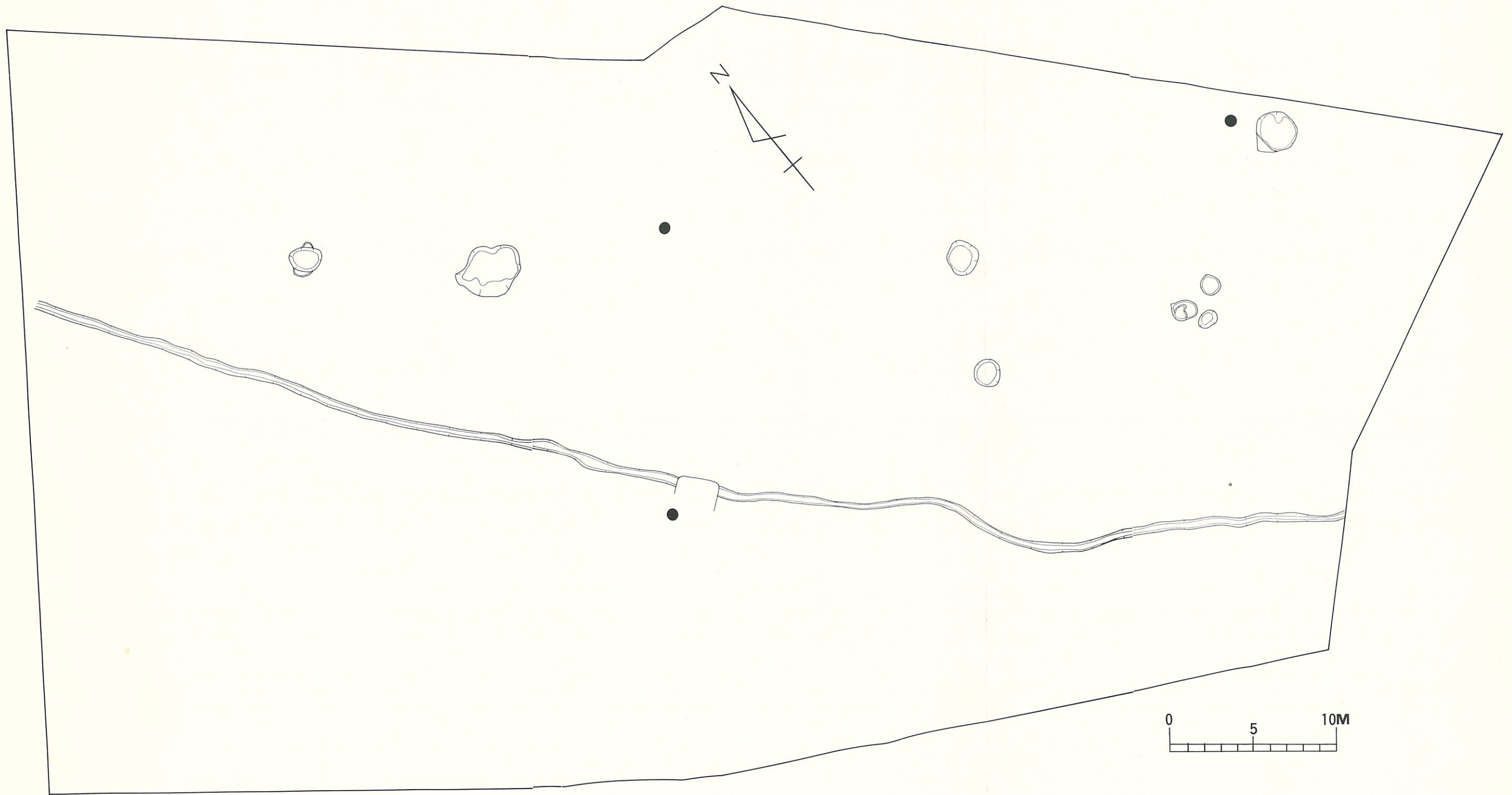
ピットは 7 基検出された。プランは円形と楕円形で規模は最大 2.0 m × 2.6 m、最小 1.2 m × 0.9 m、深さは深いもので 0.9 m、浅いもの 0.4 m である。このうち 2 基の埋土から縄文土器細片が出土した。時期・性格とも不明である。

〈出土遺物〉

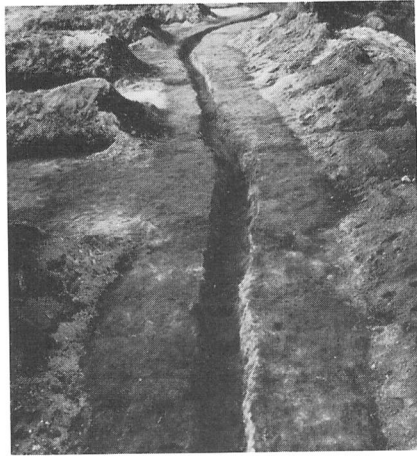
縄文土器細片で、時期は後期と考えられる。

3. ま と め

丘陵頂部は、耕作及び降雨による削平で、上部地層が殆ど流失しており、通常岩手県北における縄文時代前期・中期の生活基盤層の南部浮石層の上位火山灰層が見当たらない。又南部浮石層も流失し斜面に厚く再堆積をしている。これらの事から、縄文時代早期の遺構か、上位生活層より深く掘られたであろうピット類しか痕跡をとどめ得ないであろう。今回の調査においては縄文時代早期の遺物は全く採取されないで早期の遺構は検出されず、深く掘り込まれたピットの残存部のみ検出されたものと思う。



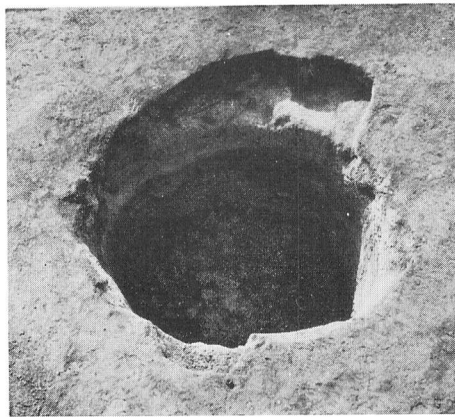
長倉 No.14 遺跡遺構配置図



101号溝



56号ピット



57号ピット

岩手県埋文センター文化財調査報告書第9集
岩手県埋蔵文化財発掘調査略報
(昭和54年度分)

昭和55年3月20日印刷

昭和55年3月25日発行

発行 財団法人岩手県埋蔵文化財センター

〒020 盛岡市向中野字向中野39番1号

TEL (0196) 35-6622

印刷 河北印刷株式会社

〒020 盛岡市本町通2丁目8番7号

TEL (0196) 23-4256
